

ばんえい

DRAFT.RACE

NO. 4



目次

会長挨拶	二
ばんえい競馬への提言	三
新競馬場建設の想い出	五
昭和四十九年度の市営競馬を迎えるにあたって	六
ドサンコ	七
ばんえい競走公正確保対策の樹立	九
ばんえい競馬座談会	一〇
引退馬表彰	一七
大成功をおさめた大井アトラクション	一八
動き出した馬産奨励事業	二一
ばんえい競走とはどんな競走か	二四
芸術祭優秀賞に輝く「ばんえい」	三二
アメリカ競馬三週間	三六
マスコミに取上げられたばんえい競走	四二
番組編成要項	四八
報償費	四八
リーディングジョッキー	四九
ばんえい使り	五〇
種雄馬ランキング	五四
輸入仏國産種雄馬	五五
四八年主催者別売得金成績	五七
四九年開催日程	五八

この群衆にこたえよ
ラテン



会報の発刊に寄せて

北海道市営競馬協議会

会長 五十嵐 広 三

員においても三三万一千六百人となり、伸び率は前年対比それぞれ一六五%、一三二%と驚異的な増加を示しております。

また、昭和四十八年八月には、東京大井競馬場において初のばんえい競走アトラクションが行なわれ、各報導機関のPRの影響等も加わり、各市の発売額の伸びは全国に比較しても、それぞれ上位にランクされており、競馬界における「ばんえい競馬」の位置づけが強力になったものと確信いたします。

このように、ばんえい競馬が全国的に見ても立派な成績をあげられたことは、関係各位の努力は勿論、最近における国民生活の中で大衆娯楽としてファンの支持層が厚くなった現われであり、その意義は極めて大きいものがございます。

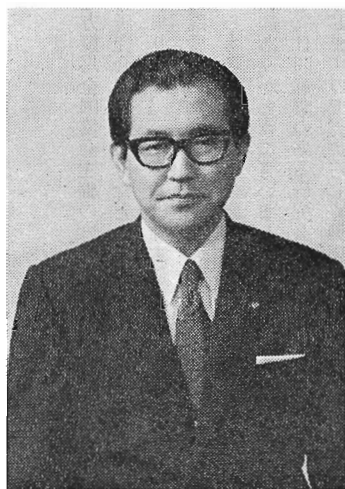
また、特に近年ばんえい競馬における公正対策問題の重要課題として、諸施設の整備があげられますが、各市それぞれの努力により結果をみ、北見市、帯広市においては、昭和四十九年六年度頃に近代的な競馬場が完成する予定とのことでありますし、また、旭川市においても昭和五十年年度完成に向けて全力をあげ、関係者一同近代的競馬場の実現に努力を

傾注しているところでございます。

なお、関係者各位の御協力により、全国公営競馬主催者協議会主催のアメリカ競馬事情視察に、一昨年帯広市の花房氏（当時農政課長）を送ることができ、引き続き昨年九月二十六日から十月十八日まで、アメリカ合衆国及びカナダの競馬事情視察に旭川市審議員大久保吉藏氏と、本会事務局長内田靖夫氏の二名が選出され、ベイ、メイドウズ競馬場他九カ所を視察して帰国されたわけでありましたが実際の体験を生かし、これからの競馬場施設の整備及び運営面において、指導的な立場で貢献いただけるものと確信もし、また、その活躍を御期待申し上げるところでございます。

新年度においては、公正確保の面から執務体制の強化、施設等の改善整備に十分力を入れるほか、きゅう舎側（馬主・調教師・騎手・きゅう務員）の経済向上を図るべき職能分離制度を確立しつつ前向きで検討を重ねており、これ等の諸問題が解決されることにより、名義貸し防止等競馬三悪の完全追放がなされるのではないかと考えられます。

その他発生する諸問題についても即時対処し、激増するファンに対し明朗な競馬を運営していくことが、主催者並びにきゅう舎関係者の使命であり、今後関係者各位の深い御理解と御協力を得て、初期の目的に向けて今後とも邁進して参る所存でございますので、絶大な御支援と御指導をお願い申しあげ御挨拶といたします。



昭和四十九年度の会報発刊にあたり、謹んで皆様方の御健勝を、心からお慶び申し上げます。

日頃市営競馬の運営につきましては、関係各位の御理解ある御協力を戴き深く感謝申し上げます。

さて、昭和四十八年度の市営競馬を顧りみますと、市営旭川競馬を五月三日皮切りとして市営岩見沢競馬の最終十一月十八日まで開催し、開催回数においては旭川、帯広の二市が前年より各一回増となり、十六回九十六日の長期にわたり開催されました。

勝馬投票券の発売総額も念願の一〇〇億円を突破し、一〇〇億七千三〇〇万円、入場人

ばんえい競馬への

提言

四八・八、第一回ばんえい競馬実務研究会 地方競馬全国協会中村常務理事挨拶より

本日は地方競馬全国協会主催のばんえい競馬実務研究会を催しましたところ、御多忙中お集り願ひ、道庁からは鈴木競技課長の御臨席をいただき、また市営競馬協議会からも多数の関係者の御参加をいただき誠にありがとうございました。

本日より三日間意識のある研究会を催したいと存じますので、よろしく御願ひ申し上げます。

最近中央競馬、地方競馬を問わず、競馬のブームは皆様には、よく御存じのとおりであります。ばんえい競馬においても、一日二億、一開催八億の売上げの声は明日にも聞かれようとしており、その繁栄については、御同慶のいたりと存

私も二十数年来ばんえい競馬を拝見してきておりますが、今日のばんえい競馬は昔日の面影は全くなく、お百姓さんや、馬車ひきさんのお祭り騒ぎの域は、すでに脱していることを痛切に感じている次第であります。

従いまして平地競馬と同様、ばんえい競馬も現状から見ますと施行の重点が二つあるのではなからうかと思われれます。先ずその一つは、公正な施行をすることによってファンの秩序維持をはかる。その二としては厩舎関係者の自覚と努力によって公正の確保をはかる。

今後はこの二点に添うような施行方法でなければならぬと思ひます。

それには施設の整備、関係者の自覚と規律のある行動、主催者の公正な施行に対する熱意などがなければならぬと思ひます。そういう意味あいにおいて、今回のばんえい競馬実務研究会におきましても、施行方法などについての協会側の提案事項を十分相互検討し研究を重ねていただきたいと存じます。

丁度ばんえい競馬の関係者の皆様お集りのこの機会に少々時間を拝借いたしました、私のもっているばんえい競馬の将来ということについての考えをお話したいと存じます。この方面に長い経験をおもちの専門の方々を前にて私がこのようなことを申し上げる事は、蛇足かと思ひますが、卒直なところを申し上げます。御参考にお供したいと思います。

私は以前は、ばんえい競馬は競馬の本

流ではないのではないかと感じを持っておりました。単に農馬や使役馬による余暇利用、アルバイトにすぎない、ファンから見ればお祭りさわぎの農村娯楽であるから厳しい競馬の施行体勢の中に入れてもよいのではないか、また他の関係者においても、ばんえい競馬を置きざりにしていた感があつたわけでありました。先程申し上げましたとおり、近年のばんえい競馬の躍進、充実の情勢において今迄の観念では、やっていけず、主催者も地方財政に寄与するところが大きいことから、従来のような、お祭、余興的な施行では危険をはらむのではないかと考えられます。そこで従来に使役馬、農馬の娯楽という観点から、更に進めて、サラブレッドが「競走」という能力検定の結果を利用して改良、増殖を続け繁栄してきた今日のように、ばん馬もやる必要性があるわけでありました。

最近では使役馬として見受けられなくなり、その数も四万数千頭程度に減少した現状において、今さら改良、増殖ということはおこがましいことであるが、ばんえい競馬は、ばん馬のアルバイト的また、種馬を種付余暇を利用してカイバ代のかせぎというようなあり方であつては、ならないのであります。

ばんえい競馬は、ばん馬の生産と直結した競馬でなければならぬ。この直結とは、混用することではなく、競走用馬と繁殖用馬、産業用馬とは一線を画しながらも、生産と連携を保ちつつ実施をし

ていく。

例えば繁殖牝馬が不受胎であったからといって遊ばしておくのは不経済であるから来春まで競馬に出走させるというところではなく、その馬の競走成績が、今後の生産の参考に反映してゆく方向にもっていくということがあります。

それには最も確実な方法としては、種馬の取得は競走上りから行なうことと、ばん馬の登録制度であります。

登録によって、血統及び個体識別を明確にし四つあしさえあれば競馬に使用するという時代は過ぎたのであり血統なり能力の優劣によって選択、淘汰されて繁殖に供されるという軽種と同じようにばん馬も、もっていくべきである。このことは生産者も充分自覚してもらわなければならず、主催者も番組編成方針をそのような方向にもって行くようご配慮していただくことが望ましい。このことについては、道庁をはじめとして馬事協会などにおいても努力をされていることですが、ファンの立場に立っての競馬の公正化、その結果得られる収益、それと同時に馬はギャンブルのサイコロであるという観念はすでに過ぎ、主催者も明確な施行方針をもって臨んでいただきたいと思うのであります。

ばんえい競馬をますます繁栄させるには血統登録を明確にすることによって初めてその目的が達せられるということをし強く申し上げる次第であります。次にばんえい競馬が本来の競馬らしい公正さを

内外に示すためには、関係者の明確な職能分離をすることがあります。

競馬は馬主、調教師、騎手、厩務員がそれぞれの職分に応じて最善をつくし競走に臨むことが、肝要であり、そこに自から相互監視の効果をもたらす利点もあるわけであります。わが国の地方競馬も平地競走では先年来実質上も規程の上からも、この四者分離は軌道に乗っているであります。ひとりばんえい競馬が依然として例外措置に甘んじ一人二役、三役を兼ねるのが普通となっている現状はばんえい競馬の発展を阻害すること甚しいと考えられます。

関係者の努力によって一日も早く本来の型にもっていききたいと念願致しております。

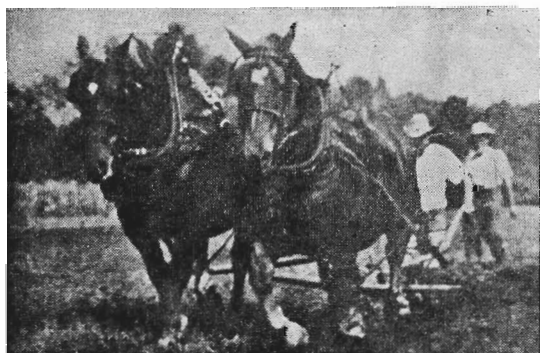
最後にばんえい競馬のPRについてであります。先般大井競馬場で行なわれたばんえい競馬のアトラクション、レースは、非常に反響を呼び、また、最近においては、さかんにテレビに取材されたり、ドラマに登場したりするなど全国的にばんえい競馬を理解させていることは、大いに効果があると思われまます。今後も機会を求めて内地の各地でこの種、催しをやられたら結構と存じます。

しかしながら、ばんえい競馬を实际上他の地区において実施するということになりますと、レース途中「止まる」という競走であることが、都会のファンに理解されるかどうか一抹の不安を感じるのがあります。速歩競走というものが、日

本においては理解されなかったことは、抑制しながら走らせるといふレースであれば、ばんえい競走もこれと同様弱点をもっているのではないかと、それはレース途中「止まる」ということでもあります。

しかしながら途中で止まらない競走にもっていくことも非常に困難であり、この点をファンに理解させるには相当の努力を要するものと考えられます。この点についても充分に関係者一同研究を重ねていかねばならないと存じます。かかる意味でこの研究会においても充分ご検討をお願いする次第であります。御静聴ありがとうございます。

(おわり)



2 頭 曳 馬 耕



8 頭 曳 馬 耕

U.S.A

ドラフト ホース ジャーナル

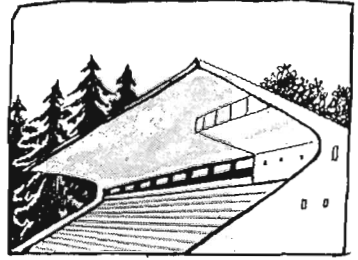
1973. 8 より

新競馬場

建設の想い出

北見市農務課

主任技師 坂井 清治



北見の新しい競馬場の概要については別に記載するが、ここでは新競馬場の出来る迄を想い出すままに書いてみたいと思います。

丁度昭和三十九年だったと思います。四、五年前から走路内に工事を進めていた野球場、陸上競技場等ができましたが、当初の計画と異なり、向い正面を走る馬も見えなくなり、名前も「東陵運動公園」と呼ばれるようになりました。走路内を畑にして置くより、市民のために利用する事は、合理的であり、全国の競馬場の中で最も早く着目した点は、大きく評価しても良いと思う。しかし、いかにせん、走る馬が見えないようでは、競馬にならない。これはこの土地が固いため、計画より二米も高くなってしまったためである。

何んとかせねばと思ひ、当時の助役と相談したが、

「低い向い正面に土を積んでは？」という事になり測量したが、三万リユ一ベの土が必要だと判明した。それでこの際、思い切って移転を考えては？という事になったが、ひさしを貸して母屋を取られた感じになり、割り切れない思いをした。しかし環境情勢等を考えて見ると学校等も近くにあり、駐車場もないため移転が最良の方策だと意見の一致を見た。

そうこうしている内に、市長も変わったが、宇佐美市長も、この移転を了解した。しかし移転のためには、莫大な資金が必要だ。旧競馬場でも売却できれば簡単だが、すでに運動公園として市民が利用しているれば、それもならず、やはり回数増しか道はないという事になった。早速、道や農林省に、「二圃催では施設の改善も、移転もできない」と陳情したが「新しい競馬場に着手してから相談に

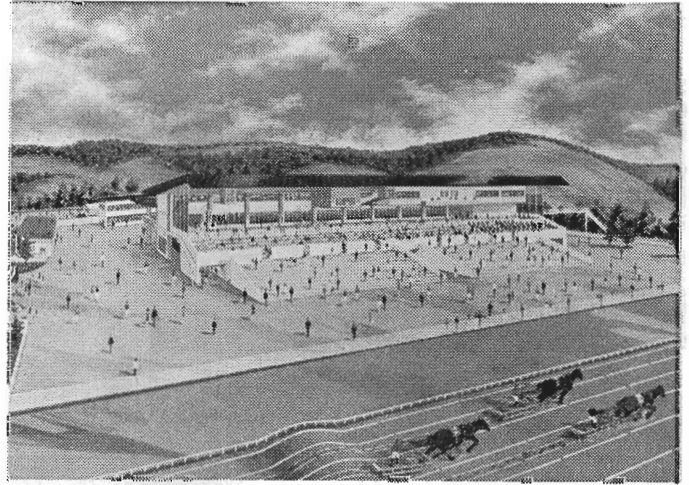
来るように。」

といわれた。それで四十三年十二月十一日、正式に競馬場移転を表明した。早速候補地の選定に入り、市内の方々を見て歩いたが、「帯に短し、たすきに長し」であった。

ある日、小生が雪印北見工場醸造課に行った時、若松の鈴木さんがおられ、

「競馬場に良い土地があるぞ」。

といわれ、すぐ一緒に現地を見た。立地条件は良いので引き返して、当時の中村課長、栗村課長を現地につれて来た。三人で、ここに決めよう、といったが、



競馬場の所在地

北見市若松306番地 (駅から6.5km, 面積65.4 ha)

競馬場施設の概要

(1)馬場

平地本走路 1周 1,300m, 巾員20m
ばんえい本走路 延長200m, 巾員22m, 障害3ヶ所
ばんえい練習走路 延長200m, 巾員12m, 障害2ヶ所

(2)勝馬投票券発売所

スタンド内 鉄筋コンクリート造503㎡
(1階84窓, 2階72窓)

(3)払戻金交付所

スタンド内 鉄筋コンクリート造322㎡
(1階53窓, 2階28窓)

(4)収容人員

スタッド前 15,000人
(観覧席 2,120人, 立見 12,880人)

(5)厩舎 32棟 (500馬房)

(6)厩舎住宅 115棟 (2,368.64㎡)

(7)場内駐車場 2,600台収容 (65,000㎡)

一般の用地買収と同じように発表はなかなかせず、他の地区名を上げたりしていた。

その後われわれは用地買収に取りかかったが、地主は十七名、毎日のように交渉に歩いた。他から見ると「毎晩遅くまで大変だったでしょう」とよくいわれるが、担当者してみれば、自分たちの夢が実現する喜びが心の中にあるため、何の苦痛には感じなかった。特に当時の部課長が、

「坂井、おれたちが悪者になるから、存分にやれ」

との言葉をいただき、部課長を悪代官に仕立て、仕事をした。

又、地元でできた誘致期成会の方々の絶大な協力があり、われわれよりも数倍の苦勞をされた。自分たちの地区を繁栄させようという熱意には本当に頭が下る。

一年かけた用地買収も終わったが、金がないので、ブルのひまな時期を選んで四十五年秋整地工事にとりかかった。二十数台のブルの音が谷間にこだまするのを、草のしとねに寝ころんで、青い空を見上げながら聞いた時には、「これで競馬場はできたな」と感じた。

本当は四十八年に完成させる予定だったが、途中大冷害に合い、その対策費に競馬益金を支出したので一年遅れの本年完成になる運びになった。この間農林省、地方競馬全国協会の方々の温い激励を受け、ともすると引き込みがちになるわれ

われを叱咤して、いただいた事を心から感謝している。

昨年十月、大井競馬場の江馬所長さんが、工事中の現場を見て、

「この競馬場の環境は日本一だ。競馬場に来て、青い空と旨い空気を吸い、牛の放牧風景を見ながら競馬を楽しむ事ができるとは、日本の競馬場というよりヨ

昭和四九年度の市営競馬を迎えるにあたって

旭川市審議員 大久保 吉 蔵

北海道の競馬事業も、その売上成績が順調なのびを示し、四十八年度は平地競馬一四回八四日間で二百億円、ばんえい競馬一六回九六日間で百億円と、それぞれ突破し、さらに昨年は特に取上げるような紛争事件もなく無事終了したことは競馬主催者にとりまして、これ以上喜ばしいことのないわけであり、これもファン大衆に対しては勿論のこと、競馬関係者である馬主、騎手、厩務員及び協力団体のたゆまざる一致協力と、ご支援によるものでありまして深く感謝申上げる次第です。

しかし私達主催者の立場にある者は売上の増額や収益の増加による数字だけを追求するばかりで、目先の損得勘定のみに走り売上成績の上昇いわゆる「売らんかな精神」では早晚競馬事業は大きな壁につき当ること明らかであると考えられます。

私も昨年十月市の当事者や競馬関係者

「ロッパの競馬場だ」という感想を聞いて、今までの苦勞も一度に吹き飛ばす思いがした。

今になって考えると、当初この土地を選定した時と情勢が変化し（多少考えていたが）この地区は、スキー場、温泉、フラワーパラダイス、又今年は自然休養村センター設置と、市民のレクリエーション

昭和四九年度の市営競馬を迎えるにあたって

旭川市審議員 大久保 吉 蔵

のご理解とご支援によりまして、アメリカ競馬の運営研修団に参加させていただき、アメリカの主要競馬場十カ所と競走馬の生産牧場を視察してまいりましたが、どこの競馬場も広大な敷地面積と施設の立派さには、ただ驚くばかりでした。あちらで面接した方々は競馬執行に対する基本的な考え方を一様に次の点を力説されております。

まづ一つに競馬ファン大衆に対しどのようにすれば良い印象を与え楽しみ喜んでいただくかであり常に競馬場内とその周辺の環境整備や施設改善を行い並びに競馬の公正確保に細心の努力をしよう。

もう一点は競走馬の生産対策であり優秀な健康馬を作り出すことが肝要であり、種雄馬の確保・優良雌馬の輪移入などに力を入れており経済観念を無視して経営している牧場もある。

以上の二点ですがその点私達の考え方

「エンエリアとしての性格付けがなされ」来た。これらの中でわれわれは、この競馬場を将来、単に競馬だけの競馬場としてではなく、子供づれの市民が遊びに来られる様な憩いの場にして行き度いと思っております。今後共皆様方のご指導をお願いしつつ筆を置きます。

(一九七四、三、十五 記)

近々にそれぞれ立派な競馬場が完成することであります。

さらに競走馬の生産対策、特にばんえい競馬の資源対策についても優良雌馬の導入あわせて血統登録の明確化を図るため本年から市営競馬主催者が一致協力して競走馬生産に対し助成措置を講ずるなど奨励策をとって居ります。競馬事業推進については最近すべての点において複雑多岐にわたる諸問題が幅ぞうし、これが解決のため今後一層の努力と協力が必要と存じます。この時に当り少なくとも道内における競馬関係者は緊密な連絡をとり十分に研究協議して北海道統一した見解のもとに歩調を合わせて推進するとともに本道の競馬事業に対し将来悔のないよう執行すべきであると考えます。

このような考え方でございまして本年も従前以上にご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

「ドサンコ」

村山豊



通称「ドサンコ」と呼ばれる北海道和種は古来北海道にいたものではなく、和人が渡道した時に伴って来たものと視られている。蝦夷国風俗記（天明八年、一七八八年）によると、当時松前藩では馬を野に放飼して、夏から秋にかけては野草も豊富であるから、無人の曠野を自由に馳駆しているが、冬になって原野が白雪に閉ざされてしまうと、次第に食物もなくなってしまうので、馬は浜辺に出て波浪に打ち寄せられた海藻等を拾い食して辛じて露命をつなくようになる。この時を待って馬を捉え、雪の上にやらいを組み、秋のうちを用意して置いた野干草を与へて馳らす……とあって年中放牧の状態が記されている。ドサンコの毛色は月毛が多く、鹿毛、栗毛、青毛もあるが、これらの粕毛が多い。そして額や四肢に白微のないのがほんもので、白微のあるのは洋種の血が混っている証拠である。体高は一・二五〜一・三五メートル、体重は二五〇〜三〇〇キロで、彼等の半野生的な生活環境によって体格は大きくなれなかつたが、体質は極めて頑健な馬が出来上ったのである。

私が始めてこのドサンコチビ公を知ったのは、昭和十一年北見種馬所長時代のことで、当時下湧別

村に飯豊さんと言う老獣医がいて、既に六十の坂を越えていたが、この人が往診に出かける時、タオルで頬かむりをして、四尺五寸足らずの小さな馬に跨がってカカカカカカと追って行く姿がひどく印象的だった。

次は昭和十三年頃、馬の調査で国後島に渡った時乗せられた駅通馬が四尺五寸位のチビ公で、一面笹の生い茂った中に一筋走る路を案内の男が無茶に馬を走らせる。上り坂だろうと下りになろうと一向おかまいなくもつばら馬を追いつづける。その後について走りながら私の馬が路傍の笹や露の葉をヒョイヒョイと巧みに摘み食いするのは驚嘆してしまつた。かれこれ一時間近くも走つた頃、路が海浜に出た途端、今まで一列縦隊だった私達の馬は横隊になつて砂浜を一目散に駆け出した。競馬が始まつたのである。落は平坦で砂も適当に固まつていて、格好な馬場なので、旅行者の誰でもが馬を飛ばすと見えて、馬共は海浜に出れば駈歩で走るものと心得ているらしい。さすがに競馬の後はフウフウと鼻呼吸も荒くなつたが、なお平気で速歩を続ける。一向にへたばつた風も見えない。が乗つてい

る方が参つて見晴しのよい所で一服と言うことになつた。今では記憶もうすれたが植内と言う部落から次の駅通まで十二、三里の行程を六時間足らずで行つたと思う。そして彼等のこのご苦労に対する報酬は放牧されて野草を気ままに食べさせて貰うだけである。それから帰途泊村で馬のせり市があつたが、出場馬は全部山馬で、これらの馬群を牧夫が乗馬で柵の中に追込み、投げ縄を脛にかけて捉える。この牧夫達の乗馬がやはりこのチビ公の親類筋で、木柵に繋がれている時の姿は小柄だし、たてがみがモサツとかぶさつた頭を低く垂れて、後肢の一方を休め尻を横つちよに傾けて、すこぶる風采のあがらぬものだが、一度牧夫が鞍に跨がり、おもつなを握ると疾風迅雷馬群の周囲を縦横無尽に駆け廻る、その動きには全く魅了させられたものだった。国後島では乗馬が唯一の交通機関だったから牧夫達は勿論丈夫でよく走る馬を選定して乗つていたのであるが、国後島の北端白糠泊から南端の泊村まで行程四十里を二日で走破すると聞かされ、益々このチビ公の見かけによらぬ能力に惚れ込んでしまつたものだ。

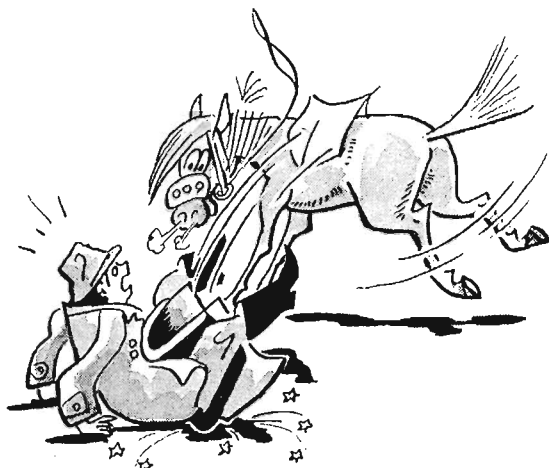
しかしその翌年鹿兒島種馬所に転動したのでチビ公に接する機会が失われてしまつたが、昭和十七年再び北海道に舞いもどり十勝種馬育成所に勤務するようになり放



牧地巡視に出かける度に念頭に浮かぶのはこのチビ公の面影で、何とかして手に入れたいと念願するのであった。

ところが遂に好機到来、北大の農場で生まれたドサンコの払下げが出来た。この馬は月毛の雄馬で明二才だったが、体高はせいぜい一メートル一〇位で抱え上げるにいいようなチビ助だった。毛色が白っぽくて小さいから「小白」と名付けた。可愛い子には旅をさせろで、ほんとうに筋金の通った強いドサンコに育て上げるには、風雪寒暑の自然の洗礼を受けさせなければならぬので、その年根室半島の牧場に預けて一冬を放牧で鍛えてもらった。

根室、釧路の海岸地帯にはミヤコ笹が茂っていて、冬白雪に覆れてしまうと放牧馬は前肢で雪を掘って雪の中から現われる笹の葉で飢を凌ぐ。しかし春三月頃に大雪に見舞われる事がある。三月頃の雪はべた雪で重いので放牧馬は雪に埋まると自由がきかなくなり、スコップを持って山に馬を掘り出しに行くような事態が発生することがある。「小白」は無事冬の放牧に堪えて、春の谷地草の若萌を腹一杯食って栄養を快復し、六月手許に戻って来た。



しかし当時戦争はいよいよ熾烈を極め、敵機来襲の報頻りに至るので、のんびり調教などやっていたられるものでなく、牧場の育成馬と一緒に放牧地に放ったまま終戦を迎えた。そして翌二十一年根室

を極め、敵機来襲の報頻りに至るので、のんびり調教などやっていたられるものでなく、牧場の育成馬と一緒に放牧地に放ったまま終戦を迎えた。そして翌二十一年根室を極め、敵機来襲の報頻りに至るので、のんびり調教などやっていたられるものでなく、牧場の育成馬と一緒に放牧地に放ったまま終戦を迎えた。そして翌二十一年根室

を達するにも泊りがけとなつてしまふ。この不便な根室原野での生活にこれから先「小白」が演ずる役割はすこぶる多いので早速調教に取りかかった。

「小白」も明四才の春を迎へ立派な若駒に成育していたのだが、何しろ体高は漸く一メートル三〇、果してこのチビ助が役に立つだらうかと、今さらながら一抹の不安を感じずにはいられなかった。がしかしこの不安は全く杞憂に過ぎず、乗っているうちにぐんぐん力つき逞しく成って行った。ドサンコの歩様には俗に「デミチ」と言うドサンコ独特の歩様が

ある。簡単に言へば常歩オキシの歩度を早めた歩様で速歩は二節だがデミチは四節だから、乗っていてほとんど反動がなく鞍に跨って盃を手にし走っても盃の酒がこぼれないと言われている。その他「アイビ」と言う歩様があるが、これは側対歩で「デミチ」より速度は速いが、二節歩様だから反動は強い。

当時厚床に沢井市太郎と言うデミチ仕込みの名人がいて、その人の伝授を受けて「小白」にデミチを仕込んだ。デミチを踏むようになってからは反動が少なく椅子に跨っているようなもので非常に身体が楽だし、第一小さいから乗り降りが容易で、玄関先から乗り出したが最後、始終デミチで乗り通せるので、大きな乗馬には乗る気がなくなってしまう。十分位走ると耳のつけ根から脛側にざっと汗ばんで来る。そうなるといよいよ調子が出て来て足さばきが軽くなる。手一ぱい追い込んで行くと尻尾をアイヌ犬のバチ尾のように上にそらせて走る。余程心臓が丈夫なのだらう。

飼糧は雪が積るまでは草原に繋留して自由に青草を食わせ塩を少量なめさせるだけで、特にご苦労をかけた時燕麦の一升が最大のご馳走だった。飼養管理に手間がかからぬし、放牧地の巡視にはこま

めに動くので木原を縫って歩くにはうってつけで、又用途に行く場合も大体一里を十五分平均で行くことが出来、しかも行った先で繋いで置いても綱巻き等を起こす心配はなく、手軽なので非常に重宝だった。

道南地方の一部函館の西海岸地帯では今でも昔風の駄鞍を用いているが駄鞍を装したドサンコ数頭を一群として先頭の馬に乗りその後を荷を積んだ馬を一系列隊に連結して追って行くのである。駄鞍を装着するには胸革と、オシとで鞍を馬背に保定する。元来ドサンコは鬚甲が低く、帯脛が短いので、オシと鞍を尾根に結びつけないと鞍が前方に滑って肩から頸に乗ってしまう。馬の腕力は大体系の体重と比例するが、駄鞍力は、負担量の体重に対するパーセントが体重が小となるに従って大となり、ドサンコでは体重の約五〇%を駄鞍出来る。米俵二俵を駄鞍に振り分けにつけて、その上にビールの一打箱を乗せて運んでいる。

ドサンコの尾筒は太くて尾力があり、背骨が太く強いことを示している。ある時「小白」に乗って脚を入れた途端、続け様に五、六回猛烈なしりっばねを喰わされて放り出されてしまったことがある。その



頃はほとんど毎日のように馬に乗っていたので、騎座も堅く滅多に落馬することもなかった。そこで些か得意の鼻を挫かれた格好で、気がついて見たら乗鞍を股にはさんだまま放り出されていた。よく調べて見ると腹帯の托革が切れて鞍ごと投げられたわけだが、それにしても平素こんな事はないので不思議に思い注意してみると、尻の上部に一銭銅貨大に皮が擦りむけていて、鉄がさわるのが痛くてはねたのだが、このチビ助にこんな猛烈な力があることを知って益々頼もしくなった。

以上私は私がドサンコと知合いになり、彼等の柄に似合わぬ能力を知った経緯をながながと記したが、今こそこの北海道が生んだ貴重なドサンコの保存を図ることが肝要と思う。北海道も開拓が進むにつれて産業上の彼等の役目はだんだんに失われて行くであろうが、今後彼等が観光事業に一役を買って、大雪山や阿寒の山々に観光客を背にして非凡の健脚を誇る姿が見られるようになることをもっぱら念じている。

ばんえい競走 公正確保対策の樹立

- ばんえい競走主催市は最近成績の上昇に伴い、疑惑の発生を防止するため昨年十二月十三日の臨時総会で公正確保対策を決定、これを実行することとした。その概要は次の通り。
- 1 不正の防止（既舎取締）
 - (1) 既舎出入規制の強化
 - イ、調教師、騎手、厩務員の外出は開催前々日の正午から同終了日競走終了時まで
 - ロ、馬主一般人の出入も右と同じ時間帯出入を禁止する
 - ハ、行動証明書の使用規定を厳重化する
 - ニ、外部特定人については指示する期間中出入を禁止する。内部特定人については面会人の制限自粛を指導する
 - (2) 既舎内居住者の掌握を徹底する
 - (3) 不法行為の排除規制を設ける
 - (4) 指示違反に対する罰則を強化する
 - (5) 特別警戒区域の設定 内部
 - 2 不正騎乗発見力の向上と審判技術上の規制措置を強化する
 - (1) 審判研究会の強化
 - (2) 規制措置（出走停止）
 - イ、能力変動馬
 - ロ、第一第三障害登坂時停止する馬
 - ハ、三着馬入線後一分以上経過して入線した馬
 - ニ、不調馬、競走悪癖馬、個疾馬
 - ホ、駆法上の規制
 - (イ) 第三障害前以外の場所で「騎手の意志」による停止は禁止する
 - (ロ) 第三障害前の休止時間を制限する
 - 3 不正に対する処断の徹底
 - (1) 事案の処置については更に調査を続行する
 - 4 執行体制の強化
 - (1) 主催市及び市協の執行体制を強化する
 - (2) ガードマンを増員
 - (3) 公正対策委員会の設置
 - (4) 月例集会の実施
 - 5 施設の改善
 - (1) 老朽施設の解消
 - (2) 厩舎環境の改善
 - (3) 走路の改善
 - (4) 厩舎団地の整備
 - (5) 調教馬場の拡張整備
 - 6 調教師、騎手の厳選
 - 7 待偶の改善
 - 8 既舎制度の改善
 - (1) 馬預託制度の改善
 - (2) 職能分離可能目標年の検討
 - 9 競走番組編成方法の改正
 - (1) 取得賞金制の採用
 - (2) ABCDの格付制廃止
 - (3) 積載重量の軽量化
 - 10 競走用具の整備

〔本会創立5周年記念〕

「ばんえい競走草創のころを語る」



座談会

(その2)

出席者 (敬称略)

佐伯 才一 道初代競馬課長

進藤 久憲 道初代総務係長

安達 利夫 道初代企画係長

高瀬 精一 道初代投票係長

瀬下 信三 道初代ばんえい競走主任

竹森 興作 旭川競馬協力会副会長

大原 喬平 帯広競馬協力会々々長

沢田 行治 北見競馬協力会役員

荒木 政司 岩見沢競馬協力会々々長

主催者側

大久保 吉藏 旭川市審議員

山本 英宣 帯広市主事

坂井 清治 北見市畜産主任技師

小倉 輝行 岩見沢市畜産課長

角田 正義 本会庶務課長

小路 口司 本会業務課長

司会

内田 靖夫 本会事務局長

内田 それでは市の方からのお話を。まず大久保さんからひとつお願いします。



大久保 先程瀬下さんのお話にもありましたが、五十嵐柴三郎さんから色々とお話を聞きました。

話を受け継いでお話ししたいと思いません。

たしか昭和二十一年かと思いますが馬連か運搬組合かわかりませんが、管内町村に呼びかけまして運搬馬農耕馬を二百頭ばかり各町村に割当し、旭川競馬場に集めましてばんば競走を開催しました。その方法としては現在町村でお祭の奉納行事の一環として行なわれているばんば競走ですね。かますに入れた砂を積んで走るという方法ですね、そして趣旨を佐伯先生からお話もありましたが能力の鍛練、けん引能力の向上というのが目的でやったようなわけです。

当時はまだ現競馬法の施行以前でございましたが、しかしながら馬券を発売しているというものであります。当時一枚十円の馬券でしたが、朝早くから夕方遅くまで一日約三十レース位実施していましたが、農村からも市内からも相当な人が集って盛大に行なわれました。

又、それを開催するために運搬組合の支部といえますか、これが各町村に

あるわけですが、その関係者の人達が総動員でやりました。それで収支決算をしたところ八、〇〇〇円ばかり余剰金が出まして、その余剰金を常磐公園内の花月会館といたしましたか、そこに皆集ってどんちゃん騒ぎをしまして全部飲んでしまったわけです。又当時酒があまりありませんので「ドロドロ」を各運搬組合に割当てまして「ドロドロ」を作らせ持ち寄ったようなわけです。これが旭川ばんば競馬としては最初ではなかったかと思われ

ます。その以前にもやっておりますが、先程お話がありましたように牛の地引競走といえますか、力競べといえますか、それと同じように軍が力を入れて能力試験ということでやっておりますのが、重種馬の一つの競走ではあります。せんが鍛練馬時代でしたのでその指導としてやっております。

それと公営競馬として発足したのがこれは旭川市と帯広市の運搬関係の人達で色々協議して道に陳情をしたわけでございます。これは昭和二十四年の五月の初旬だったと思えますが、私も一員になって陳情したわけです。

当時競馬課長さんは、ここにおられる佐伯さんでなかなかめんどうだということもありましたが、なんとかお願ひしたいということで、斎藤藤吉さんを介しまして色々陳情もいたしました。現在ではこんなスピードではやれ

ないだろうと思われませんが、当時五月の初旬に陳情し、五月議会といえますか五月から六月にかけての議会で道の条例が改正され七月の七日に競馬法の施行令が改正になっておりました。その当時は競走の種類が平地、速歩、障害の三種類でしたが、その中にばんば競走も一種類加わりまして四種類と施行令の改正がなされたわけです。

ということでございます。以前の馬連当時から研究はされておったのでしようが、三ヶ月位の間に陳情、道の条例改正、農林省の競馬施行令の改正、として実施ということですのでなかなかの御苦労だったと思えます。現在では考えられないようなスピードで実施されたということは、佐伯先生をはじめ関係者の方々のやっやろうという努力といえますか、熱意がこのような結果をもたらしたわけです。それが今日二十五周年そのまま継続されておるわけです。

市営競馬ですが、これはちょうど二十一年目になるわけで、市営競馬の開催につきましても道におきまして色々問題があったわけでありまして従来道がやっている中から市営に割愛するというところで、それそれ問題がありました。けれどもそれも道の関係者の理解ある御努力によりまして昭和二十八年から市営競馬が開催されると

いうことになったわけでございます。これなども道の競馬関係の方々先頭に立って農林省、自治省などに陳情をしていただきました。先程の大原さんのお話に出てくる百三十万円の話も旭川市の当時の坂東市長の所に北見の市長さんのおいでになり色々とお話がありましたが、それよりも道を中心として中央に働きかけてやろうということになりまして、実が結び昭和二十八年から市営競馬が出来ました。

当時は平地もやりましたが、平地の場合は市としまして専門職といえますか、そういう職員、従事員の技術というものが劣るので道職員の協力を願っておりますが、なかなか苦労がありましてそれではばんば競馬にしぼって市営競馬をやろうということになりまして、その後におきましてばんば競馬は平地、市営はばんばと区分されたような形になっております。

さらにもう一つのエピソードと申しますとですね、市営競馬の五周年記念をやりました。これは昭和三十三年だったと思えます。ばんばの甲馬、乙馬ですね、当時のそれを三十頭集めまして駅前から今の競馬場までパレードをやったわけです。

そのパレードは馬の前には馬の名前を書いたブラカードを女学生に持たせました。それから芸者さんですね、あ

るいは色々な出しものを後方に並べてスタートしたんですがね……。

当時の協力会会長の瀬古太助さんですけども、市長と議会議長はオープンカーに乗せたわけです。自衛隊から借りてきたものですがね、これがオープンカーですの顔が見えるのですよ、ところが協力会長の瀬古さんには普通のハイヤーに乗って下さいといったんですよ、そして乗せようとしたところが「コジレ」ましてね、これはなんじやというんですね。

俺は協力会の会長じゃ、市長や議長は何もしないのに俺をオープンカーに乗せないで、やつらをオープンカーに乗せるのはなんじや、このパレードはだめじゃ、出発停止だというわけですよ、パレードの人や馬は何町も並んで持っているしほんとうにこまっていますました。たまたま市の農協の山車として舗道車に米の俵を沢山積んだ宝舟の山車があったんですよ。それに市の農協の組合長が会長、会長まあそんなこといわんでこれに乗らんかといったんですよ。まあ見たら米俵の上ですからね。それに乗ったらエビス大黒さんともいいですか、神様のようなですからね。

それに乗ったら皆の顔は見えるし、市民も会長の顔が見えるし、これならよからうということになりました、やっと了解してもらいまして出発したんですよ。まあ一つ行事をやるにも終る

までには何かと色々なことがあるものですね。これが苦勞といえますか思いうちになっております。

内田 どうもありがとうございます。それでは次に小倉さんお願いします。



小倉 大先生方を前にどうも恐縮ですが……私が競馬に關係するようになったのは、昭和

三十七年に畜産に発令になりました時であります、実際に競馬に關係するのは昭和三十八年からということになります。

その当時前の競馬場だったんですが、競馬開催時になりますと厩舎の修理とか走路に炭がらを敷くとか色々準備がありまして、その炭がら敷きになりましたら良いかと聞きまして、機関区の方へ行って汽車の炭がらを車に積んで運べ良いというわけで機関区に行きましたところ、炭がらは全々ないといわれびっくり、これは大変だということになりました。あっちこっちと手配したのですが、岩見沢市内ではどうしても手に入れることが出来ませんでした。

それが美唄の炭鉱の発電所の炭がらをようやく手に入れることが出来ましてそれを走路に敷いたわけです。

当時、私は競馬に関し、まったくのズブの素人として機関区の炭がらは粒が荒くてぶつぶつになっているので

が、美唄の炭がらは砂のように粒が小さくて見た目にもきれいでこれは良いものを持ってきたと思ひまして、それを敷いて開催をまっただけです。

走路には、今は亡くなられました協力会の黒田十郎さんという方が關係しておられまして、その方が非常に熱心に走路とかその他のことに御苦勞下さいました人ですが、その黒田さんにだれの指示でこんな炭がらを敷いたといつてえらい怒られます、色々話を聞いてみるとこの炭がらでは雪の上を引張るようなもので、ばんえい競走にはならんというわけです。

大変お叱りを受けまして、これが私が競馬に初めてやったときの失敗談というところで、今でも忘れられない印象です。

内田 それはあまりに粉すぎたということですか？

小倉 そうです。粉すぎまして砂みたいになっている上に多少の油気があったように思います。それで、これは滑るからいいなと思ったんですよ。(皆大笑)これが実はまったくの逆だったということですね。

内田 どうも……では坂井さん一つお願いします。



坂井 私も競馬を初めて担当しましたのは、役所に入つた昭和三十三年でそれ以来競馬を担

当しております。

昭和二十四、五年といった古い時代のことは私何もわかりませんが、新しい競馬場を建設しております古い歴史のものも調べている最中です。

北見の場合も、昭和七年頃から競馬をやっておるそうで、こんな小さな北見のようところがどうして現在まで残っているのだろう、大きな室蘭などが止めてうちが残ったのかと思ひ調べたんですが、当時から施設というものは全部市の所有であった。それを馬連競馬時代は無償でお貸ししたということなんです。市も当時は町だったと思いますが、職員も無償で手伝えという市長といえますか、町長ですか、との命令で手伝えしてきたのが現在も残っている理由ではないだろうかといわれたんです。まあこんなこともあるのではないかと思います。

それと先程のお話にもありましたように競馬の陳情に行ったのはうちの竹下課長が伊丹市長と一緒に行ったのですが、その当時北見にはアルコール工場がありまして、しかし酒がありませんのでそのアルコールを一斗缶に入れて、リュックに入れて背負い農林省に持って行って陳情したそうです。

そんなことがありまして北見の競馬が始まったという気がしております。私が担当した時には協力会の沢田さんが先程もお話ししておりましたように馬の頭数を見てもわかりますように当

初の頃は地元の馬といいますが、本当の農耕馬を集めてお祭競馬、農耕馬競馬というのが主体だったわけですね。

現在のようには全体の馬が移動するというところでなく地元、地元の馬が主体ですから馬の勧誘に歩かないといけなかったんです。

ところが、瀬下さんが来られて馬体検査をするというのに馬がいなくて、それでしかたないので、オートバイの後に今も競馬に出ております中村清信さんとか沢田さんに乗っけて、あそこに馬がいると聴けばそこに行きまして畑の農作業をしているところに行つて頼み込むんです。

明日中に来れば何んとかしてやるから、かならず来てくれといつて頭を下げ下げ頼むんです。特にひどかったのは十月の道営競馬をやった時ですね、当時北見の場合はたいてい最後が道営競馬で十月頃だったんです。

その時期は稲刈とぶつかりまして馬が全く集まらないです。頭数も百頭を切りますので、その馬を集めて歩くのが沢田さんも申しておりますが、当時三十三、四年頃私達が馬が多いのに馬を集めることが出来なかったばねい頃の頃があったんです。

今ですと断わるのに苦労するようですが、それで当時の古い人達に昔のことを忘れて上を向いていると叱られます、そんなことが私の思い出として残っております。

内田 どうも、では帯広の山本さんどうぞ。
山本 いやべつに：他の人のお話をどうぞ。

内田 山本さんは、いつ頃だったんですか。
山本 昭和三十九年からです。

内田 山本さんは話が無いわけがないんですがね。
瀬下 そのとおり山本さんは沢山話があるでしょう。無いわけがないんだが……

内田 瀬下さんがいふんだから本当だ。(皆大笑) まあ一応一巡したわけですが、市営競馬協議会を代表して一番古い小路口君から一つ。



小路口 私が競馬に
来ましたのは昭和
三十一年で、当時
大先輩の今は亡く
なられた坂本先

生、次が瀬下先生、安達利夫先生安達幸三先生、山本盛雄先生、それに上林さん富加見さんがときどき来ていただきまして、大先輩の方々に教えをいただきまして現在に至っております。

たまたま佐伯課長さんより鶴沼の話が出ておりましたが、私が入って二年目で番組をやっておりますが、当時は騎手免許試験は道でやっております、前もって書類を出せといつてもだれも出すような人はいませんでした。百円を出すと、黒い表紙の免許証に名前を書いて渡すというのでした。

又帯広の上田三兄弟というのがおりまして、それが顔も格好もとても似ているわけですね。出走投票は上田武でやっているが実際に騎乗しているのは上田清なんです。それがわからないんですよ。又乗っている人を見てどうも見たことの無い顔だというわけで、後から百円取つて免許証をやっていたのが昭和三十三年当時でした。

たまたま旭川に来ましたら、Uが身分証明書、住民票を添えまして騎手免許証を下さいといつてきたんです。

これは今までで初めての書類完備でしたので、立派だと思つて免許証を出しまして、次の回より騎乗させたわけですね。

これが競馬関与停止の間人だとは知らなかったんですよ。それで競馬が終つて後に農林省から競馬関与停止の者をなぜ騎乗させたといわれ、さあこまつてしまいました。当時内田局長が競技係長だと思つていましたが、農林省に再三、再四謝まりに行つてようやく許してもらつたことがありました。

これがいまだに頭の中に残っております。最近のばんばは全協の指導もあります。最近のばんばは全協の指導もありません、それに市営競馬協議会が出来ます。内田局長が率先して色々な面で活躍しております、当時私が入りました昭和三十一年、二年頃と今とは自分ながら驚いているような状態です。

内田 これで、ひとまず皆様のお話は一



巡したわけですが、今小路口君が感想を述べましたけれど、これも一年一年先輩の方々が苦勞を重ねてこられ、また我々も又毎年毎年改善していくというようなわけで今日のばんえいがあり、将来のばんえいがあるだろうと思つてわけですね。

先程大久保さんもいってましたが、市が全部準備をしましてそれに道から何人か行つて道営も市営もやつたという事です。市の方々の全体の執務体制をやつてもらつて道営の場合は総務の係の人が何人か行つてやつたというだけでしたね。それで今回は道から派遣された方、最初からの主任の人だけで良いですから一つわかつたら教えて頂きたいと思つています。

大久保 一番最初は瀬下さんでしょう。旭川の運搬組合の所で馬連名簿のガリ切りをやつたことがありました。その時に瀬下さん、それに今の五十嵐旭川市長当時三十五、六才で組合の専務をやつていました。それに私と三人でガリ切りをやつたことがあるんですよ。

瀬下 それから富加見さんでしょう、富加見さん、松村さんのコンビその次が上林さんでしょう。

内田 はあ……上林さんが主任ですか？

瀬下 はい、上林さんが主任でした。

内田 瀬下さんが初代の時は二人でしたか？

瀬下 いや一人でした。大久保さん達と一緒にやりました。全部地元で、おぜん立てをしているんだから、道からは瀬下一人でいいだろうということになっていました。

大久保 地元の岩浅さんが駐在でおりましたしね。

内田 それでは、上林さんとだれですか？ 年代はどうです、わかりませんか。

瀬下 上林さんと山内さん。

佐伯 山内さんの時はばんえいがあったかな。

瀬下 はいありました。

内田 上林さんと山内さんですね。それで先程大久保さんが二十三年とおっしゃいましたが、二十二年だと思いませんか。

大久保 はい二十二年でした。

瀬下 昭和二十二年に私が初めて旭川におじゃましました。

大久保 それは前の改正前の競馬ですね。

瀬下 はいそうでした。改正になったのは二十三年の九月でした。その時に今の競馬法の前身が施行されたんです。

内田 さっき大久保さんがいわれた二十四年にばんえいをするというのは？。

大久保 それは公営競馬のばんえいという意味です。

内田 それで、馬連時代の成績が非常に悪かったので、なかなか当時の佐伯課長さんも『うん』といわなかったんで

すね。

瀬下 馬連でばんえいをするという話があったとき馬連ではなかなか「うん」といわなかったんです。その時の条件として、旭川市も運搬組合の五十嵐さんも欠損したときは地元で補てんしてやるから心配しないでやれという話もありましたよ。

内田 さて、上林さんの後はどなたですか？

大久保 坂本さんです。

内田 坂本さんと小路口君ですか？。

小路口 私が入る前に坂本さんと梶浦さんでした。

内田 そうかそうか、その後が坂本さんと小路口君で次が？。

小路口 瀬下さんです。瀬下さんと私でした。

内田 次は？

小路口 安達利夫さんと私ですね。

内田 それから？

小路口 瀬下さんと安達幸三さんと二人で交互に来てもらいました。旭川、北見が安達幸三さんと帯広、岩見沢が瀬下さんでした。

内田 それから山本盛雄さんで、現在に至っているわけですね。

瀬下 そうです。

内田 投票の方はわかりますか、高瀬さん。

高瀬 榊さん日向さんと私が交互に出て行ったようです。

内田 では、市の方はどうですか？。

大久保 旭川の場合は私、藤川、そして

又私、多田、山田、勘川、墓田、浅川ですね。

内田 岩見沢はどうですか、最初は川村さんですか。

小倉 市の歴史に載っていますが、当時は部制がなく畑田課長でした、のちの助役さんです。

内田 北見はわかりますか。

坂井 一番最初は小滝さんではなかったでしょうか、その次が竹下さん、それから栗村さん、小林さん、中村さん、桜田さんですね。

内田 では、帯広はどうですか。

山本 たしか鈴木さんの次が福田さんではないでしょうか。

内田 福田さんの前にだれかいませんでしたか。

山本 鈴木さん……角田さんですね。次に福田さん、金堂さん、野崎さん、花房さんです。

内田 どうもありがとうございます。

これで皆様に一応のお話をさせて頂きましたが、これはと、思われるようなお話はまだあるのではないのでしょうか。

大久保 昨日も私竹森副会長とその二十四年の金銭出納簿を出して見たんですよ、すると馬頭観音の馬場開きの御神酒が一本六百五十円なんです。今でも六百五十円で買えるでしょう酒代は昔から全然変わっていないんですね。当時、私なんか飲んだ方だから今までの合計すると、家の一軒位は腹の中に

入っているかもしれないといって笑いましたよ。

佐伯 昭和二十四年で酒がそんなに高かったかなあ……。

大久保 はい、六百五十円になっていましたよ、酒代は変わっていないんですね。

内田 これは面白い話ですね。酒とばんえいですね(笑)酒とばんえいといえ、進藤さん何かあるのではありませんか。

進藤 色々思いつくんですよ、競馬一般となりますと又あるんですよ。なぜ、ばんえい競走を競馬の中に入れたのかと思いつくと、藤田君のことを思い出します。

改正の時にセンセイに本省に行ってもらったんですが、非常に苦労したんです。条例改正の時だと思うんですがその時になぜばんえいをその中に入れたかということですね。昭和二十三年の九月に道営競馬を始めましたね、その時はまだばんえいというものは頭の中に無かったですよ。競馬をやってみると赤字続き、これはとてもだめだと思っていたんです。

そうしたら、瀬下さんだと思いましたが、何かの時にばんえい競走ってとても面白いもんだという話があったんですよ。私は素人で何もわからないもんだし、又ばんえい競走なんて見たことも無かったですよ、それでそんなに面白いものかと思ったらそれは大したもんだ一度見て見ろというわけですね。

各部落の連中が、その馬の応援団になって馬について来るから観衆として入って来るんだ、人が集って来るんだ、それから馬主が一生懸命追うけれども橋の尻で決勝を決めるもんだから、もう五寸の所で馬が止まっていると、馬は全然そんなこと知らねえから平気で一休みするんだ、すると追ってる者は気が気でないし又見物人も気が気でないというですね。

そのうちに後から来た馬が、ススーっと入ってしまつて「アリヤー」ということになるんだ。だから八百長というものはないし、馬を押えるという話があるし、これは面白いんだという話があるし、なるほどそういうものかと思つたんですよ。その内に規程を改正するとか何んとかいう話が出てきました、条例の中に規程か何かを作り、それを農林省に持っていくつもり藤田君を説明にやつたんですよ、急ぎですよ、それで藤田君が帰って来てからの話ですが、せつなかつたといつてました。

文章のことはある程度わかつていても、競馬のことは全然知らないですからね。非常に苦勞したんですよ、今それを思い出したんですよ。

内田 やはり競馬を知ってないとね、条文なんかは得意だったんでしょ、が、苦勞なやつたんですよ。

進藤 競馬そのものを知らないので非常に苦勞したんですよ。

瀬下 当時の櫓は、全部借上げの櫓でしたので櫓の後端というのは全部一致してたわけではありませんでした。台木の長さの差がひどかつたんです。それにも増してひどかつたのが、櫓自体の重量差でそれはひどいものでした。小路さんの時だと思ひますが、櫓自体を計数的に調べたのは。

大久保 昭和三十六年に事故がありましたね、櫓の台木の長短の差があまりひどいので、のこぎりで切つてしまつたんですよ。それをまた台木を打つて置けば良かったんですが、忘れてしまつたんです。それで競走中に第三障害で積載物がずれて落ちてしまつて騒ぎになつてしまひましてね、それが三十六年の大騒動ですよ。

小路口 当時の櫓は、台木よりも「ズリ」が長かつたんですよ。それで着順は櫓の「ズリ」の後端で取つていたんですよ。条例では台木の後端となつていますが、実際には違つていたんですよ。それが後からわかつたんですよ、その時に騒ぎになりました切つてしまつたんですよ、これが大久保さんのいわれた前の日でした。

瀬下 どうして櫓の台木の後端というところで条例を作つたかといひますと、只今白状致しますが、私はばんえいに入つたときには札幌や旭川方面で作られている櫓は知らないんですよ。私の生れた渡島でばんばに使われている櫓は、俗に客櫓といひまして櫓の

ズリと台木の後端は全部一致してゐるんですよ、それで台木の後端で何の不思議もなく作つてしまつたんですよ。

ズリが長くて台木が短いということ全然考へてなかつたんですよ、今思ひますと、実際勉強不足なんですよ、櫓の実物を見ないで概念で、それでいいんだ、いいんだといひて作つてしまつたんですよ。

竹森 当時、櫓は使い道によつて台木の長いものとか、下のズリの長いものがあつたんですよ。それを借りてくるからだめだつたんですよ。

内田 では、当時の騎手の服装はどうゆうものでしたか。

瀬下 服は初め何んでも良かったんですよ。色も何もかも規制はしませんでした。できれば白いワイシャツのようなものをというのでした。

坂井 半被を着てやつたんですよ、はいですか？

瀬下 いや、半被にしようという話はありませんでした。半被ばかりに揃えるという話ですよ、でもやりませんでした。

内田 帽子はどうですか。

大久保 初めはねじりはち巻だ。(大笑い)

瀬下 ねじりはち巻にしなさいといひて皆にさせました。ばんえいは、ばんえいらしくということでした。

内田 セッケンにしたのはどうですか。

進藤 私は何かで行つたとき、セッケンを見たような気がしますが。

瀬下 最初はセッケンはありませんでした。

坂井 では、何で番号の印を付けたんですよか。

瀬下 馬の尻といひますか、重量物の尻に旗を立てました、当時カマスでしたのでいくらでも刺さるんですよ、これはあまりひらひらするので、だめだから桃太郎の旗のように横に棒を付けてひらひらしないようにという話も出ました。

内田 騎手服を緑に揃えたのはいつ頃ですか、坂本さんの時代かな。

小路口 はい、坂本さんの時代からですよ、内田 馬丁服は？

坂井 ずっと後の方ですよ。

小路口 馬丁服は、山本さんの時からだと思ひます。

瀬下 又歴史になりますが、馬を駆する方法として当時の馬は皆殴つて使つていましたから競走で全能力を発揮させるにはやはり殴つた方が良いでしょう、それで殴ぐる方法を統一させるために砲兵ばんばで使う長むちを使わせようということをやつたわけですよ。

竹森 軍隊で使うむちですよ。

瀬下 実際やらして見たところ、いくらも持たないんですよ、櫓の棒まで皆折れてしまつたんですよ。

内田 ほう皆折れてしまつたんですよ。

瀬下 これでどうにもならんという訳で使つちやいけないということにしたんですよ。

当時、實際殿って使っているのに殿
つてはだめだと規制したのは一方的だ
ったと思います。でも殿っても良いと
いっても、必要以上に殿るんですよ。
長むちで殿るものだから馬がいやがっ
て蹴ってしようがないんですよ、それ
で蹴り競走みたいで危なくてしようが
ないので止めることにしたんです、た
しか一年位で止めたはずですよ。

内田 止めたことは知っていました。
進藤 動物愛護でなかったんですね。

瀬下 たしか佐伯課長さんの時だと思
いますが、某動物愛護協会の婦人会から
農林省に北海道でやっているばんえい
競走は動物愛護に欠けているじゃあり
ませんかという抗議があったんです
ね。それで農林省から佐伯課長さんの
所にこうい抗議があったからと来た
んです。佐伯さんは瀬下お前ばんえい
を担当しているんだから何とか答弁を
書けということで、けってあれは殿
るのではない、これは激励の意味であ
る(大笑い)これは産業用に通じる一
つの奨励方法であると、取って付けた
ような理屈をつけてまして農林省に出
たのを思い出しました。

内田 それで通りましたか。

瀬下 通りました(大笑い)

内田 めずらしい話が沢山出てますが、
今の走路はどのような経過で出来た訳
ですか。

瀬下 地方のお祭ばんばは一日二十レ
ースも三十一レースもやらないと処理の出

来ないものでした。それを一日十二レ

ースより出来ないということ、しか
も馬券を売る時間を含めレースの間隔
を三十分間隔ということにしたんで
す。初めは直線を考えたんですが、楕
の移動、積載物の移動を考えると、と
んでもない時間が掛るし、今のよう
に馬券の売上も見通しがつきません、又
人件費その他の費用を考えると、それ
ならばゴールイン即スタートというよ
うなことにするにはどうしたら良いか
と考え、それならばと馬蹄形を考えつ
いた訳です。

旭川ではこの馬蹄形については当時
岩浅さんの協力を得ましてこの形に決
めました。

内田 その前は、どんな形だったんで
すか。

瀬下 昔から地方のばんばは小学校など
の校庭のような所でやっていました。
それで形は円形でゴールとスタートが
くっ付いていました。

それで走路の妨害とか、進路妨害は
多少はあるだろうが、強い馬が先に行
くから良いだろうということでした。
(笑い)

内田 U字形の時四市の馬場は統一され
ていましたか。

瀬下 いいえ、その地方、地方のお祭ば
んばのしきたりに、準じたものでした
内田 旭川は色々考えたようですね。

大久保 カーブが混むもんだから、カー
ブの所に砂の障害を作ったりしました

よ。

内田 旭川の障害で何といますか、パ
ンケットといいますが、濠の障害があ
りましたか他にはあったんですか？

瀬下 あれは旭川だけだと思いました。

坂井 それは北見にもありましたよ。

瀬下 ああそうでした一障害の前でした
かありましたね。

内田 どうもありがとうございます。と
ころで直線にされたのは旭川が最初で
したが他の市が四十三年に一齐にやっ
たんですが、現在の障害とか、砂障害
はどのような経過で出来たんですか。

大久保 そうですね、旭川は砂障害は最
初から作ってましたね。

U字形の時は一障害と二障害だけで
した。二つでは物足りないという訳で
旭川の場合は一障害と二障害の間が相
当距離がありましたからね、その間に
山の障害を作ろうかという話もありま
したが、それではあまりだという訳で
砂を厚く敷く程度で良いだろうと今の
ようなものを作りました。

小路口 内田さん、砂障害を作りました
のはね、ばんばの場合天候の関係で天
気が良いと重いし雨が降ると軽いで、
北見なんかは一番軽かったんです
が、雨が降るとカーブを押え切れない
んですよ、それでカーブで混んでしま
うんでそれをくい止めようとしてしま
して砂を多くしたり少くしたり加減し

たんです、それが砂障害の最初ですね

瀬下 スピード調査ですね。

内田 それと当時騎手がばんば競走で食
つていこうということはなかったよう
に思いますが、本当の楽しみとでもい
いましょうか。

瀬下 私の馬に私が乗って出なければ参
加しないといいますが、先程坂井さん
が苦勞話をされておりましたように当
時は自分の馬に自分が乗らなければ参
加しないというのが圧倒的でした。

内田 それで優勝旗とか、メダル、とか
いのはどうでしたか。

瀬下 最初売上も悪いし、とにかくやら
してくれ、それに勝ったという印があ
れば良いということで賞金はもちろん
ほしかったでしょうが、それよりも優
勝旗とかメダルをほしがっていたのは
事実のようですね。それを良いことに
主催者が経費を掛けないように便乗し
たのが、主催者のうまさですね。(大
笑い)

大久保 それに売買するときに馬の強さ
を示す証拠品として価値がありました
ね。

瀬下 その名譽欲に結びつけて当時馬に
関しては北海道庁のお墨付きがあれば
相当のものでしたから、道営でもその
ようなものを出しておった。名譽は金
に替えられないということだったんで
すね。又優勝一回につきいくらと馬の
値段にプレミアが付いたはずですよ。

坂井 それを一番利用したのは道だと思

うんです。部落の方へ行くと競馬は、市でやっている市営競馬でさえも、市営競馬といわないんです。道営競馬道営競馬というんですよ。本競馬と草ばんばがありまして私達のやっているばんば競馬を本競馬とってたんですが、それを道営競馬というんです。

内田 なるほど、さてその時代時代の名馬がいると思うんですが。

瀬下 当時有名な馬というのは第一回旭川を始めてからずっと優勝し続けた馬に「コトリ」という馬がおりまして、せん馬で九才で初めて出て来まして、この馬は日通の市内小運搬の馬で、この馬が出て来ると圧倒的な人気で甲馬なので。最終レースになるんでしょうが、コトリが出場してもらえるか、もたえないかということも番組といま

すか、その競馬に関する人気の「メド」にもなっていました。当時は今のように入既するわけではありません。朝日通から小運搬に出て競走の時間を見て競馬場に来るといこととでした。スタナトについても今のよう

にいぎりたつて駆け出す風習もなし、スタートからゴーといったら並足で全部一寸の休みもなくそのままのスピードでゴールインしたものでした。これは私秘代の名馬だと思いました。たしか十一才まで出場したはずですが、これに対抗するのが、永山から出ました「アズサユミ」という馬でした。この馬は栗毛の中間種で、今の体型区

分からいいますと乙馬でしょうが、牝馬で繁殖牝馬にしたらまことに立派な繁殖牝馬だと思いました。とにかく北海道のばんばを代表する馬として力量において「コトリ」馬体において「アズサユミ」とこれが不滅の名馬だと思います。

大久保 その後に「キリン」「バンニューハ」ですか。

小路口 その当時は「キリン」「サツキ」「イコイカチノボル」これが本当の甲馬で他の馬は付け馬でした。その後、バンニューハです、いや失礼バンニューハの前に、ヤスヒラ、がいました。

大久保 ああそうでしたね。

内田 騎手について思い出なんかありませんか。

瀬下 騎手についての思い出は、ばんばい騎手は重量物を運搬するので、相当がっちりした騎手が多い中に七条好春という男がおりまして、体重は四〇K台でしたか、これが一千Kもある馬を駆するというのだから人一倍の力を出さなければならぬだろうし、それは異色の騎手でした。

内田 七条は今道営競馬の調教師になっていますね。それと特別重量というのは坂本さんの時代でしたか。

小路口 はい坂本さんのときでした。特別重量と短距離特別重量というのがありまして、短距離特別というのは距離が百メートルで障害は一つよりありませんでした。その発走線まで、当時十

六頭立でしたがそこまで橋、重量物を運搬するのが大変でやめてしまいました。しかし馬券の売上げは良かったです。

内田 北見で平地競走にばんばを二つ混ぜてやったことがありましたね。

小路口 それは昭和三十三年の八月で旭川でばんば、北見で平地をやったとき馬が不足してたので、二レースだけ三才でしたがばんばをやりました。

瀬下 平地の馬も当時少なかったですか。

内田 先程馬の勧誘の話がありました。

が、帯広、旭川はそのような苦労はなかったんですか。

大原 いやありました。奨励方法として各町村の対抗レースを作っていました。

内田 岩見沢もありましたね。

瀬下 貯炭場まで出かけて馬体検査をしたものです。

内田 それで丁B級というのが出来たのかな。

小路口 丁B級というのは北見です。

坂井 いや北見の場合は丁Bまで行かないんです。丁Cといいますが、管内馬

といまして管内馬レースを作り地元の弱い馬だけでやりました。畑へ行っ

て勧誘するときお前の馬は管内馬で走らしてやるからといって勧誘して歩いたもので当時瀬下さんなんか馬体検査で大変苦労したと思います。

内田 何頭位で足りないといったんです

か。

坂井 北見は八十頭いれば良い方で。

内田 それ以下だったので勧誘したんですね。

坂井 六十頭位でしたので勧誘したと思っています。

内田 大変面白い話を沢山聴かして頂きましてありがとうございます。まだまだ、ばんば創の頃の面白い話が

沢山あるだろうと思いますが、この辺で座談会を終らせて頂きます。皆様本日は、どうもありがとうございました。

昭和48年 引退馬の表彰一覧

馬名	初出走	級別	馬主	調教師
キンタロー	38年	A	早勢 忠夫	早勢 巖
トヨタカ	38	B	鷹松 真一	大野 英夫
サカエコマ	41	D	猿倉 久松	坂本 和昭
ミスプリンス	38	D	水上 勇	水上 勲
ニホンザクラ	39	D	河野ヨシエ	平田 正一
モクセイ	38	C	前原 幸子	前原 芳郎
キリンオー	38	B	堀口マサ子	重田 清

大成功をおさめた

大井ばんえいアトラクション

「ただ今、登場して参りました馬は、現在北海道で行なわれておりますばんえい競走で、活躍している重ばん馬であります。」

戦後昭和二十一年制定された競馬法で、始めてばんえい競走が公式競馬として、行なわれるようになりました。

これは世界でも類例のない珍しい競走であります。

二十八年前、敗戦のころ食糧の増産、耕地の拡張、肥料の増産、運搬輸送力の確保は当時重要最大の国策でありました。

そのためには産業用馬の生産が急務中の急務とされ、競馬法の中にばんえい競走が加えられたのであります。

農村のレクリエーションとして、お祭りなどに行なわれていたばん馬競走は、そのままの姿でファンの前に躍り出て参りました。

それから既に二十八年、ばんえい競走は改善に改善を加え、北国の豪快な競馬として定着しております。」

地方では全国随一を誇る大井競馬場、ほぼ満員の観衆に場内アナウンスが紹介する。この放送約一分半、その日八月十八日ファンの入りは約三万人。

はるか六頭の重ばん馬が前後を純白の誘導馬に守られて入場してきた。1トン以上のリツケイ、以下九百キロ以上の堂々たる入場行進である。

場内アナウンスが各馬を紹介する。

1番 タカマスゴ

九〇四キロ前原騎手

2番 ヒラマザン

九一九キロ晴披騎手

3番 リツケイ

一〇〇五キロ山本騎手

4番 バンユウハ

九二九キロ光富騎手

5番 コマバ

九六四キロ中西騎手

6番 エタロンヒメ

九一三キロ南坂騎手

「オーッ」という声が大観衆の中から湧きあがる。

「どうぞ皆様、遠く北海道からやってきた重ばん馬と、ジョッキー諸君に拍手を送って下さい。」

アナウンスの終わらないうちに万雷の拍手がおこった。

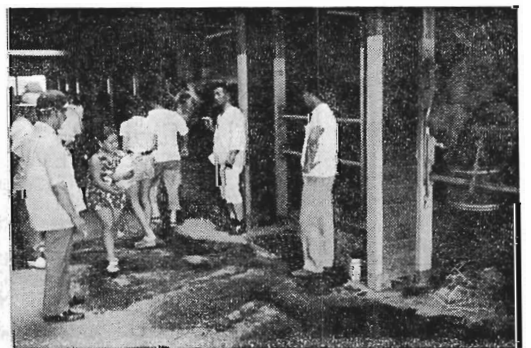
馬はスタンド西側のあたりでUターンして再びファンの前にくる。

「トホーッ まるで象だ」

「すげエナア 全く」

「ヒヤー野牛みたいだ」

「すごい 横綱の土俵入りだ！」



大井厩舎（装あん所）のみんながやってきた

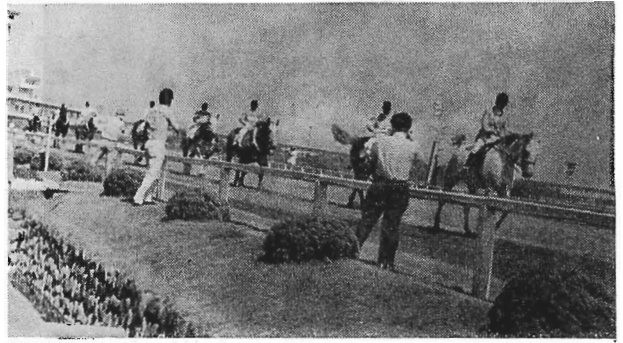
あちこちから驚嘆の声がきこえる、平素四五〇キロ前後の馬しか見ていないファンにとって、その二倍もある馬なのだから無理もない、カメラを持っていないファンが実に多い。

出馬表の中には当日競馬終了後、ばんえい摸擬レースが行なわれる旨案内がのっていた。またかねて新聞等で今日あることを知っていたのだ。

これより先六月下旬、全国公営競馬主催者協議会を介して、大井でばんえいアトラクションをやってみたいという交渉があった。主催は東京都特別区競馬組合、協賛は本会ということである。ところがこちらも競馬を開催している最中であるから代表馬を送るといふわけにはいかない、また岩見沢、旭川の大馬場で充

大井到着





重ばん馬供覧

分稼げる馬に行けということもできない。結局なるべく大型の馬、騎手、厩務員が揃って行ける希望者をつのり、その中から選ぶということにした、幸いリッケイ以下A B級の優秀馬が揃った。二台の大型トラックに馬六頭、重量物十八個、そりにかち棒、胴引きなど競走用具馬具一切、飼糧、岩見沢から寄贈の古木そり一台が積み込まれた。

八月十四日午前十時、職員や厩舎の人たち大勢に見送られて岩見沢を出発した。これにはこの記念すべき行事を逐一記録に残そうというので、旭川市役所のカメラクラブの木村さんが八ミリカメラマンとして同行した。

本会からの先発隊は旭川市の大久保、金子氏、北見市の坂井、平元氏が十五日到着して走路の造築整備や打合せに当たった。

帯広市川久保、藤島氏、馬主騎手会宮腰、宇高、葛田氏、旭川協力会長長谷脇氏、本会事務局長もあとから参加した、岩見沢市は開催中で不参。

ばんえい馬の厩舎になっている装あん所は到着以来、大井厩舎の連中が、ひっそりなしに遊びにきて、重ばん馬の大きいのに驚いたり、でっかいひづめにたま



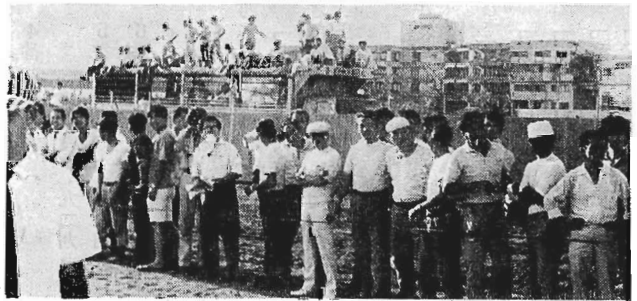
人気のリッケイ

げたり、二、三人で馬に乗せて貰ったり大変な人気。

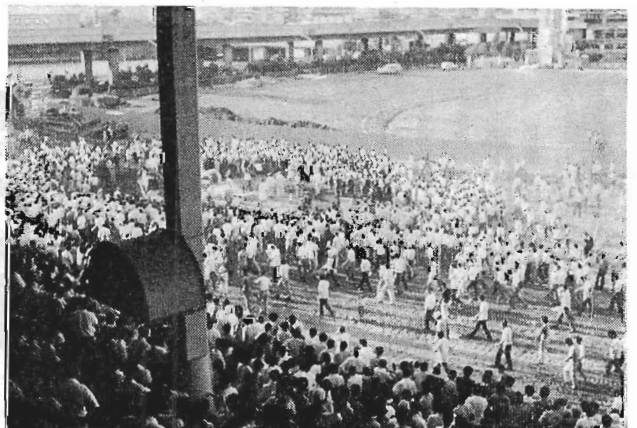
本番当日は朝から報道班の連中が押しかけ、騎手や家族をつかまえてポーズをとらしたり、取材したりした。

農林省、全国協会、報道関係者、その他来賓があとからあとから訪れた。

主催者は応接室をわれわれの控室にとってくれたが、そこはもう報道班の人たちで一杯、筆者が応対しただけでもN E



狩勝トラックの屋根にも一杯（8月18日）



ファンは走路になだれこんだ（8月18日）

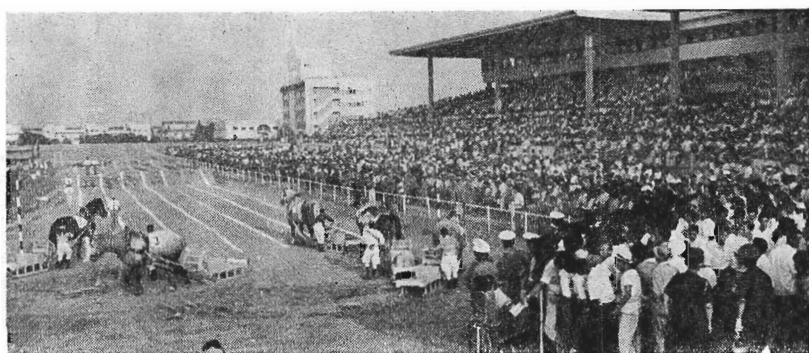
Tテレビ、富士テレビ、H E G 教養テレビ、東京放映、日刊スポーツ、ポスト、啓衆社、競馬研究社など十社に近い。

競馬が終る頃、ばんえい特設コースの準備も終っていた、移動してきたファンは忽ち旧オート競馬場の大スタンドを埋めつくし、地面の立ち席も、コース対面の向側も満員になった、ばんえい馬を輸送してきた狩勝トラックの屋根にも人は群がった。スタート附近、走路の両側は人々で超満員、そしてその人担の最前列は見わたす限りカメラの放列だ。

スタート!! 馬は走り出した。第一障害をこえた瞬間二、三人のカメラ

ランマンが障害の上に駆け上ると、ファンがドッと走路になだれ込んで、もうあとは馬の走る前方だけがあいているだけで、人の海にのまれてしまった、馬のあとについて走る人々、砂塵が蒙蒙としてあがる異常とも思える人気だった。駈歩、第一バンケットこえ、速歩から常歩、第二バンケット前ストップ（ここで一寸笑聲がおこる）そして最後の追込み、一五〇米四八秒（二〇〇米換算一分四秒、障害が低いので速い、次の日は一分二八秒）

・・・レースは終わった。一列になってスタートのほうへ帰ってくる馬をファンはとり囲んだ、



2日目スタンドは満員（8月19日）場内整然

ファンはいつまでも帰ろうとはせず、馬繋所に入った馬を遠巻きに見ていたが、やがて近くへよってきて、その大きさ、たくましさを目を見はるのだった。

「でかいナア」

「凄いなア」

「おとなしいんだナア」

彼等は何でその皮膚にさわりたい、それはこの大きな図体の馬を愛撫す

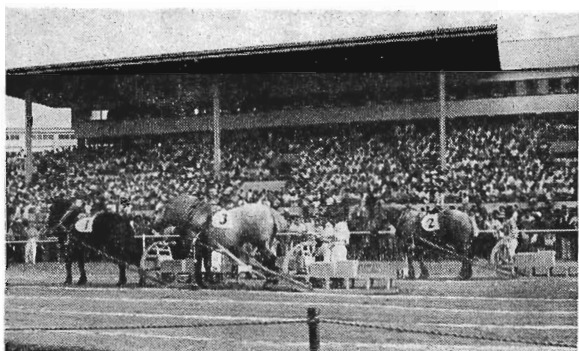


ファンは馬のそばへやってきた

るかのようになり、なでたりさすったり軽く叩いたりする。馬も又その愛撫を快よく受けて目をほそめて動かなかつた。

それは縁を失ない、車の洪水の中に喘ぎつつ、競馬に憩いを求めてきた都会の若い人たちが、まるで北海道の大自然に接したような風景であった。

翌十九日、二日目の打合会は大変だった、今日でお別れだからアトラクション終了後、各騎手に花束を贈ったかどうか、という案が出て皆大賛成したが、前日の大混乱でも走路では危険だということ、それでもあるまいというのと意見が分かれ、なかなかまとまらない、結局馬場供覧のときに渡して、手に持って行進ということにきまつたが、その日は場内取締方針も二次発動（禁止区域侵入者に対する強制排除）としたので、さすが整



螢の光と拍手に送られて

漆として前日の混乱は全くなかった、これならばんえいコースで授与してもよかつたなと思つた位、この催しがいかに人氣があつたかを物語る小話である。二日目の入場者は約四万人で、ばんえいを見にきたファンも昨日を上廻つた。

二日間の大井ばんえいアトラクションは盛大裡に終了した。

万余のファンがビッシリと埋めつくした大スタンドに「螢の光」が静かに流れた。

今日は一人も侵入しなかつた走路を六頭の馬が、ゴールラインでUターンして、スタートのほうへ引返していく、時折り一斉に停止して観衆の拍手にこたえた、最上階の委員席から眺めると、それは

美しい別れの風景であつた。

群衆の大きな流れが出口のほうへ動き出したが、多くのファンは昨日と同じように馬たちを遠巻きにして残つた。

第一障害の頂上までいくと、騎手は馬をとめて櫓から離した、厩務員が馬をひいて去り騎手たちは障害の上に残つた、櫓からかち棒などをはずし、一箇百キロの重量物を下ろした、トラックがやってきて接岸した、サア積込みだ。

騎手たちは勝負服をぬいで、二四〇キロの鉄籠、百キロの重量物など次から次と鮮やかな荷さばきで、手際よく積み込んでいく、特に指揮者もいないのに突に手馴れたものだ。

「ホー やるねエ」

「ばんえいの騎手って働くんだナア」

「腕つぶしが強いんだナア」

「なんとなく真面目だね」

「すれてないよ」

などという声がきこえてくる、なにしろ百キロ（三七貫余）の重量物を一人で持ち運ぶのだから驚くのも無理はない、このアトラクションは大成功だつたと思つた。

……日が暮れはじめ、遠くに電灯がつかのが見えた、トラックが動き出し、ファンは三々伍々去つて行った。

北海道の珍らしいばんえい競走を大井競馬場に再現してファンに見せる、東京都特別区競馬組合の企画は、いろいろな意味において大成功をおさめたものであつた。

動き出した馬産奨励事業

生産者賞、種雄馬管理者賞

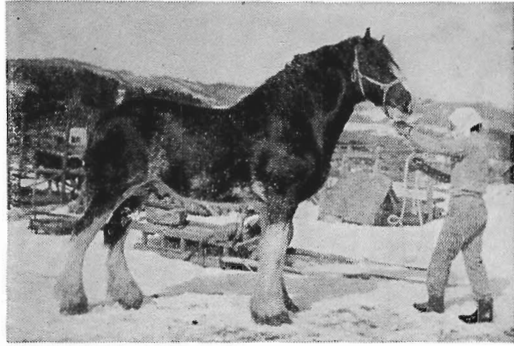
祭典ばん馬優勝馬 副賞

(農ばん馬血統証明制度の確立)

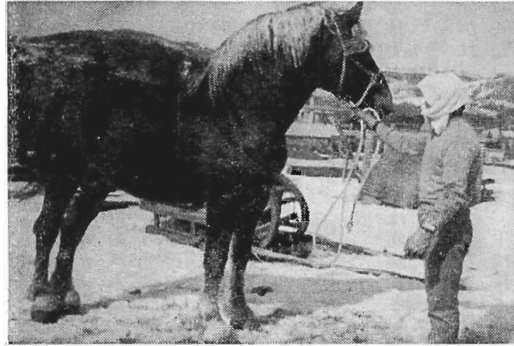
1 生産者賞二頭分を

獲得した斉藤さん

生産者賞は昨年走った明三才馬のうち、受賞額第八〇位までにランクされた馬の生産者に対して一頭につき五万円づ



輸入クライズデル種雄馬 壮瞥町森牧場



輸入ベルジン種 壮瞥町森牧場

つ交付されるものだが、川上郡標茶町の斉藤良作さん生産のイチモンジ、カネヒサの二頭は見事この賞を獲得、金額はともかく二頭授賞は唯一人(ほかに受賞対象外の新得畜産試験場産イチタカラ、イコマの二頭がいる)

なお雌馬は別に二万円交付されるが、受賞馬はミスサカエ、リンダア、フブキ、タキヒメ、カネサイチフジ、ミスコハマの僅か六頭。

2 種雄馬管理者賞の

首位はアプレス号(網走)

この賞は昨年能力検査に合格した明三才馬の父である種雄馬管理者に対して、合格馬一頭について三万円宛交付されるものであるが、種雄馬アプレス号の子は六頭合格となり、本賞発足第一年目の第一位として賞金十八万円を獲得した。

3 祭典ばん馬優勝者へ副賞授与

昨年はこの事業発足年なので、ありきなどの賞品でなく真に記念になるようなものを贈りたい、ということから、八月末その製作を旭川市旭ヶ岡に窯場を持つ名工阪東陶光氏に依頼して、重ばん馬のレリーフを作ることになった。これは最近漸やく完成したので近く主催者に送付し受賞者に贈呈される。(終了報告あったものに対して送付)

申請団体(主催者)

会長

白糠町愛馬同志会

高橋 亀吉

池田町挽馬愛好会

田中 弘

和寒町挽曳会

三原 誠一

美深町馬事振興会

南坂 俊雄

士別町畜産振興協議会

田刈子政太郎

東士幌馬会

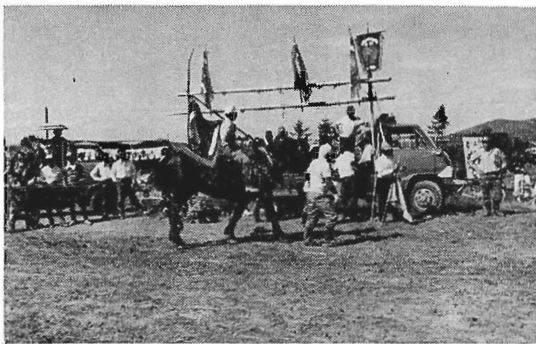
田村勝次郎

鹿追町

町佐渡一男

足寄町馬協

斎藤 裕一



優勝旗授与(和寒町)



和寒町ばんえい大会 9月7日16レース

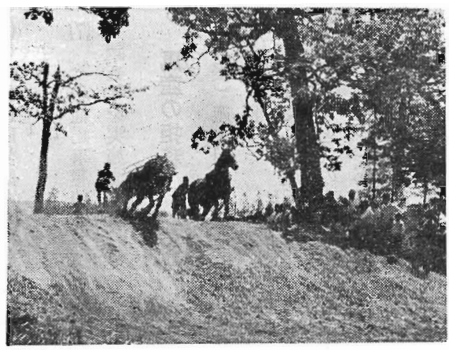
- 丸瀬布町ばんば競技会 丸山 弥七
- 芦別市市長 細谷徹之助
- 渡島家畜商業協同組合 松田朝太郎
- 美瑛町農藝協同組合 早坂 正吉
- 愛別神社祭余興ばん馬協議会

- 佐呂間神社祭典委員会 近藤 庄吉
- 高橋 久市
- 以上一五団体

4 血統証明制度の確立

農林省当局の指導にもつき四六年八月二三日日本会臨時総会で、ばんえい競走馬（産業用馬）資源対策を立案することとなり、本会においてその試案を作成、この際混乱していく農ばん用馬の血統登録制度を確立するよう要望することを繰り込み、四七年四月八日臨時総会（助役会議）を開いてこの資源確保対策を樹立、関係方面に陳情書を提出した。

その後農林省、全国協会等で検討が続



第23回池町ばん馬競馬大会 6月17日20レース

けられていたが、昨年農林省から提示された競馬の公正化対策事項中にこれが明記された。競馬の公正を期するためには先づ競走馬が公正でなければならぬとする趣旨と思われる。

足かけ四年目で調査費がつきよい日本馬事協会で実施することになった。登録規定の作成認可、従来の登録団体からの引継、実馬検査の方法などを詳細に調査し、この制度の一元化という画期的な改革は明年度において実現する見込で本年の全生産駒について検査がある。

5 新しい血統証明書の

ない馬は出られない

主催者はこれに呼応して、新血統証明書を所有する馬が三才になったときは、それを持っていない三才馬は出走を拒絶し、生産奨励賞の対象ともしないこととし、また新血統証明書を所有する馬が四才になったときは、その年以降、持っていない新馬はすべて出走できない方針をきめている。本年馬事協会が行なう実馬調査で産駒の検査を受けたものは明年新血統証を交付されると思われるのでことし生まれた馬で将来ばんえいに出したい（売りたい）馬は全部検査を受けておく必要がある。

6 ばんえい競走馬（産業用馬）

資源対策

本会はばんえい競走馬の生産を促進することは、即産業用馬の生産を保持改良



白糠馬力競技大会 8月16日14レース

することとなり現在なお必要とされている冬山造林、客土、積雪地帯の輸送、あるいは食肉資源としての旺盛な需要をみたす道であると考え、更に又非常の場合（石油危機等）の動力源として、馬の維持改良を構想する今後の馬政の転回等を想定し、馬資源対策を樹立実行することとした。

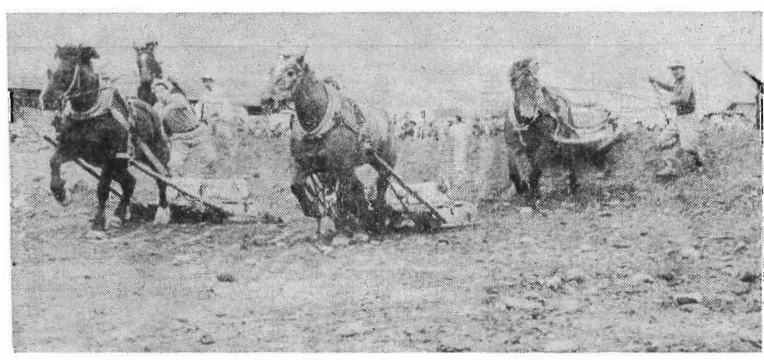
競馬施行者が直接生産奨励事業を実施することは、中央競馬会の生産者賞、抽せん馬、種雄馬の購入配付等があるが、産業用馬についてはこれが始めてである。

これを推進することによって馬産農家と共にゆくばんえい競馬本来の開催目的を達成しようとしているのである。

7 資源対策の概要

- (1) 新馬の年令を明六才以下、古馬は将来明十才以下に制限し、生産、消

- 流の回転を速める
- 三、四才馬等若令馬競走の優偶策をとり生産の助長を促す
- 雌馬レースの特設・減量、雌馬生産者賞などによりはん殖種雌馬の保持改良につとめる
- 農ばん馬血統登録制度の確立を要望する
- 生産者賞、種雄馬管理者賞、祭典ばん馬保存奨励等馬産奨励事業を実施する



大野町ばん馬競技大会 5.3 東北式23レース

(6) 馬事PRを目的として会報を発刊する

(7) その他馬事懇談会、馬事に関する調査等を実施する

8 馬産の拒移

(別表) 産業用馬主産地における馬産事情

この表によって最近三年間の前年比生産頭数を見ると次のとおりである。十勝においては減少率がグッと減じ保合の兆候が見えている。北見は増加の方向へ転回している。ただ繁殖めす馬は全体に減少している。

前年比種付、生産頭数

年次	十 勝		北 見	
	種付頭数	生産頭数	種付頭数	生産頭数
46	⊖1950	⊖1714	⊖ 949	⊖ 473
47	⊖1022	⊖1022	⊖ 53	⊖ 508
48	⊖ 267	⊖ 450	⊕ 109	⊕ 31

産業用馬主産地における馬産事情 (48.3.1)

(二) 北見管内における産業用馬の動向

イ 馬頭数と生産の推移

年次	馬総数	繁殖雌馬数	種付頭数	繁殖率	生産頭数	種雄馬数	1頭当り種付頭数
45	11,468	7,357	2,223	30.2%	1,637	36	61.7
46	8,925	5,665	1,274	22.4"	1,164	26	49.0
47	7,038	4,485	1,221	27.2"	656	16	76.3
48	5,837	3,328	1,312	66.1"	687	14	93.0

ロ 市場成績

年次	売買頭数	最 高	最 低	平均価格
45	776	150,000	10,000	34,347
46	409	150,000	21,000	55,423
47	172	300,000	50,000	113,334
48	184	563,000	75,000	204,130

ハ 共進会市場成績

年次	売買頭数	最 高	最 低	平均価格
45	20	600,000	81,000	250,750
46	28	610,000	161,000	285,500
47	31	950,000	235,000	382,387
48	27	1,810,000	360,000	606,296

(一) 十勝管内における産業用馬の動向

イ 馬頭数と生産の推移

年次	馬総数	繁殖雌馬数	種付頭数	繁殖率	生産頭数	種雄馬数	1頭当り種付頭数
45	15,682	12,836	6,317	49%	5,273	87	73
46	11,013	8,902	4,367	49"	3,559	60	73
47	7,977	6,573	3,344	51"	2,256	44	76
48	6,614	4,805	3,077	58.7"	1,806	43	71

ロ 市場成績

年次	売買頭数	最 高	最 低	平均価格
43	1,005			87,852
44	545	670,000	30,000	102,085
45	527	670,000	25,000	103,752
46	489	633,000	47,000	143,094
47	466	1,000,000	92,000	213,682
48	454	1,360,000	151,000	331,047

ハ 共進会市場成績

年次	売買頭数	最 高	最 低	平均価格
43	38	900,000	130,000	306,686
44	24	630,000	125,000	295,250
45	15	620,000	146,000	329,267
46	19	600,000	211,000	336,000
47	17	1,000,000	260,000	509,412
48	29	1,300,000	336,000	596,380

種雄馬管理者賞受賞者

(合格頭数三頭以上)

種雄馬名	管理者名
アブレス	衣笠 董
オナシス	武田 長吉
ウルバン	幕別農協
キプロク	北村鉄太郎
アルフォル	藪野 恒夫
ビジュー	鴨部 彬
農 円	岡山 久雄
	湧別町

生産者賞受賞者(上位者)

生産者名	主な馬名
小林 盛	ソウシン
沢田 力春	シンツバメ
吉井 助一	カチタカラ
内藤竹次郎	サロマテンリユウ
富永 浜次	カッタカラ
山中 正芳	ライデンオー
秋山 実太	ナカフムサン
筒井 弘義	キヨモリ
宮崎 修人	ダイイチカツエイ
田中 常平	エイシヨウ
坂本 建一	ホクトオーザ
斎藤 良作	イチモンジ
山根 勝美	キブオーザン

ばんえい競走とは

どんな競走か (4)

内田 靖 夫

北海道市営競馬協議会事務局長

まんが うちだやすお

◎どこが面白い

1 ばんえい競走の面白さ

昨年はばんえい競走の大きな飛躍の年であったが、また報道界の取材も大変多かった年である。

さて、その取材のときにいつも聞かれることは「ばんえい競走のどこが一番面白いのか、どこに興味があるのか、目のつけどころはどこか」ということであった。

我々専門家は、実はどこが面白いのかというテーマで研究したことがない。ただもう競走を公正にやるといことが、最高最善唯一の道だと考え、公正にやっでいきさえすればファンサービスは完全であり、成績は向上するものと考えていた。

どこかに面白いところがあるとして

も、それが公正に行なわれていなければ「面白い」もヘチマもない。

競走が常に公正に行なわれていればこそ「ばんえいの面白さはナニカ」を論ずることができるのである……という立場からサテ僅か二〇〇米のレースで、ナニが面白いことになるのか考えてみた。

2 馬の良さが面白い

ばんえい競走に集まってくる馬はほとんど八〇〇キロ以上の馬である。(表一)は昨年第一回旭川競馬の馬体検査における体重と前年の比較である。

四十七年と四十八年で八〇〇キロ以上と以下の頭数が逆転しているのは、体重制を撤廃した結果である。更にそれを細分して比較してみると(表二)

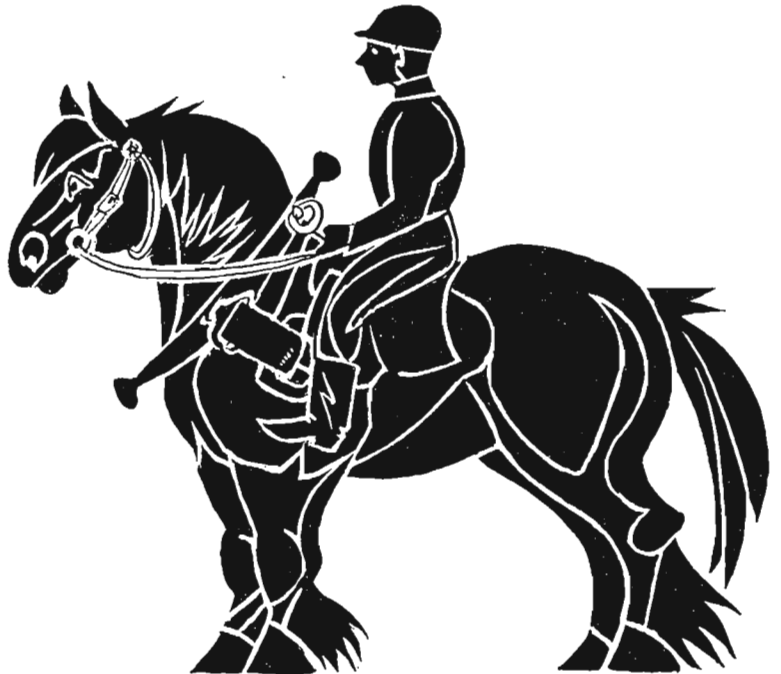
体重制をとっていた四十七年はA級わずか二十一頭、D級が一〇六頭もいたの

表1 諸検査合格頭数の前年比較 (5才以上)

◀48年 296頭▶		
800K 以上	245頭	82.77%
800K 未満	51頭	17.23%
◀47年 330頭▶		
800K 以上	99頭	30.00%
800K 未満	231頭	70.00%

表2

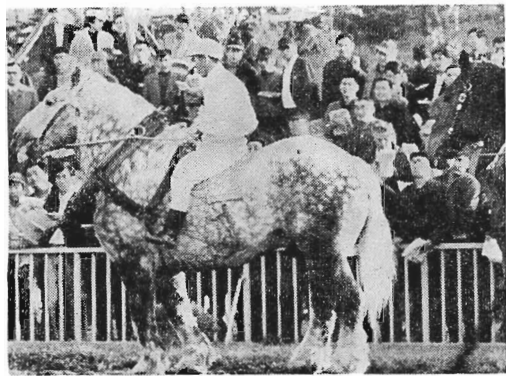
格付	体 重	48年	47年
A	901K以上	96頭	21頭
B	811 "	135 "	62 "
C	731 "	60 "	141 "
D	730K未満	5 "	106 "
計		296 "	330 "



に、体重制を撤廃した四十八年はA級が九十六頭にもふえ、D級は僅か五頭に減ってしまった。

現在のばんえい競走馬は戦前戦後を通じて、一番充実した馬格を備えるようになった。これはばんえい競走二十八年の歴史がもたらした影響でないかといわれている。今や北海道重ばん馬は世界的水準にあるといつてよい。

その堂々たる体軀、均整のとれた体型はまさに力の象徴だ。柔和な顔、ピンと張った耳、重厚な脛、幅広くそして深い胸(背から胸下までの長さ)、厚く盛り上った急斜面の肩、頑強なふとい足、大きなヒズメ、ガッシリとした尻と股は力の中心である。そして強い尻尾、誠に惚れ惚れするベルシユロン、ブルトンである。下見所で見ると、馬場へ出てくる馬



を見て、思わず「大したもんだナア」と見とれてしまう。

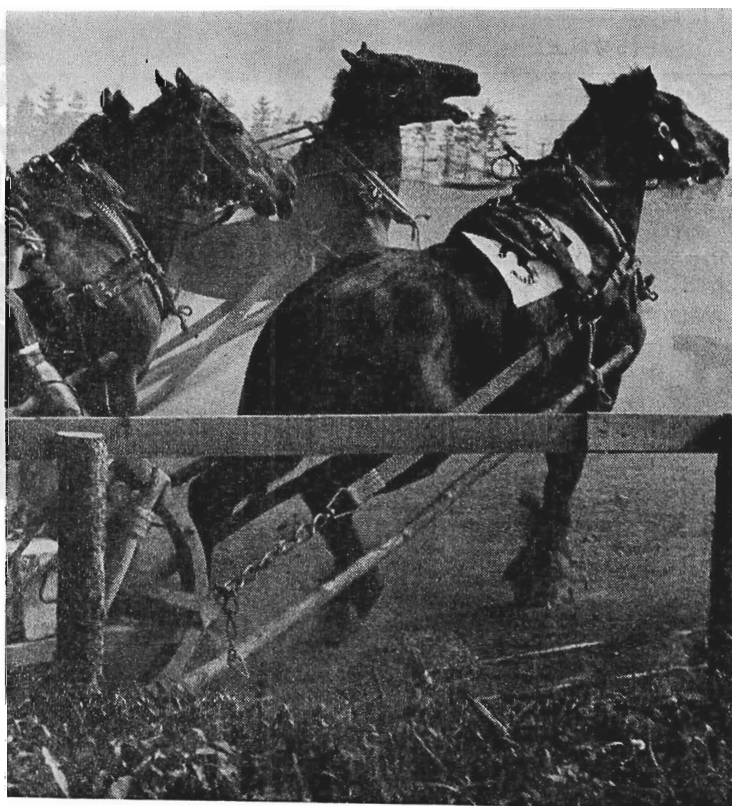
興味のある人や、研究熱心な人はその血統を追ってみたい。良型馬、成績優秀馬の血統を知るとは最も高度な馬好きの趣味でもあり、専門家にとっては、馬の改良上ぜひ覚えなくてはならぬ常識でもある。

3 強力無双の力感に

しびれる面白さ

一屯前後の見事な重ばん馬が、七〇〇キロ以上もある重量をグイグイ引っぱっていき力量感の素晴らしさ、特に最後の難関である第三障害登坂時の、豪快な力の爆裂はばんえい競走最高の魅力だという人が多い。

この第三障害の前では、一旦停止して息を入れる、その休息するタイムは概ね七秒前後が理想とされているが、騎手は日頃の熟練でその頃合をみはかり「イヨッそれッ」とばかり発進体勢をとるのである。ときに馬は、やはりにはやって自から発進することがある。それが最も良い「時」であるかどうかは、制限時間と騎手の熟練による。正に「あうん」の心気合体の一瞬、一気に頂上に追い上げてしまうもの、前進ストップを繰り返してシリシリと追い上げるもの、野牛のような重ばん馬が髪を逆立て、ふりみだしグッと腰に力を入れてグググッと引っぱり上げる、歳のような筋肉がピリリと躍動する、一腰二腰、二合三合、鉄ぞりが



前進していく。

その馬と人との「力と技術」の死闘は、もうとてもばんえいならでは見られぬ「絶妙」であるという人が多いのである。

4 湧き上る大かん声が面白い

ばんえい競走では、平地競走に見られないようなごうごうたる大かん声が、時折湧き上がる。第三障害をこえてゴールに殺倒する各馬がストップゴー、ストッ

プゴーを繰り返して接戦を展開するとき、スタンドの大かん声は湧きに湧き、それでは一つその状況を紙上で再現してみよう。

これは昨年の八月十三日第三回岩見沢第三日目第一レース(3才)に起きた大かん声、朝の第一レースであるからまだお客さんは五分の入り、それでも拍手かん声は場外一帯にひびきわたった。この日は月曜日晴天馬場やや軽出場馬は次の八頭 重量オール二六〇K

- 1着 サカエタカラ 一分四二・〇
 - 2着 ムサシオーザ 二〇一九・五
 - 3着 トラマル 二〇二〇・三
 - 4着 ボルガ 二〇二〇・六
 - 5着 コガネフジ 二〇二〇・七
 - 6着 キタカゼ 二〇二一・四
 - 7着 ダイハヤテ 二〇二二・五
 - 8着 アサヒミノル 二〇三一・〇
- このレースはサカエタカラが第二障害あたりから先頭に出て逃げ切ったレース。

第三障害を先ずタカラこえ、独走のちで二位以下を大きく離す。次いでハヤテ、トラマルが同時にこえ、そのあとミノル、ムサシ、ボルガ、コガネほとんど並んで坂を下りる。ミノルやおくれる。二位以下の各馬一団となる、ハヤテがチョット鼻先きだけ早い、接戦、接戦(ワーツ)ムサシわずかに出るアツ、ムサシとまった(ワーツ)ゴールまであと一〇米、またハヤテが出た(ワーツ)ムサシ、ダングンもりかえず(ワーツ)コガネが出た。アツ、コガネストップ(ワーツ)ボルガもとまった(ワーツ)ボルガでた。コガネもでた(ワーツ)混戦混戦!ゴールまであとわずか、各馬全く一線、アツ、ハヤテとまった(ワーツ)ハヤテあるいた早いぞ(ワーツ)みんな並んだ(ワーツ)六頭全部一線でゴールに殺到(ワーツ、ワーツ)といった具合である。

一着はサカエタカラ、二着以下写真真定でムサシオーザが二着となる。二着か



ら七着まで六頭の差僅かに三秒(馬の鼻先からその後端まで一馬身の速度は大體四秒から八秒である)

観衆のかん声があるときをもって面白いとすれば、ばんえい競走特有のストッブゴーがばんえいの面白さであるということになる。

そんなときファンの中には男性女性の別なく我を忘れて、馬と一緒にゴール目ざして走り出す人がいるのである。

5 競走方法の面白さ

スタート!! 重宝馬の豪快なスタート、地響き立て、窮進してくる。最もスタミナのあるときだから、駈歩疾走で一気に第一障害をこえてしまう。ここは平地のスタートからスタートダッシュの区間とよく似ている。

それから平地競走のようにヤヤマをラクにしていく、しかし隊列から離れないように、虎視たんたんとして他馬とのかね合いを見はからって歩度を調整しつつ好条件の位置についていく。

第三障害前の息入れ数秒、発進、それからの騎手はあらゆる秘術をつくしてゴールまで追い込むのである。わずかに二〇〇米の競走の中で、その追い方は大體平地レース同様であるところが面白い。

現在は三ヶの障害があるが、平坦地では実重量より二割方軽くなり、障害登坂のときは逆に実重量より五割方重くなる。かりにけん引する重量が七〇〇キロだとすると、平坦地では約五六〇Kとな

り、障害登坂のときは約一〇五〇Kにも達する。テンションメーターで計測した表を見るとよくわかる。

6 馬場変化と競走変化の面白さ

これはばんえい競走の最も大きな特徴として、専門家が一番面白く、かつ最もむつかしい、興味深い研究であると考えているものである。簡単に一つの例でいうと一昨年のばんえい競馬十一月六日第四回岩見沢第四日目は一日中降りしきる雪で馬場は軽々となり、現在ばんえい競走最高のレコード三七〇Kで三七秒四の記録を作った日である。その日の三九〇Kレースでは四七秒九であったが、同じ三九〇Kレースで比較してみると（表三）のようになる。

これで見ると晴重馬場に対して、雨軽では約一分の差、雪軽では約一分三〇秒の差である。これは晴重、雨軽、雪軽という三種類の馬場でくらべてみても、晴重と雨軽の二種類でくらべて

みても、もっと大きな差があることがあるのである。

一昨年旭川の例（表四）で考えてみよう（昨年私は一ヶ月余不在だったので四十七年の資料による）

この表で見ると雨軽と晴重では三〇〇Kレースで一分二〇秒の差があり、三九〇K以上のレースでは二分以上の差があったのである、僅か二〇〇米の競走で、走路の変化によってこんなにタイムが伸縮するスポーツは他に例がない。

この表では三〇〇Kレースと三九〇Kレースの最低タイムが、全く同じの一分一八秒台である。これは最高と最低の比較で、極端と偶然の要素が大きく、参考資料とするには妥当でないが、ともかく三〇〇Kレースの一着Dシゲハヤに対して、三九〇Kレースの一着馬Cマサオーは九〇Kのハンデキャップがついて、頂度よかったということになる。

ところが実際はそうではないようだ。

表3

日次	馬場	タイム	差
9. 2	晴重	2分13秒9	
11. 10	雨軽	1分16秒1	57秒8
11. 11	雪軽	47秒9	86秒0

表4

積載重量	レース数	最高タイム 晴重	最低タイム 雨軽	最高最低 タイム差
300K	23	2:38.7	1:18.1	1:20.6
390"	34	3:26.7	1:18.8	2:07.9
450"	16	3:49.3	1:33.6	2:15.7
500~590"	15	540K 4:13.3	540K 1:48.5	2:24.8

馬場が軽くなると、負担重量を軽くしたと同じことになり、その減じていく比率は重量が軽ければ軽いほど少なく、重い

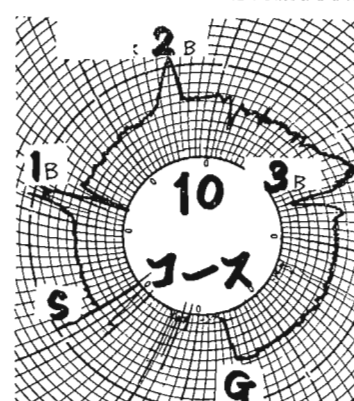
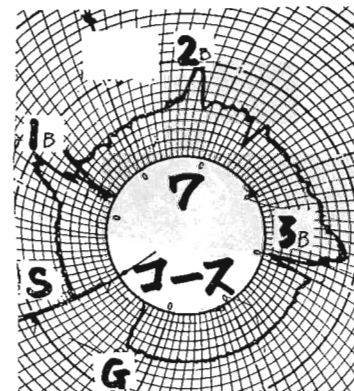
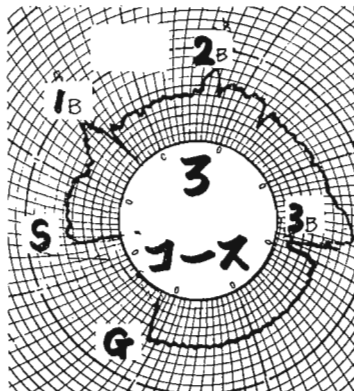
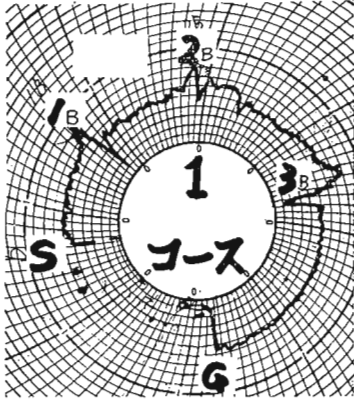
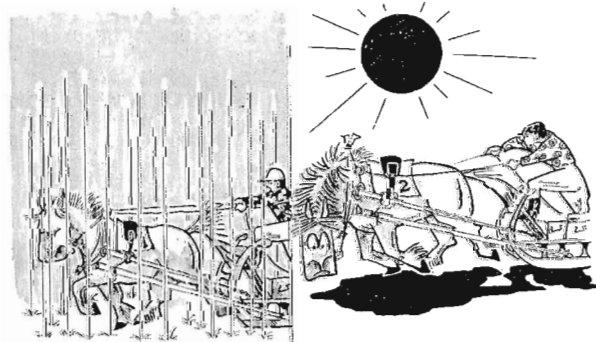
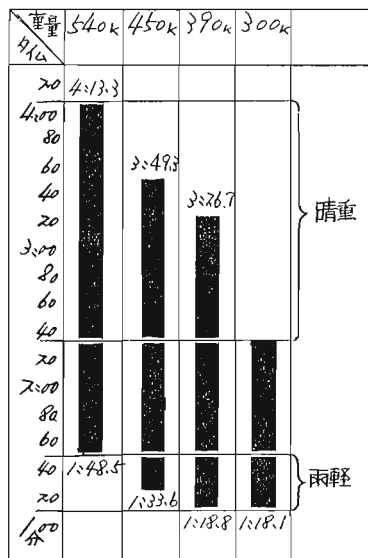


表5 馬場差による負担重量の増減



ほど大きい、逆に馬場が重くなると負担重量が増加していき、それも増加していく比率は軽いほど少なく、重いほど大きく幅がひろくなっていく、と思われるのである。

(表五)をみるとその関係がよくわかる、馬場が重くなると重量の差は大きく影響し、軽くなると重量差はだんだん少なくなっていく。

これはばんえい競走の大きな特徴で、馬場の変化によって競走と能力がどう変わっていくかを研究することはつきせぬ興味だと思ふ。

このため昨年は赤外線水分計を購入して、一年間走路の水分を計ってみたが、従来やっていた肉眼による馬場状況の判定というものが、いかに不正確なものであったかを知った。

ことしからは重、稍重、稍軽、軽の表示をやめて、湿度でやることにした。これは数字で揭示されるが、四捨五入式の

表6 ばんえい

社名	予想したレース	予想の印をつけた数	印的中率	ズバリの中率
A	668	3,485	66.46%	15.42%
B	668	3,460	66.37%	16.47%
C	608	3,031	65.02%	13.49%
計	1,944	9,976	65.95%	15.12%

平 地

	D	E	F	G	H	計
471	2,175	28.45%	12.10%			
466	1,914	64.16%	17.85%			
290	1,322	71.03%	19.31%			
471	2,118	60.93%	16.56%			
290	1,118	58.27%	18.62%			
計	1,988	8,647	56.56%	16.88%		

表7 ばんえい 平 地

最高	最低	平均
71.03%	28.45%	56.56%
66.46%	65.02%	65.95%

予定であるから、仮りに4%と出たときは三・五%から四・四%までの湿度と考えて良い。昨年はなかなば試験的だった水分計も、ことしは大いに活躍させて、湿度を適確につかんでいく、ファンの方も予想屋さんも我々も

「サア、大いに研究してみましよう」

明年の本誌にその結果をまとめてみるのが、今からたのしみである。

7 馬券的に面白い

このように馬場の変化によって大きく変わる競走であるから、平地競走に比較すると、馬券はあたりにくいのが当然かもしれない。

朝晴れていても午後雨が降ることもあるからだ。

四十五年に市営競馬(ばんえい)と道営競馬(平地)の予想成績を比較してみた表(表六)があるのでご覧に入れよう。

◎印的中率とは「レース数に対する」ズバリの中率とは「レース数に対する」本命対抗予想◎◎がズバリの中率のもの%

◎印的中率とは「レース数に対する」ズバリの中率とは「レース数に対する」本命対抗予想◎◎がズバリの中率のもの%

◎印的中率とは「レース数に対する」ズバリの中率とは「レース数に対する」本命対抗予想◎◎がズバリの中率のもの%



最高 七・〇三%
最低 五八・二七%
平均 六三・五九%

これでも最低、平均共にばんえいのほうがよい。これは予想の印が、ばんえいでは多いからかもしれない。ばんえいの予想の印は一レース平均五・一三箇、平地は四、三九箇である。こうしてみると印的中率は大体ばんえいも平地も同じ位と考えてよいようだ。しかし本命対抗ズバリの中率となるそうはいかない。

◎印的中率
最高平均的中率はばんえいの方がよいが、最高では平地がよい。これは一社が極端に悪いせいでもある。そこでその一社を除いて計算してみると、平地四社

◎印的中率
これで比較してみると(表七)のようになる。

表8 昭和47年度 勝馬予想成績 (レース数に対する的中率)

競馬場	社名	A			B			C			D			E		
		レース数	的中数	%	レース数	的中数	%	レース数	的中数	%	レース数	的中数	%	レース数	的中数	%
第1回	帯広	60	49	81.67	60	46	76.67	60	46	76.67	60	44	73.33	49	37	75.51
第1回	北見	60	43	71.67	60	48	80.00	60	41	68.33	60	43	71.67	60	42	70.00
第1回	岩見沢	60	40	66.67	60	45	75.00	60	45	75.00	60	40	66.67	60	41	68.33
第1回	旭川	64	46	71.88	64	39	60.94	64	33	51.56	64	36	56.25	64	40	62.50
計		244	178	72.95	244	178	72.95	244	165	67.62	244	163	66.80	233	160	68.67

ばんえい

平地

最低 一三・四九% 一三・一〇%

平均 一五・一二% 一六・八八%

最高の中率も平均の中率も平地がよい。最低だけばんえいの方がよいがせめてもの救いだ、どちらも一社が極端に悪いので、それを除いて計算してみると

ばんえい二社 平地四社

最高 一六・四七% 一九・三一%

最低 一五・四二% 一六・五六%

平均 一五・九四% 一八・〇八%

その差は更に大きくなってしまった。平地の最高の中率一九%これは一日一〇レースのうち大体二割の中、一回六日間では一二レースがあたるということになる。ばんえいの最高一六%五は、大体一割五分の中だが一回六日間では一〇レースの中することになる。

今はばんえいも五社になったが、その

的中率はだいたい向上し、五年前に成績不振の社も今ではこの店一本槍というお客さんまできたようだ。

ガリガリの本命対抗、本命一本槍、グリグリ二重マルなどということ、よく聞くことだが、ある人達は

「本命対抗ばかりねらうのは面白くない。グリグリ本命対抗は配当が少ない、平地のズバリの中率がいいと言ったところで二割しかあたらないのだから、本命対抗ばかりねらって、もしはづれたら取返しがつかない」とい、又

「ハイセイコーのときみたいに本命対

抗が必らずあたるということは絶対にないし、そんな番組作ったら馬主側にだって問題がある」と、「的中しにくいということは好配当レースが多いということだ。損をしても取返しがつく」

「一体本命対抗というものは誰がつく

のか、予想屋さんみんながそう思い、

研究熱心なファンもそう思ったのが一致

し作られるものであろう。いやしくも馬

券を買う以上、競走成績の検討、馬の状

態、馬場、騎手の技術を検討し、それに

「カン」を働かせて馬を選定しなければ

ほんとうでない。

しかし大方の人は忙しかったためそんな余裕がない。予想屋さんの予想と、馬の調子をみて買ってしまう。

予想表を参考にすることも、◎△は

予想屋さんの予想なのだから、しるしの

つけられた馬の中から選び出すことが必

要。いづれにしても参考なのだから無印

の中に目星の馬がいることもあるのであ

る。大事なことは、馬券は「たのしみ」

であって「もうけ」であってはならない

ことだ。私は知人が大口に買っているとき

くと「大口はおやめになったほうがいい

ですよ」と申上げる。余計なお世話だ

「どれだけ買うか」は個人の財力によっ

て相違する……といわれれば、ナルホド

そうかもしれない、必ずの中すれば倉が建

つ、しかし皆的中すれば元金が返って

くるだけである。百円馬券なら買ったと

たんに、控除を引かれて七五円となる。

損をする人があるから、得する人もある

のである。

8 そのほかの面白さ

☆ 平地競走を見なれた人達は騎手の追いが面白いという。

☆ 何となくレースが素朴でユーモアがある。

☆ 観光として、郷土色として、消えゆくものの郷愁として面白いという人がいる。(郷愁は一寸当らないようだ)

昔からばんえいに馴染んでいるファンの中には、重い重量の競走を希望しておられる方が多いようである。その方達は重量を軽くしている現在の競走方法にはあまり賛成ではないらしい。昨年テレビで一緒だった旭川のT氏も、三分以上かかるレースでなければ面白くないと言っておられたし、古いファンのY老人も「お前さん達はばんえいを、競馬みたいにしてしまうのか」といつていた。

1 軽量化の理由

☆ 競走中のストップ回数を減少して、不正の疑いをなくする、やれなくする、

☆ 先頭馬とドンジリの間隔をせばめて、接戦レースを多くする。

☆ 惨酷視をなくする

☆ 斜行蛇行などのルール違反をなく

☆ 用具の破損をふせぐ

2 ばんえいらしさを失わない

どこまで軽くしたらよいか、今我々は、百秒（一分四〇秒）を目標に考えている。

馬場の変化で大きく変わるレースであるから、どのレースも百秒にするなどとは考えられないが、それを中心的な考えとしておいてみるだけである。

一昨年一分四〇秒前後のタイムを出したレースは年間八四八レースのうち、二九回しかなかった。それを重量と馬場状況別にみると表9のとおりである。

この表に示すように馬場が重ければ三三〇K以下のレースにこのタイムが多

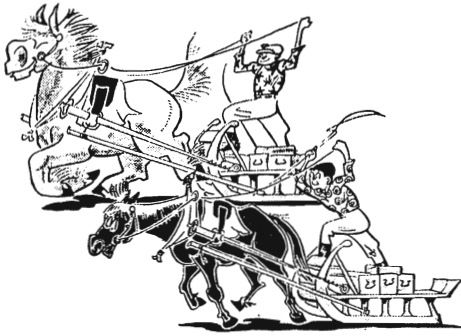


表9

	重	やや重	やや軽	軽	計
330K 以下	9	2	2	4	17
340K 以上	1	1	1	9	12
計	10	3	3	13	29

く、逆に馬場が軽ければ三四〇K以上のレースに多い、当然の結果であるが要するに百秒の焦点に合せることは大変むづかしいことである。

3 軽くしたら面白さはなくなるか

軽くしても、前に(3)と(4)で書いた面白さは十分に見れる。最も大事なことは競走の公正であるから、おかしな人がおかしな事を計画しないように、接戦レースを多くする必要がある。力くらべも、ストップゴーも接戦するから面白いのである。

力くらべに重点をおけば動物虐待のそしりはまぬかれない。ことし四月一日施行になった動物保護法では「必要以上に強度の苦痛を与える」ことが虐待の定義とされている、「面白い」からといって、強豪の決戦ならいざ知らず、あまり重い重量を課することは「必要以上」と

いうことになりかねない。

4 重量を軽くしても重い馬は強い

昨年からの体重制をやめて取得賞金制に切りかえたのであるが、改正第一年目だったので、体重制を加味した方法でやった、つまり前年まで走ったことのある、成績の良い馬は元のクラスにおき、始めて走る馬とD級は体重に制限なく一緒に走らせた。ただしABCの体重のある馬は、上のクラスに希望してもよいことにしたが、それはわずか一頭しかいなかった。これはやはり重いレースをさせたということである。

そこでこれからは重い大きな馬より軽い馬の方がいい、重い馬はもう駄目だ、などという話を持ち上がったらしい。それはおかし。

昨年のCDE級の競走に出た馬を調べてみると表10のようになる。

この表をみるとA（九〇一K以上）、B（八一K以上）、C（七三二K以上）、D（七三〇K以下）の入着率は大体出走頭数に比例している。

一着馬はBが僅かに多く、五着以内ではAが多く、一番軽いCはどちらも少ない。これはC一二〇、DE二四〇の計三六〇レースで調べたものだが、積載重量は主としてC三九〇キロ、DE三〇〇キロの、五才以上では最も軽重量のレースである。

表10 体重別競走成績（48年 CDE 360頭）

体重別	A体重	B "	C "	D "	E "	計
出走頭数	903	1,771	440	6		3,120
頭数 %	28.9	56.8	14.1	0.2		
1着頭数	100	221	39			360
頭数 %	28.7	59.6	11.7			
5着以内頭数	532	1,030	235	3		1,800
頭数 %	29.6	57.2	13.1	0.1		

なおこの表でわかるように、延三、二〇頭の出走馬のうち二、六七四頭（八六%）は、体重八一キロ以上のAB重量馬であることに注目することも必要である。

積載重量三百キロ、それに橋二四二、引木一五、かち棒三〇、胴引二〇、背ぶり、つり革、よびだし、がら、わらび型で二二、騎手七三の計四〇〇キロ余を加えれば、総重量は七〇〇キロに達する。第三障害登坂の際はその重量抗抵は一千キロを突破するのである。

重厚で巨象の如き重ばん馬こそ、これを制する覇者である。

昭和四十八年度

芸術祭優秀賞に輝やく

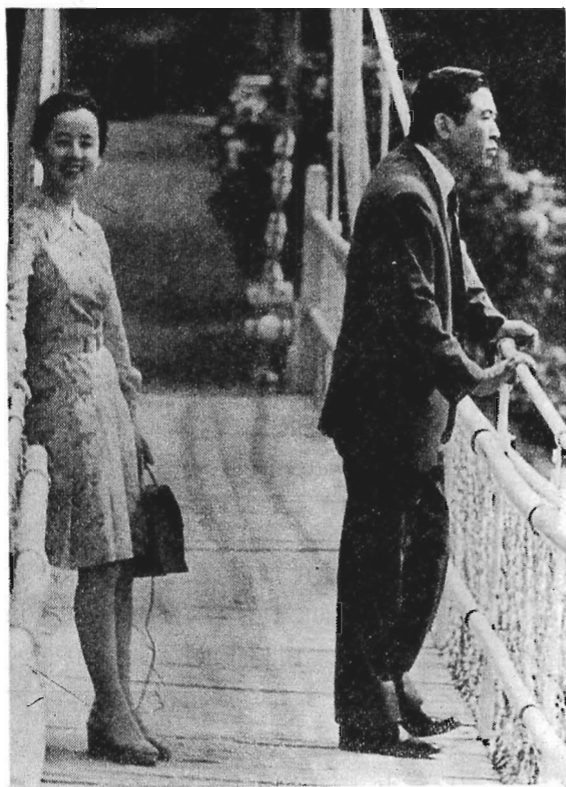
「ばんえい」

HBC北海道放送制作

脚本 倉本 聡 演出 守谷寿男

出演

公介 小林 桂樹 洋一 中村まなぶ
妻しお 八千草 薫 小松 大滝 秀治
同夫人 中村 たつ



「あーまし」

序幕「ばんえい、鞭曳競馬とは、サラブレッドではない作樂馬が、七百公里以上の楯をひいて、砂地の直線二百米を走る、北海道独特の競馬である」

河西公介（50才）は戦中派であり、戦後の二〇年を無器用に生きてきた、うだつのあがらぬ市役所の一吏員である。

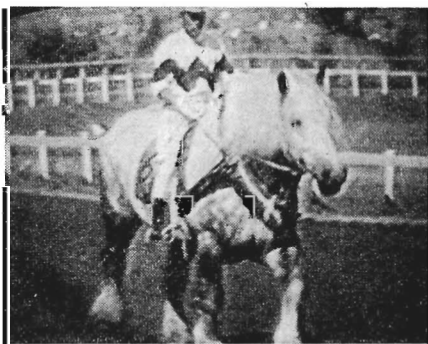
妻しお（42才）は底抜けの明るい性格で「ばんえいファン」でもある。

昨夜

相変わらずむつかしい顔をして酒を飲みテレビを見ている公介に、しおは「岩見沢を終るとばんえいは北見に行ってしまう、前からばんえいに連れて行ってやると約束しながら、まだ一度も連れていってくれない。約束を守って欲しい」とねだる。「馬が見たいのよ、ばんえいの馬、サラブレッドと全然ちがって、材木運びなんかに使ってる馬でしょ、だから無細工で、象みたいだって、1トン近いそりを曳いて、下は砂地ですべらないし走るより歩くって感じだって」公介は答へない。

「途中にいくつかの障害があつて、それをのりこえるのに一度前で止まって、ハアハア息をつくンだって、それがー」しおは、アイロンをかけたつツツと笑う。

「小松さんの奥さんたらひどいのよ、まア見てらっしゃいよ、うちの停主にそっくりだからだつて」



ダイセツに扮したカミカワシンザン号

口へ運びかけたグラスを公介はやめる戦友小松のことをそんなふうにいわれ、グツとカンにさわった。

「普通のケイ馬は八才位が限度なんですよ、……だけど、ばんえいのはととつたのになると十四才のがいるんですって、それがほんとに象みたいで、胴が短かくって、足が太くて……」

「どういう意味だ」キツとなって公介はぐいとグラスをあおる。

「なにが？」

「小松がばん馬に似てるっていうのか」グラスにウイスキーをつぐ、その手は怒りのためかすかに震えて、

「女房が亭主のことをそんな風にかの、あいつは海軍のときからずっと一語だ、あいつは確かに不細工だ、けどな、あいつの普賢が、あの女房に判ってたまるか!!」

「ごめんさい」

小松も俺もまっ正直だが不器用で、埋もれ草のように目立たない存在だ、そのいらだたしさが公介を一層不気嫌にする。

公介の胸に怒りがこみ上げた。

「小松の女房呼んでこい!!」

ギクンと顔あげたしおと洋一（15才）

「小松の女房に電話しろッ」

「そんなつもりでいったンぢやないのよ」

公介はグイとグラスをあおり、電話器の方にとんでいった。

しおは必死にとめようとしてとびついた。

ふり払う公介をとめるしおがもみ合った。

突然洋一が母に替って電話をおさえる、払いのけようとする公介だったが、息子の力は意外に強かった。

洋一は静かに、妙に大人びた口調で

「止めなさいよ、お父さん、大人気ないよ」

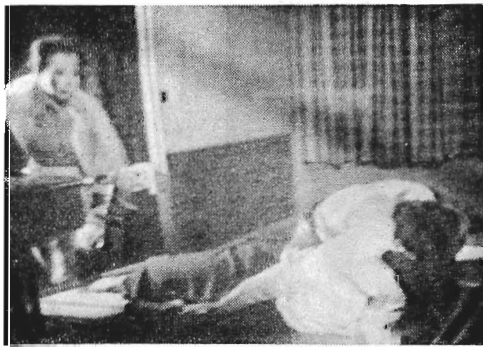
公介は息子の手をどけようとするが、びくとも動かない。

「そんなにカッカッしなくていいぢやない」

「元々母さんはただ、ばんえいにつれて欲しいっていつてるだけなんだから」

「夏休み前から約束してたんでしょ？」

「休暇をとって母さんをつれてくって」
「僕、きいてたよ」



乱斗の末公介はおさえこまれる



洋一は俺とやる気らしい

お父さんはちゃんと約束していたぢやないか、有給休暇をとって、母を連れていけと洋一はせがむ。公介は息子をにらみつけて、

「仕事ってものがお前に判ってるのか」

「大体、父さん、一寸ずるいよ、役所で何か面白くないことがあると、家に帰ってすぐ出るんだ」

「オイ、いつ面白くないことがあったんだ」

グラスのウィスキーをグイとあおって、公介はそのまま部屋を出ていこうとするが、その足がとまり、もう自制がきかなくなる、キラッと洋一をふり返り

「秋の合宿へお前行くな!!」

「そりゃないよッ」洋一は仰天した。

「行く必要なし、金は出せん!!」

「父さん」 出て行こうとする公介の前に洋一が立ちふさがった、公介はいきなり手をあげて洋一をひっぱたく、驚いてとりすがるしおを、振り向きざまパチンと一発喰らわす、父の暴拳に洋一の怒りはこみあげたが、グッと抑えて父親の腕をつかみ、父を凝視した、

「お前、父さんに向う気か、フォーム勝てるつもりなんだな」

突然一本背負いで息子を畳に叩きつける。だが瞬間、切り変えられて、ひっくり返ってしまう。

公介は起き上ると積一杯の賞銀を見せ

て、

「洋一は俺とやる気らしい」 公介は

洋一の隙を見て飛びかかっていった。

しかし乱斗の結果は抑えこまれ、額を畳にゴリゴリすりつけられる始末となる——悪夢のような昨夜の出来事だった。

そして今、公介はしおを車に乗せて岩見沢ばんえい競馬場に向かっている。

ある街をすぎると街道の両側に原野が拡がり、秋草と秋の花々、すすきの穂がきらめいている、その中を車はひた走った、浮き浮きとして楽しそうなしお。

対照的に公介はふさぎこんでいる。きのうの今日、自分はしおの希望どおり岩見沢に行こうとしている。息子に押さえつけられた自分、もがいたが駄目だった自分の体力はもう限界をこえたのだからか。

いつしか二人は廃抗の街に車をとめている。しおは一人はしゃいで昔の恋人の話までするが、公介の心は沈み勝ちだった。

「昨夜のこと洋一、気にしてたわ、あの子悪気ぢやなかったのよ、あの子、涙をためてた、知ってた？」

人気がない廃墟を二人は歩いていて、そこは友人小松のかつての職場であった。朽ち果てた塵埃住宅、死んだ生活。

「お前が俺の気持を引き立たせようとして、ばんえい競走のことをいい出したのは判ってたんだ」

「役所で 何にかあったの」

「大したことぢやない、洋一にいわれたことはよく判っている。役所で何か面白くないことがあると俺は不気嫌を家に

持ち込む。

その事は自分でもよく気がついているのだ、自分がいやな性格だってことは、自分で一番判っている。ただ、ゆうべはお前が小松のことをいうものだから」

「ごめんなさい」

「あいつの苦しきはあの女房に判っていない、蘆山閉鎖、転職又転職、……あいつがうだつが上らなくなつて、それがあいつの責任か、あいつだけじゃない、俺だってそうだ、俺たちの世代はみんな無器用なんだ、それを、女房なら庇うのが本当だろう、他人のお前が他人の亭主を、馬と比較して笑うことがあるか、どうだ」

「ごめんなさい」

「お前に文句を言ってるわけじゃないただ……俺はあいつが判るから、何といわれても、黙々と生きているあいつが判るから……」

突然しおが明るく叫ぶ

「ねえ、一寸見て!! ハイビスカスが!!ここに任んでた人が植えたのよ、きつと!!」

画面は突如としてほんえい競馬場となる。

圧倒的迫力で走る鞍馬

客席、興奮、怒号、罵声、その中に

圧倒されて立っている公介としお

豪快なレースが展開する

予想紙を握りしめ、のび上つてかん声に捲込まれているしお、一人白けて坐っ

ている公介。

レースが終るとお客さんはゾロゾロと下見所の方へ移動する、二人だけが坐っている。その耳に観客の声がきこえる。

「ダイセツは来ねエだろう」

「いや判らねエ、昔は大変な名馬だから」

「昔の話だ、本命は何だつてアバシリ

「そりゃそうだけど」

「人間でいやお前、五十六才つてとこだぜ、定年だよ、四才馬にまじつてかないッこねえよ」

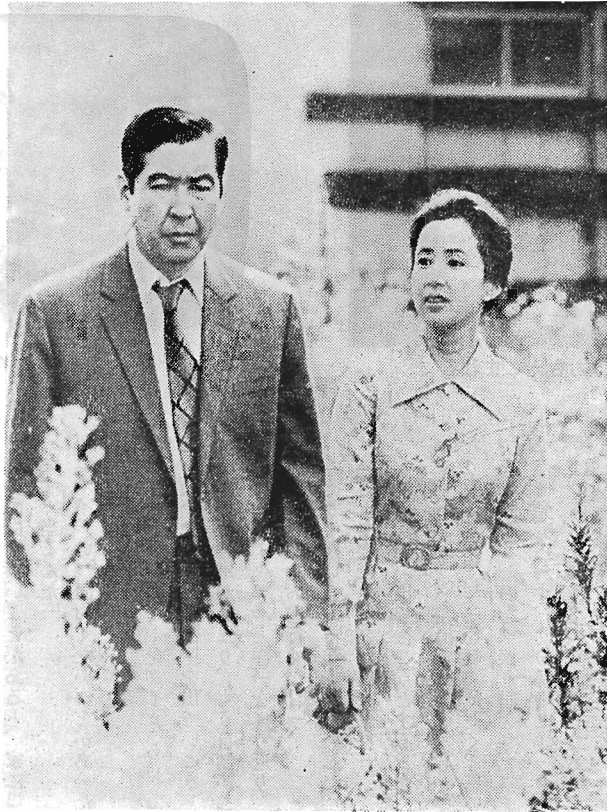
「いや、齢とつたつてダイセツは、ダイセツだよ」

「お前、なにを言うんだ」公介

はいつた。

「アノー、アノネ、窓口がちがって、

ひと気ない廃坑の街を歩いていた



だ、若さがちがうよ若さが」

公介はそれを聞いてムラムラと反発心が湧いてくる。しおにダイセツの馬券を買ってくるよう命令する、再び後のほうから声がきこえてくる。

「やっぱりダイセツは、一寸ないよ、

何しろ一四才つて馬だからな」

変なの買って来ちゃった」

「バカ。」

第一障害をこえる馬たち、一頭が抜きんできてくる、ダイセツだ、公介は興奮する、ダイセツは第三障害前まで一番で来てしまふ、他の馬も次々にきて息を入れる。

しかしこの障害を、他馬はほとんど超えていくがダイセツは超えられない。

ダイセツが大寫しになる、懸命に目をむき足を掻く、巨大なひづめが砂をかむ。

先行馬が次々とゴールインする。音楽が消えて、ダイセツの動きに焦点があてられる、ダイセツだけが障害に残った。

ただ一頭、息も絶えだえに障害をこえて、ゴールに辿りつく。

公介はダイセツを凝視していた、それは限界をこえた体力の、最早やどうしようもない落漠を見せつけられたようなものであった。

アバシリは勝った、しおは踊り上つて、夫の肩を叩き、

「勝っちゃった勝っちゃった……」

だが、しおは公介の目に涙があふれているのを見て眉をひそめる。

帰途、公介はしおに車をあづけて先に帰し、ひとり小松の宅を訪れる。

二人は小松夫人のしつらえた食卓をはさんで、ポツリポツリと話し合う、二人

共あまり喋らない、それがもうお互の境遇を知りつくし、気持を慰めあい、語り

合う最善の方法であったのだ。

「なんで炭住なんかへ行ったんだ」
「イヤ、一寸時間があつたんでね、…
…岩見沢のばんえいに行つたんだ」

「ばんえい競走か……」

「うん」

二人は表へ出て、スナックバーに入る。

小松は

「女房にまだ話をしていないんだが」と前おきして

「新らしく入った会社も営業部長と噂して辞めてしまった」という

「偉いナァ、お前は」と公介。

「ばかいえ……」苦笑する小松、公介は昨夜の事を話す。「俺は完全に負けたんだ。女房は何もいわずに、俺の逆手をとっている息子の指を一本一本はがして、離したんだ」

「そのときチラッと息子の顔が見えた、息子な……涙をためてやがんだ……あいつは親爺に勝っちゃまったことが、やっぱりあいつなりにショックだったのかねえ」

職を失った小松、いくつになってもうだつの上らない公介、そしてもう体力の限界を知る肉体、二人の気は重い。

「そうか、会社やめたのか」

「うん」

「奥さんに知れたら大変だろう」

「気づいてるよ、あいつは、……気づいてるからあいつは、はしゃいでみせてるんだ、あいつは、あいつなりに、あいつのやり方で必死に俺をいたわってるのさ」



ダイセツは負けた

小松はグラスをとり、氣をとり直すようにククッと笑う。

「ばんえい競馬か」つぶやくように小松はいう、

「——」

「儲けたか」公介「いや」

「面白かったか」

「面白いてより何かこう……悲しかったな」

「あれは悲しいんだ……」

「——」

「そうなんだ、あれは」

公介の帰宅は十二時半を廻っていた。

「おかえりなさい……洋一、ついさっきまで待ってたのよ、これ。洋一があなたに渡してって、洋一びっくりしたっていつてたわ」

「何が」

「お父さん強いって」

公介は服を脱ぎつつ、そっと息子の部屋をのぞいてみる、布団からニョキッと突き出た足、それはもう立派な男の足である。

酔いが廻って公介はソファに坐り、グツタリと坐り首をもたげる。

「おい、今日はどうだった」

（明るく）「愉快だったわ、一日中つきあってもらえたんだもの」

「バカ、俺はばんえいのことをきいてるんだ」しおは、驚いたように公介をふり返ったが、

「又行きたいわ、つれてって下さる？」

「――」

「今度は私ダイセツを買うの」

「何故」

「なぜって、あの馬、荒々しくっていいもの」

「負けたじゃないか」

「負けたっていいわ……」

「そういう態度はやめろ、いたわりはよせ、いたわりとか同情はダイセツへの冒瀆だ、そんな気持でダイセツを買わない、買わない方がダイセツは喜ぶぞ」

公介は目を閉じ、やがて眠ってしまう。

ねむりの中にダイセツが現われる――

ダイセツのイメージ――

もがいていたダイセツ、不意にバチンと音を立て、胴引が千切れとぶ、（画はスローモーションとなる）ダイセツの頸環も、背づりも、手網も飛んで丸裸となってしまう、解放されたダイセツは躍り上って走り出す、野原を、緑濃い丘を、樹林の中を、……

（曲は美しい静かな旋律となる）

走るダイセツ、若駒のように、すすきの光り、逆光の中、地を蹴り、草をとび、（スローモーションで走るダイセツ）空と雲、踊るたてがみ、震えおののく筋肉、走るダイセツ、走る、走る、そして野の果てに……

（完）



テレビドラマ

「ばんえい」を見て

ばんえい競馬に関係している者からみると、この名ドラマ「ばんえい」はなにか物淋しい印象を受ける。

特に公介が小松を訪ねて「ばんえい競走を見てナニカ悲しくなった」と述べ、小松は「そうなんだ、あれは悲しいんだ」としみじみとした調子で答えるあたり、ばんえい競馬そのものが悲しく、淋しいものに見える。

作者は勝敗に賭けるばんえい競走馬が、老いて敗残してゆく姿を、この物語りの背景として描いたのであろう。

それは北国の素晴らしい秋景と、巨大な道産重ばん馬（ここで主演馬は体重一屯のリツケイにかわる）を美しくも素朴に描写してあますところがない。

多くの批評にも国内作品としては珍しい異色の描写と賞讃している。

小林、八千草の熱演にあわせて助演者達の好演が、しばしば迫力ある場面を見せる、さすがと思う。

七才のカミカワシンザンが、老馬十四才の「ダイセツ」を演ずる、騎手は西本君だ、十数人の騎手諸君、十数頭の重ばん馬が豪快なレースを展開して、こちらも専門家に負けないほどの名演ぶりだった。

（U）

アメリカ競馬 三週間



内田 靖夫

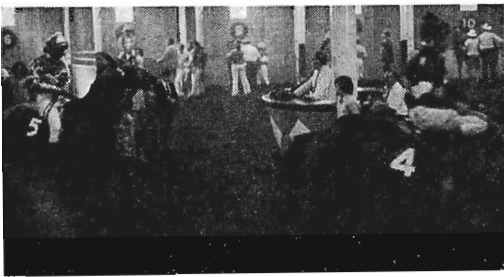
九月二十六日午後四時三〇分羽田発、機内八時間、ちようど真夜中の一二時三〇分頃なのだがサンフランシスコは午前九時五〇分であった。おそらくは六時間前には夜が明けていたであろうから羽田発から、東へ向けて飛んだ機には夜はなかったであろう。窓をしてみえた機内は電灯がなければ真暗であったから、私達にはひる間の感じはなかった。一時すぎ誰かが窓を一寸あけたら強い朝の陽ざしがサッと機内に流れこんだ。始めて空からみる米大陸、サンフランシスコの街、山に樹が少な

く、立ち並ぶ家屋の屋根は平たく斜面がない。カリフォルニア州は極端に雨が少ない地方なのだそうである。これは帰途立ちよったロスアンゼルスでも同様であった。アメリカの第一夜をシスコのベルビニューホテルで過ごす。長い空路で皆よく眠られずホテルに到着するや、午後はグッスリ眠りこけてしまった。

翌日は有名な金門橋、見晴らし台、海岸街、監獄島、山坂の多い街路と、古風な電車、チャイナタウン、ナショナルパーク日本庭園などを見物した。

1 ベイメドウズ

九月二十八日シスコから二〇マイルにあるベイメドウズ競馬場を見学した。スラリと背の高いガンダーソン氏が厩舎から場内くまなく案内してくれる。アメリカ研修第一日目で、私は色々なものを知った。馬場に出て行くとき各馬に一人づつポニーボーイ(ガール)がついていく習慣、競馬場全体が花と緑に埋もれていること、広い投票場のピカピカに磨かれている床、たくさんの掃除機具、馬場内オツツの掲示塔、広大な駐車場、きれいでたくさん室のある事務



ベイメドウズ スタンド内装あん所

室、騎手室の完備、豊富な高級レストラン、など、それはこんどの研修旅行でみた何れの競馬場でもそなえている施設であった。

ここで特別なことはスタンドの中に装あん所があることであつた。

親切な馬主の中年夫人が何にかと親切にしてくれ三人ばかりが代表して、優勝馬と一緒に写真をとったり、全国協会の三浦さんはスタート台の上ってスターターから説明を聞いたりすることができた。

2 センテナリアル

翌二十九日は空路三時間、コロラド州デンバーシティーについて。ここは札幌の次の冬季オリンピック開催市として決定していたのに、財政上の理由で放棄してしまつたところだから名前はよく知っていた。

休催中だと聞いていたセンテナリアル競馬が、今ちようどやってくる最中というので、急ぎトランクをロッカーに預けてデンバー市から九マイルを車をつらねて行く。

その日は小雨が降ったり止んだりしていた。はるか左のほうにゲートがおかれています、いきなりバチャバチャと馬が走ってきた。



センテナリアル スタンド前エアウイン氏と

ゴールへ来るともう馬を停める。アツ、これはコォターホースだと気がついた。全国協会誌「地方競馬」に、かつて堀江氏が紹介したコォターレース、幸運にもそれを見る好機に恵まれた。

スチュワード(委員長と公正委員を兼ねたような委員——開催理事)のエアウイン氏が場内を案内してくれた。時には勝馬予想までしてくれ自分も一緒に買っていた。大井の篠崎さんが的中して思わずエアウイン氏と手を握り合つて祝福するという状景もあった。

おおらかで豪快で明るいアメリカ人気質をよく表していた。それがスタンドのまん前なのだから、愉快である。トメモ日本人では想像できないことだ。あちらでは執務

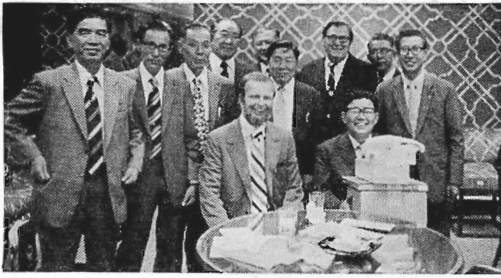
員も騎手も調教師も馬丁もみな馬券を買うことができるのだ。

この主催はロッキーマウンテンKKである。米国南部からカナダへ抜ける雄大なロッキーマウンテンを眺望する競馬場である。

その夜はロッキーマウンテンにあるホリデーインホテルに泊り、ホテル主人公の好意で、次の日の午前中、主人自から運転するマイクロバスでロッキーマウンテン国際公園を観光した。

3 スポーツマンパーク

そしてその日の午後（九月三日）シカゴへ飛んだ。シカゴは夜だった。ミシガン湖のそばのアラトンホテルに泊り、食事のため



スポーツマンパーク 社長をかこんで

街に出たとき湖畔へも行ってみたが暗くてよく見えなかった。日本の競馬人の恩人であるニューヨークジョッキークラブのレイニー事務総長が欧州日本への旅に出かけるというので、同氏と逢えるよう予定を一日早めるためシカゴの二晩は夜着翌々日朝発となった。アメリカに来てからまだ一週間もたないのに、日本食や日本酒が恋しくなった。尾張の人は風流人が多いというが愛知の伊藤さんは、殊更茶と酒を恋うた。皆で日本食堂へ行ったが学生三人が店を借りて、始めたという食堂なのであまり美味いものではなかった。しかし米飯と味噌汁とたくあんは十分に合った。

翌日シカゴから八マイルのスポーツマン競馬場を見学する。六〇才近いと思われる競走役のスコット氏が案内してくれる。真赤な服に真赤なネクタイがよく似合う。気軽に車を運転して厩舎につれて行ったり馬丁食堂のメニューまで説明してくれる。すぐ隣り合っている一丁馬丁競馬場があるので、そこも一寸見せて貰う。帰り際リンカーン大統領によく似た社長に挨拶、一行からのお土産と一緒に、団長の兵庫の森さんは奥様の描かれた色紙を贈呈、社長からは大きな優勝カップとスポーツマンパーク銘入りのシャツ、トランプ、キーなどを頂戴した。その日からの一行は大カプルの箱を日本まで持って歩くことになる。私は最年長をいいことにしてその労をとらなかつたが、主催者の山田さんは一番多く持って歩いたように思う。

一〇月二日早朝ホテル出発、空路三時間でバッファロー空港着、車でナイアガラに行く。爆竹を心に美しい広大な公園がある。すぐカフテリア食堂に入って、でんぐで中食をとったが、窓越しに滝の上部が見える。誰かたき火をしているのか煙が立っている。これは子供のときから聞かされていた、滝つぼから上る水煙なのだが、やっぱり煙のように思った。直下一六五フィートの滝つぼから上る水煙は全く火から上る煙のように見える。アメリカ側とカナダ側から見る、橋の両方に税関やパスボード検閲所がある、想像を絶する雄大さだ。

船に乗って滝つぼのほうへ行ってみる。船長は心得ていて滝つぼ真近かまで突込んでゆく。ごうごうたる落爆の音、物すごい迫力だった。

夕刻五時引上げる。バッファローの搭乗口はもうカナダ領である。婦人検査官がパスボードを見て何にやら喋り紙片をくれた。ただ一人抽出検査に引かれて別室へ呼ばれているいる尋ねられたが、チンパンカンパで鈴木通訳がいなければどうなったか判らない、つくづく言葉が通じない不自由さを感じた。

4 ウッドバイン

カナダ国トロント市は既に夜であった。キングズエドワードシエラトンという貴族的な名前のホテル、三百人位のクラシクな食堂で夜八時の夕食、ピアノ奏者が「さくらさくら」「からたちの花」など五、六曲の日本の歌を弾いてくれ、あげくに我々の席へ来て握手を求めた。翌一〇月三日ウッド

バイン競馬場へ行く。正門前のあちこちに設けられた大花壇に咲き乱れるカンナの朱色が目にしみるようだった。花と緑と樹木に被われた競馬場だ。案内人は前オリンピック馬術選手のギヤニオン氏

精神な顔を輝かせて「この国のホースマンは最高の職務として待遇されている。我々はこの仕事を最も誇りとしている」と自分を紹介した。一寸羨しい気がした。

この競馬場は先年エリザベス英国女王が来場したことがあり、カナダ有数の競馬場であるという。その日の午後七時四五分発でトロントを出発、再びバッファローで乗り換え、出発待つ休憩時間に長野県から来たという娘さんが久しぶりに日本人に逢えたといつて涙を流して喜んでくれた。一人旅で心細かろうと重いトランクをころがしていくのを皆で手伝ってやりたりした。ニューヨーク着のときは一番最後の親切を埼玉の青木さんが受けもつたが、兄さんが迎えに来てくれたといつて飛んでいってしまい、お礼もいわなかつたとか、若い旅行者を見た感じ。

空から見るニューヨークは宝石を散りばめたように、電灯がきら



ウッドバイン はるかなる駐車場

めき美しかった。

午後八時すぎマンハッタン街のコンモードールホテルに投宿、日程を一日早めたのでここには千葉の木村さんと六泊することになる。

5 ニューヨーク

ジョッキークラブ

翌日宿舎から一五分位のビルにあるNJCのレイニー事務総長を訪問する。戦後日本の競馬人が皆お世話になっている有名な人だ。

懇談中レイニー氏から「アメリカの競馬の一つの目的は馬産ということである。現に全米の馬は八百万頭にふえつつある」という言葉があった。

私は鈴木通訳が間違ったのではないかと思った。アメリカは日本の約二六倍の広さ、今日本では六万五千頭位しか馬はいないのだから二六倍にすれば一七〇万頭位でいいことになる。逆にアメリカが八百万頭とすれば、二六分の一では三〇万頭位の馬が日本にいないければならないことになる。

三〇万頭とは今まで北海道に一番馬がいた時代の数である。現在では日本全体で七万頭以下となっている。私は質問したがレイニー氏の答は間違っていないかった。ただアメリカはだだびろい大國であるため、正確な数字はつかめない

いそうである。サラブレッドは二五万ないし三〇万頭である。

6 TRA、TRPB

午後TRA（サラブレッド競馬協会）TRPB（サラブレッド保護協会）を訪ねる。

この機構の詳しい説明を受けたが、上層に入墨する機械は、将来採用を考えて皆興味深く詳細に見た。TRPBには広い部屋がいくつもあって、タイプがのっている机で多数の婦人が仕事をしている。現場で働らく者以外本部の仕事は事務の連絡整理が大半を占めるからだそうである。

7 ベルモント

全米随一といわれるベルモント競馬場は十月五日に行った。ニューヨークから二〇マイル、ここは前記のレイニー氏がスチュワードをやっていたところで、かねて後輩のハイランド氏に十分な連絡がしてあったので、私達一行の一人一人の氏名をタイプした大封筒が用意されていた。中には豊富な資料が入っており、更に大テーブルにたくさん印刷物を並べ自由に持って行けといわれた。

案内人は底抜けに明朗なニューマン氏、これ又スミからスミまで、



ベルモントパーク

と思っていたら現在でも同じであった。

ジョッキー出身者がスチュワードになるには二年ばかりの研修があらるしいが、いろいろ聞いてみると、その豊富な社会知識、専門技術、高潔な人格は敬服するものがあるといわれる。

下見所では、シューマン氏がレイジョッキーを紹介してくれ、皆で写真をとった。また厩舎では世界的に有名な三冠馬セクレタリアートを、シューマン氏に頼んで見せて貰うことになり、フラッシュ厳禁調教師付添の約束で、馬房に休む名馬を親しく見せて貰った。常時この馬を警備しているガードマンが三名もいた。

8 アクイダクト

アクイダクトはニューヨークから一二マイルにある。サラトガ、ベルモントと共にニューヨーク州の三大サラブレッド競馬場である。こんど訪ねた競馬場であった一つ、ここは休催中であつた。広大な駐車場のほるか彼方で休催日を利用して、メリーゴランドが開設されていた。

六〇才近いと見られるピンカーン(ガードマン)がガランとした場内を案内してくれた。この装

あん所はスタンドの真ん前にあって、きれいに刈り込まれた生垣に囲まれていた。下見所、後検査所をかねそなえた羨あん所である。

9 マンノオーステークス

その日は一〇月八日、ベルモントで十万ドルのマンノオーステークスが行なわれ、名馬セクレタリアートが出るというので、この絶好の機会は逃せぬとばかり、時間をつめて再びベルモントを訪ねた。そして又特別の好意で、我々のためにマス席一つを提供していただき、豪華レースを見ることができた。

観客の入りは断然多く、下見所も投票所も客で一杯、セクレの人氣は大変なものだった。旭川の久保さんは馬券発売所があまり混



セクレタリーアート 優勝

雑するので、すっかり慌てて、

「ワンワンをワン」(一一番を一枚)といってしまったと大笑い、ことばの笑話はたくさんあるがこれが一番傑作のようである。

マンノオーステークスは第七レース、距離二千四百米、左方はるかのゲートからスタート、スタン・ド前早くもセクレ先頭に出てやや押さえ気味で行く、向正面あたり全馬スローペースで一団となりセクレ先頭、テンタムが追い込んで第三コーナーでセクレと並ぶ、第四コーナーでセクレのターコット騎手、一寸手を動かすと一気に離してしまった。テンタム懸命に追うも逆に離される。セクレゆうゆうゴールイン、タイムはレコードの一分二〇秒四。

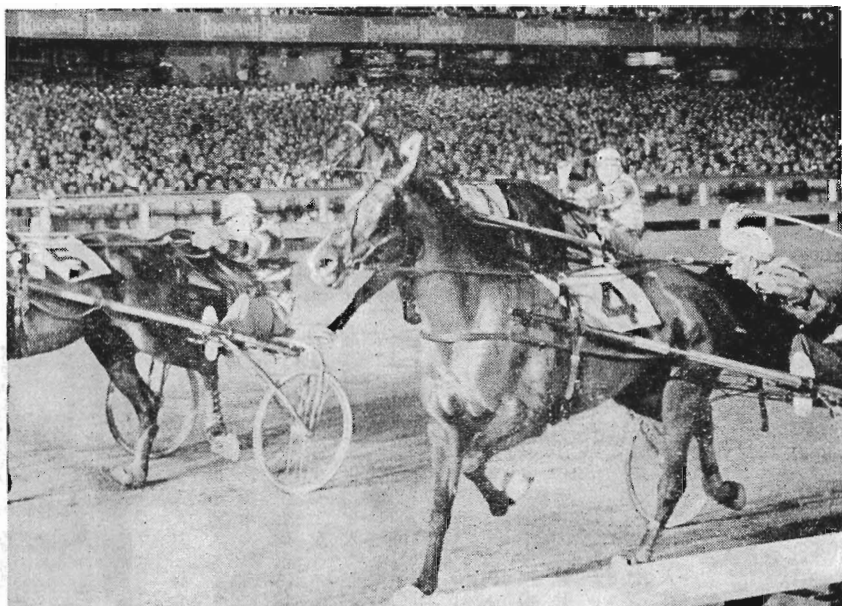
万雷の拍手、脱鞍するセクレに群がるファン、正にスーパーホースである。

二着テンタムが帰ってくる、健闘をたたえて又拍手がおこった。

10 ルーズベルトパーク

ニューヨークから二五マイルにルーズベルト競馬場がある。ここはハーネス(けい駕速歩競走)専門競馬場で、ナイターである。

先ず私達は何千席もある豪華な食堂が完備しているのに驚いてし



まった。誠にレストラン競馬場の観がある。トテツもなく大きな硝子ごしに馬場が見える。次第に夕やみが迫ってきた。数頭のトロツターが繋駕も軽やかに、トレーニ

ングをやっている。やがて夜がきて幾百のライトが煌々と馬場を照らし出し、八百米

の円型馬場はスッポリと暗黒に包まれる。星を散りばめた夜空はまるで天井のようだ。

向正面からモビールスターテングゲートが、馬群の前に立って走り出す。次第にスピードを上げてスタンド正面へくるとスーッと離れていく。始めて見るハロン十四

ルーズベルト

、十五秒台のトロツターけい駕速歩レースだ。全七レースのうちPAC Eが六レース、TRO Tは第一レースのみ、距離は全部千六百米である。

かつて十勝がトロツター生産を目指し、戦前の速歩王国を再現しよう、懸命の努力をしていた時代、しきりに先進アメリカのハーネスレースを見ているよう勧奨

あった。今やそれが実現して目のあたりに華麗なトロツターの疾駆を見る。我國の速歩競走は既にこれを見ているのだなと思ひ私は感慨無量なものがあつた。

11 ニューヨーク

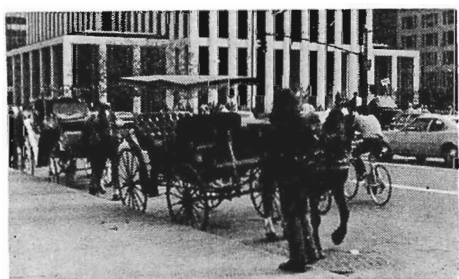
六日間の滞在中一日半ばかり市内見物をやつた。国連本部、自由の女神、チャイナタウン、ウォール街、エムバイヤステートビル、セントラルパークなど、それにホテルが市の中心街にあつたから、自由行動であちこち歩いてみた。

驚いたことにエムバイヤビルでも、自由の女神の建っている島への船でも何百人という見物人が行列を作っていることであつた。米国人の中にはまだまだこれらの名所を見たことのない人が多勢いるのである。子供は少なく老人が多

かつた。更に驚くことはエムバイヤビルでエレベーターの順序を待つ長蛇の列が進むとき、ある壁面の書架に、無料提供で説明案内書がおかれているところを通る。その案内書は英語と日本語の二種類だけである。おそらく日本人の観光客が圧倒的に多いからであらう。

ホテルの近くにはロックフェラーセンターやケネディ大統領の葬儀が行なわれたという、高い尖塔のある教会、高層ビルが立ち並ぶアメリカ通りなどがあつた。

セントラルパークも宿から一キロ位で、その入口付近には、ひる間数十台の乗用馬車が並んで客を待っている。公園内を案内する馬車である。



ニューヨーク セントラルパークにて

12 アトランテックシティー

飛行機で飛び廻るアメリカ旅行であったが、ただ一度ニューヨークからアトランテックまでは乗合バスであった。森と芝生が道路の両側にどこまでもつづいている。

アトランテックシティーはアメリカ東海岸にある有名な海水浴場で、我々の宿舎は海岸に近い、ラマダインホテルであった。この街から一四マイルに同じ名の競馬場がある。日本人の見学は始めてとあって大歓迎を受ける。

馬場内のオツツ掲示塔に「ウェルカム ザ ジャパン ローカーレーシング アソシエーション」と歓迎の電光文字が出て、我々は大いに感激した。



クラブの理事長が逝去したとかで、馬場内の国旗掲揚塔に半旗がかかかばられていた。広い駐車場を七、八台連結のツートンカラーの小型トロリーバスが走っている。車から下りた客を正門まで運ぶ車である。正門から玄關までの間に、馬像をあしらった大きな二つの花壇が美しかった。

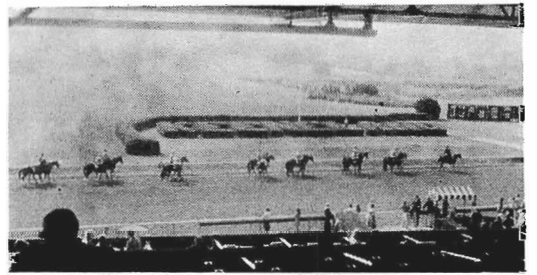
13 ワシントン

アトランテックからレキシントンへ行く途中、ワシントン市のピクディスホテルに一泊して、アメリカ政治の中枢を見学する、

国会議事堂、ホワイトハウス、ワシントン記念塔と記念堂、リンカーン記念堂、歴史博物館、アーリントン墓地、航空館など、特に感慨深かったのは歴史博物館に陳列されていたおびただしい馬車、馬力利用機具、いくつかの硝子張りケースの中にピッシリと飾られた馬と馬車と農機具の模型、それはいかにアメリカ人が馬力によってこの大陸を開拓してきたか、いかにアメリカ人が歴史を尊ぶ国民であるかを物語るものであった。

14 キーンランド

ケンタッキーの名はマイオールドケツタッキーホームや草競馬の名曲で、子供の頃から知らされて



キーンランド

いる。そのケンタッキー州のレキシントンではフェニックスホテルに投宿した。

ここもレイニー氏の連絡で、ジョッキークラブ州支所の女性を含む三人が、広大な牧場、マンノオリーの銅像、キーンランド競馬場を案内してくれた。車も自分で運転し、宿への送迎までしてくれた。

キーンランドはさすが生産地の競馬場らしく、その牧地には立派な馬市場ドームがある、広い駐車場は広葉樹の列で仕切線を作っていた。スタンド正面の馬場内に、植樹をきれいに刈りこみ、作ったKEENEELANDの大文字が印象的。

生産地の競馬場らしく経営会社の株主はほとんど生産者と馬主で、利益は一つも見ず賞金に廻しているということだった。

15 砂漠地帯をゆく

レキシントンからロスアンゼルスまでの空の旅は、コロラド、ニューメキシコ、アリゾナ、ネバダ各州にまたがる大砂漠山岳地帯の空を行く、これはサンフランシスコからデンバーに飛んだ二時間半でも同じであった。

鈴木通訳が折角全員に窓際の席をとってくれたが、機はグラウンド

キャニオン峡谷の左側を飛んだので、私達左窓の者は立ち上って、この名勝を眺めなければならなかった。

二時間半といえば大体札幌から福岡までの飛行時間である。とすれば日本と同じ位の広さがあるのだろう。

レキシントンからロスアンゼルスまでの、空の旅では、途中ノックスビルに着陸、客が入替り、アトランタで下りて機を乗り換え、その間三時間半も休憩し、再び飛び立って今度はダラスに着陸、客が入替り、ようやく砂漠の街ラスベガスには午後五時すぎ



砂漠地帯をゆく

到着、空港から不毛の砂漠を三十分も走って、ホテルホリデイインサウスに入った。

ラスベガスは有名な観光地、賭博と酒と女の街なのだそうだが、私達はその夜一時間ばかり歓楽街を見物して早々に引き上げた。僅か五セントで十ドルもあてた人もいたが、大方の人は損であった。素晴らしく豪壮な賭博場やホテルが建ち並び、ネオンが輝やく砂漠の中の一本都市。

16 サンタアニタ

十月十四日ロスアンゼルスに飛ぶ、宿舎はビルトモアホテル、カウスターとレストランに日本人がいる。雑役にも日本婦人がいて、なにか日本に近づいたようでホッとした気分になった。

翌十五日最後の研修場所サンタアニタ競馬場へいく。ロスアンゼルスから十四マイル、熱帯樹の茂る美しい競馬場だ。

りゅうりょうたるラッパの音に、馬場へ行ってみると、はるか左方から二頭と四頭のハクニー種にひかれた二台の乗用馬車がやってくる。車上には四人の役員が正装で乗り、ラッパ手が観客席へ向けてファンファーレを吹奏している。ハクニーの高い歩様、見事な

演出に見惚れる。

カリフォルニアの空は青く澄みわたり、絶好の競馬日和だ。レースが始まると、ゴールラインにあ



サンタアニタ 前庭

る監視台がスルスルと上昇する。第六レースは千七百米、スタン

ド前からのスタートである。スターティングゲートが静かに近づいて

くる。見れば尾花栗毛のベルシエロンが四頭、十二頭枠のゲートをひいてやってくる。それは千五百

もあるかと思われる見事な重ばん馬だ。御者一人の鮮やかな手綱さばきでスタートラインにピタリとつける。

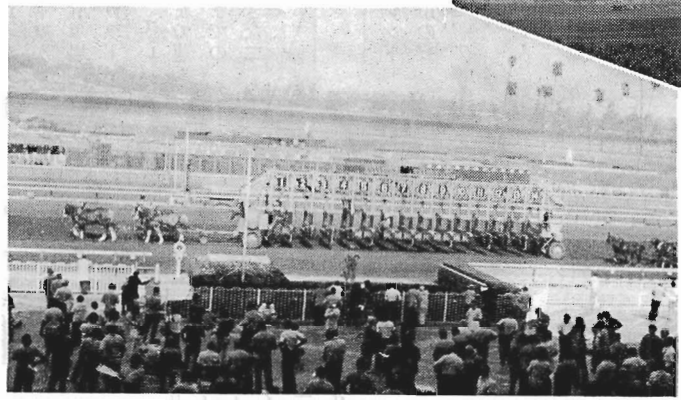
馬がスタートすると、この重ばん馬は猛然ギャロップでゲートを引っぱり走り去る。心憎いばかりの演出だ。

一番長いコースは二千八百米で全米一といわれる、馬場内に遊園地、二ヶの噴水、美しい花壇、ベンチがある。

最後の研修を終り社長室へ挨拶に行った。隣りの応接室サイドボードに八頭の馬像がおかれていたが、その上部二段は重厚なベルシエロン種であった。ばんえい競走にたづさわる者として何にかはほ

笑ましい気がした。

ゲートをひく重ばん馬



インワイキキに宿泊する。

海岸に建ち並ぶ高層ビルと熱帯樹の街、ハワイは正に常夏の国であった。波打際にビーチパラソルが並び、浴客は海に砂浜にたむろしていた。大波を乗り切るサーフィンに興ずる若い男女、そして日本人の観光客の多いのに驚かされた。

私達はホテルの学生風日本人がイダが運転するマイクロボスで、ダイヤモンドヘッド、市街、海岸、美しい住宅街などを見て廻った。真珠湾の戦跡には、海中に横たわる戦艦アリゾナをそのままにして、墓石ならぬ白亜の建物が海上に浮ぶように建ち、星条旗がはためいていた。三十年前の痛ましい記憶が蘇えり、感慨も一しほだった。

一行無事元気で一〇月一八日夜羽田に帰ってきた。

終りに市のご配慮と地全協中村理事、全公営のお取はかり、前から私に外国競馬を見せてやりたいと骨折っていたいただいた方々に厚く感謝申上げて筆をおく。

(市協事務局長)

17 ハワイ

帰途ハワイによった。ロスアンゼルスからは日本航空、久々で和服姿のステューワーズがサービスしてくれる。昼食にモリそばがついていた。ロス発一〇時三〇分、ホノルル着正午一二時四〇分だが時差で正味六時間半位かかる。ホノルルでは二五階のホテルホリデ

マスコミに取上げられた

ばんえい競走

全国に湧き上る注目と期待

こんなにばんえい競走がマスコミに取上げられた年はない。ここに紹介するのは筆者が見たりきいたりしたもののだけであるが、それだけでも今迄の何倍にもなる。

いずれにしても北国でひっそりとやっていた「ばんえい」競馬が全国に知れわたったことは、「大井のアトラクション」を主催した東京都特別区競馬組合と、マスコミが興味を持ってくれた事によるものと思う。

1 HBCテレビ

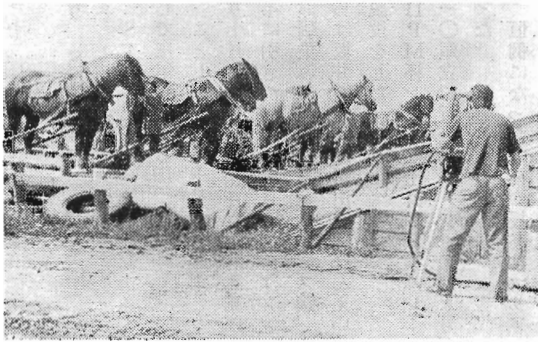
「ばんえいダイジェスト」

五月十一日から十一月十六日まで、二八回にわたり毎金曜日二三時から一〇分間、レギュラー番組として放送。本会はHBCからの依頼でレースの紹介を行ない、一ロメモではばんえい競走の正しい理解のため資料を提供した。

この新しい企画は意外な反響をよび、視聴率調査第三者機関ビデオリサーチによれば、同時刻STVの人気番組「二PM」三・七%とはほぼ同じの三・一%を

示したとある。

この放送のしめくりは十一月十日土曜日同時刻に「ばんえいハイライト」として放送されたが、これはまた八・三%の高率、同じときにSTVで「ゴルフ」が放送されていたが、人気絶頂といわれるスポーツ番組でありながら三・〇%に止まった。



風景撮影TV

十二月二日道新の記事「秋の視聴率調査」によれば、この調査は十一月五日から一週間、札幌市内の三五〇世帯を対象に行なわれ、回収数は二七一(七七%四)で算出されたものである。HBC「ばんえいハイライト」が時間帯の割に好率、競馬ブームの強さを示した、とある。

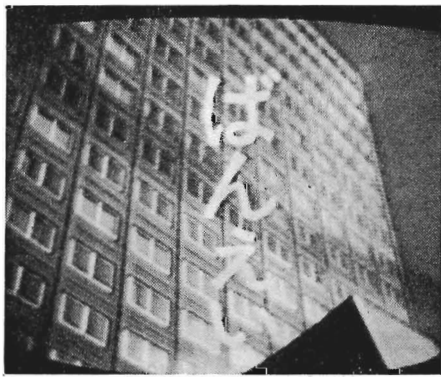
2 HBCテレビドラマ

「ばんえい」

小林桂樹、八千草おる主演、脚本倉本聡のテレビドラマ「ばんえい」は七月下旬から撮影開始、HBC撮影隊は七月三十日、八月二日、同十七日九月五日岩見沢競馬場に大挙来場した。

このロケーション風景は九月八日PM二時から「テレビドラマ裏表」としてHBCから放送された。

この物語は一人の戦中派の老いていく自覚と、人生のさまざまな感激を、中年



夫婦二日間の行動の中で描くドラマであるが、ばんえい競走はその背景として描かれている。なんの説明もされない背景であるが、その描写は素晴らしく「表題」が「ばんえい」そのものズバリ、多くの人は「なんのことか」と思ったに違いない。九月三十日放送、十二月再放送一月再々放送となった。

3 UHBテレビ

「或る日本人」

八月五日放送されたUHB「或る日本人シリーズ」に、ばんえい騎手二人の生活が紹介された。一人はばんえい創設以来の先輩中西潤松騎手の厩舎、かたや青年騎手新婚ホヤホヤの木村卓司君だ。

朝もやけぶる早朝のはげしい調教、厩舎掃除、馬糞出し、馬の手入れ、蹄洗、洗濯、炊事、そして競走競走の毎日である。

多忙の一日が終って夕べの食卓につく、一方は若い衆五〜六人との賑やかな中西師の晩さん、一方は新婚家庭らしく二人きりの食卓、中西夫人は大厩舎の帳場をあずかる賢夫人として知られている。木村若夫人は元看護婦さんだったというが、新婚五ヶ月で早くも馬の手入れも板につき、甲斐甲斐しい馬糞運びに皆感心する。

両家の生活は、たくましく楽しい。「ばんえい競馬の厩舎」として描かれる。特に前方から撮影した競走と調教場面で蔭進してくる重ばん馬は物凄い迫力

だ。力作ドキュメンタリーとして好評。

4 HBCラジオ

「ベルシュロンの言い分」

六月三十日ラジオ放送、これはあとでテレビポルターージュとして放送されたものである。サラブレットといえば知らぬ者はないが、同じ馬でもベルシュロンの名を知っている人は少ない。パリの北ベルシュ地方原産のこの馬は、重さ一トンの巨体を誇る。かつて本道では、未開拓地の開拓、食糧生産に大役を果たした。最近わずかにはんえい競走ブームに乗って息を吹き返している。地味に人間に尽くしてきたこの農耕馬の姿を浮き彫りにする。

これは民放ラジオ優秀賞に選ばれて十



月十三日再放送された。

5 STV TV「11PM」

STVのイレブンPM杯レースもことして三年目になる。

ことは北見で十月六日録画とりがあり十月九日全国放送された。北見は一昨年引きつづき二度目、司会はファンにお馴染みの藤本氏とマリアンヌ嬢、市からは坂井主任技師が出演、ばんえいの解説役をした。

11PM杯レースは十月六日第六レースに一〇頭立で行なわれメジロアサヒ号が勝った。

恒例になった賞杯の授与はマリアンヌさんの手から大野英騎手に授与され、同僚から祝福のキスを受けた。これも恒例になってきたような感じ。

6 HBT TV

「VIVA・ばん馬」

十一月十日土曜日PM一時から五〇分間、HTB「WEほっかいどうシリーズ」の一つとして放送された。道新テレビ欄記事をそのまま紹介すると

「北海道名物の一つ、ばんえい競馬。

最近はこのばんえい競馬の豪快で男性的、抜群の面白さに女性の間に本格的なファンがどんどん増えている、今週の「WEほっかいどう」は、岩見沢競馬場から第四回岩見沢ばんえい競馬の第五、六レースのようを生中継で、若手落語家、三遊亭笑遊の司会で放送、またばん



笑遊師の司会で 11月10日

えい競馬の発祥、変遷、ジョッキの巡業生活と意見、資格試験もあるという予想屋の話など、ばんえい競馬のすべてを紹介する」とある。

この番組には市の中川係長、本会の事務局長、ファン代表として旭川の消防団長高橋氏などが出演した。

7 UHB TV

「競馬ダイジェスト」

六月九日UHB午後二時から三〇分間全国に放送、この日はばんえい競走を取上げた。レギュラーである俳優川口浩さんは五月下旬の旭川ばんえいに来場、一日中つぶさにばんえい競走を視察し馬券も買った。さすが中央競馬会の馬主であり、放送レギュラーだけに着目するところも専門的、ばんえい競走がだいぶ面白

かったらしく、その魅力は重ばん馬の豪快さと、何となく競走にユーモアがあることだという。

8 HBC TV

「われら道産子」

ばんえい競走馬（産業用馬）を主体にしたテレビ放送の庄巻はHBCが九月二十三日AM九時から放送した三〇分番組「われら道産子」だ。

機械化に押されて仕事のなくなった馬は、厩舎から首を出したり、放牧場でポカンとひなたぼっこをしている。山の造材も、農耕も、運搬もすべて機械化されていく、音更町の田浦さんや、田村さんは大の馬好きだが、トラクターが若い者の気に合う、カッコイイし簡単だという。馬は休ませているのに物を喰わさなければならぬ。年中世話がやける、「機械は動かさないとときは油はいりませんからね」一〇〇ヘクタールの農地を経営している田村さんはトラクターの上からそういう。

外国では馬を見なおしてきたというが、日本ではどうなのか、油が続くならば機械がよい。今は馬を肉に売ってしまうか、残していくかのわかれ道だと杉山さんはいう。

東土幌で六十年の伝統を誇るばん馬競走が開かれる。田浦さんは十年連続優勝の愛馬ハナコヒメをつれて出場する。お婆さんを始め一家あげて応援に出かける。重箱におべん当をつけて、ハンドバ



足寄町ばんえい大会 9月15日27レース

石狩管内石狩町親船町の国道わきの、あき地で毎年町のばんえい大会が開かれる。

集まる力自漫の馬は近郊からおよそ三十頭、遠くは青森県からもやってくる。コースは一周百五十米、コンクリート製の重石を馬そりに積み、途中二ヶ所の盛り土を乗り越えて力の限り走る。騎手の猛烈なかけ声と応援団の叫び声、そして馬そりのきしむ音、ひずめのひびき、乗り手も馬も、汗とほりだらけになって、迫力がいっぱい、町内の有志が主催して今年で三回目、馬券も売らず、祭りに集まる人や近所の人たちが応援合戦をくりひろげる、素朴なばん馬競走が生中継で送られた。

10 NHK TV

「馬力大会」

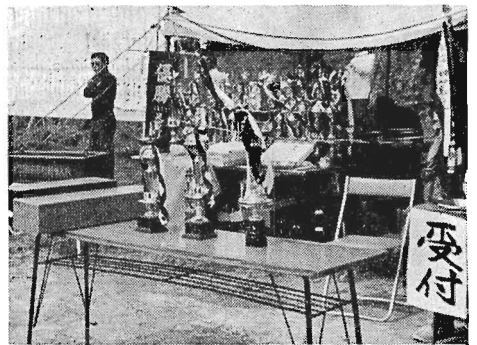
六月三日朝NHKから全国向け放送された秋田県二ツ井町で行なわれた「馬力大会」。

秋田県にはもと五万頭からいた農耕馬が、今はもう五百頭以下になってしまった。

二ツ井町は昔からばん馬競走の盛んなところで、馬が減った今でも、田んぼ仕事が終わる六月上旬頃毎年続けて開かれている。

出場馬は青森、岩手からもやってきて七〜八〇頭が集まる。

そりはベタ襦で土のうが積みこまれる、かざ棒がなく胴引はそりの先きの方



カップ、優勝旗の数々 (足寄町)

に直接連結してある。一人は馬の口を引き、一人は後方から追う。

公園近くの広場に特設されたばん馬大会場、秋田犬を運れた客など見物人は黒山のように、観光客も含めて大変な賑わいである。

11 HBC TV

「モーニングジャンボ」

八月十五日岩見沢競馬場から全国向け生中継で放送、大井への首途を前に、朝調教にはげむばんえい風景、AM七時から十五分間。

アナウンサーの鳥森さんが、そりに乗ってるところから放送が始まる。鳥森アナと本会事務局長との対話でばんえい競走を解説していく。ばんえいの起源、競走の方法、馬の種類、冬の仕事など、最後に大井でこのレースがあることを紹介する。

介する。

12 NHKテレビニュースが

とりあげた「ばんえい」

一、八月十六日夜七時、同月十四日大井へ出場の派遣員が岩見沢競馬場をあとに、勇躍出発する状況を放送。

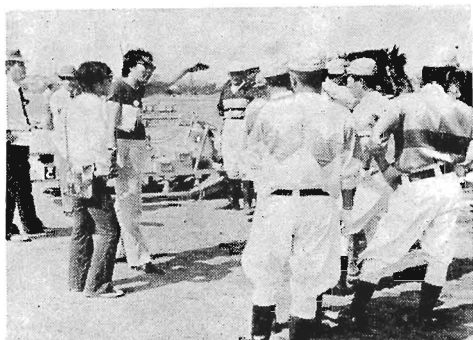
二、十一月三十一日夜七時、一年のばんえい競走を終って家郷に帰る馬と厩舎の人たち(調教師、騎手、馬丁とその家族)村では冬の仕事が続いている。

三、本年一月二十日朝七時、岩見沢町で客土運搬に励むばんえい競走馬など五十頭の活躍を紹介した。

13 NHKスタジオ〇二が

取上げた「産業用馬」

一、六月二十日朝、福島県三和町水石村の馬飼育牧場を紹介、この村は酪農と



「ばんえい」打合せ

9 HBC TV
「アオよーけっぱれ」
これも又HBCが送る素朴な村落のばん馬大会のルポルタージュ、九月十六日PM二時から三〇分番組で全国に放送された。

ックを持って、襦はベタゾリだ。四十頭の農耕馬が集っている、有名な十勝ばん馬だ。緑の原っぱに、緑の樹林、それを縫ってばん馬競走が賑やかに行なわれる。

ハナコヒメはもう十三才、最後の障害がなかなか登れない。田浦さんは真剣だ、汗が滝のように流れる。

「ナニやっているのツ!!」たまりかねたお婆さんが走路に飛びこんでいく、すべてを忘れて……………

稲作農業の混合経営であるが、酪農危機の対策として食肉生産をやることになる。僅か三十戸の集落ながら、以前から馬の生産が盛んで、かつては農耕馬の産地でもあった。馬肉は肉質の良さとカロリ源としては最高、特に高血圧者に向くというところから、十勝重種三十八頭を導入する。明年は十頭の仔馬も生れるという。放牧公園、観光牧野の計画も進めている。

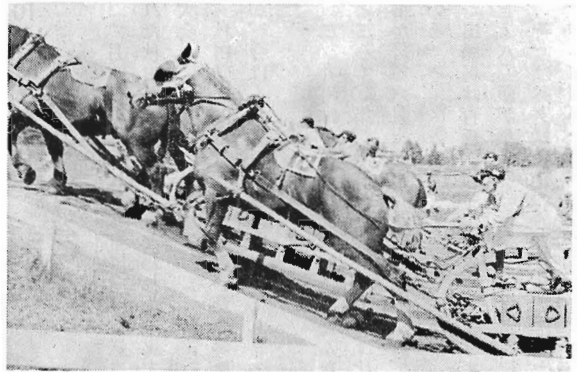
二、四月十六日鹿兒島の草競馬、ここにも馬がいた。その日は五十四頭の農耕馬、浜立馬が集った。砂浜に急造した走路を走るのだが、砂が深くてスピードが出ない、五つの坊やや中学生の乗馬レースもある。

弱者は優勝旗を肩にして馬場を一周する。五千人もの観客が喝采する、正に得意絶頂の瞬間だ。

三、九月二十三日、北海道の土産マ、宮崎の三崎馬、共に天然記念物となってしまう木曾馬などを紹介する。木曾馬といえば木曾福島町が思い出されるが、これは貝田村である。昔馬方だったという岡田村の柘植老人は、素朴な馬具、鈴、はては馬の速度を調節したという拍子とり器具などを見せて、馬追い節を歌う、たのしかった一〇分間。

14 そのほか

馬がどんどん減っていく時代に、その元氣な姿がマスコミの中に出てくること



は馬党の我々にとって嬉しいことである。NHKテレビ海外リポート午前十時から三〇分では、しばしば海外の農ばん馬を紹介している。

◎ 四八、一、二〇 ポーランドの馬の働らきを紹介する。運搬業に励む馬とその馬具と、車を興味深く説明する。

◎ 四八、二、一七 フラブ種生産園として著明なハンガリーの放牧馬の話、それはサラブレッドより小さく強い馬である。お祭りには袖のひろい古典服を着た美女が、疾走する馬にまたがり登場する。

◎ 四八、三、一〇 題して「馬の世界」、これはニューヨークの馬を描く、馬は人類の発展と共に生き抜いてきた。

洞屈の中にも馬があり、どんな環境の中でも人間と共に、たくましい力と勇気をもって歩んできた。あるときは戦場を駆けめぐり、あるときは開拓に従事した。そして今、ニューヨーク警察で働らく馬は、デモの大群衆にもまれても驚かず、催涙ガスにも馴れる訓練を受けている。

◎ 四八、四、二八 これはアメリカ南部のロデオを中心に、馬と牧童を描く、ロデオは鍛錬と勇気がいる。それがロデオの魅力でもある。馬のグルグル廻り、投げ縄、特別な馬の訓練、勇敢な一人の牧童チャレアーダが優勝するまでの記録。

◎ 四九、一、二七 ソビエトの雪祭りに行なわれるオルロフロッターやドン系のそりレース、馬スキーの競走を描く。

◎ 近頃ひろく愛好されてきたポニーもちょいちょいテレビ画面に出てきた。

四月五日NHK AM七、五〇

これは町田町のポニークラブ、欧州旅行でフット見たポニーに魅せられた若人達が作ったクラブ、少年にも大人気。このクラブを全国的にひろめ、ポニーを通じて連帯をつくりたいという。

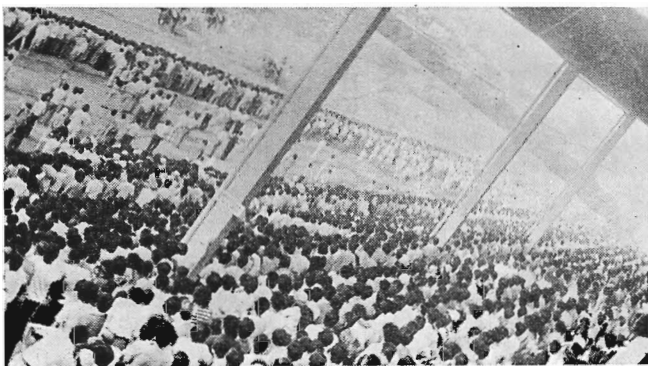
◎ 六月三十日 NHK AM六、三〇
これは北海道のポニー牧場の話、将来の代表的産業を目指して夢をいだく若い牧場主を描く。

15 大井アトラクションを

取材した報道記事

◎ 毎日新聞「プロムナード」
ああ！ばんえい

北海道名物の「ばんえい競馬」が十八日、大井競馬場の旧オートレース場で行なわれた。この競馬体重一トンという競走馬の倍もあるデカ馬が、総重量五百キロのソリを引いて走る(中略)遠く北海道からやってきた六頭の馬が激しい競走を行なった。涼しい地方から三〇度を超える東京に来て、各馬たちまじ汗びっしょり、サラブレッドとはくらべものにな



大井アトラクション (満員のスタンド)

知らない太い脚でふんばる。平地競馬より知らない東京のファンは「いやーすごい」「まるで西部劇だ」とすっかり「ばんえい競馬」の魅力にとりつかれていた。

◎ 朝日新聞「スタミナふりまいて、重いそりをグイグイ、北海道からばんえい競馬」

馬のスタミナとスピードを競う北海道ばんえい競馬が十八日、品川区の大井田オートレース場で開かれ約二万人の競馬ファンをわかせた。四、五百キロのオモリと騎手を乗せた馬そりを引っぱる姿は豪快そのもの、「サラブレッドでは見られない迫力だ」とファンは珍らしい競馬に大喜びだった。

サラブレッドの約二倍、アメリカ野牛のようにどっしりとしている。四、五百キロのおもりを引っぱってグイグイ走る姿に、ファンはため息、軽快さはないが、重量感と迫力は他の競馬では見られない、とファンはいう。

出稼ぎで上京し、たまたまこの日、ばんえい競馬をみた北海道滝川市の中井格さん(四九)は「この競馬の魅力は、馬の力強さが見られることです、サラブレッドはスピードだけで、都会的なひ弱さを感じられる、しかしこの競馬はどっしりとした雄大さというか、農村的なたくまじさが魅力です」と、久しぶりにみた馬になつかしうだった。

◎ 報知新聞「まるで戦車」

東都初お目見えのばんえい競馬、六二〇キロの重量をひいて北海道開拓時代に

活躍したベルシロン、ブルトンの子孫たちは「よっこらしょ」とパンケットを越える。象のような足にふさふさと長い毛をはやしたこれら一トン級の重ばん馬に、エネルギー枯渇の折り再度のお役が回ってくるか。

◎ 日刊スポーツ 東京にお目見得、北海道名物ばんえい競馬 オーツ この馬力、この迫力

十八日の大井競馬四日目、第六レースの返し馬終了後、スタンドは「ウオツ」と歓声に沸いた。この日レース終了後アトラクションとして行なわれるばんえい競馬に出走する六頭が顔見せに出てきたからだ。三番リッケイの一〇〇五キロを筆頭に最低のタカマスゴが九〇四キロ、普通四〇〇キロ台の競走馬を見なれた目には奇異に写ったに違いない。

首胸腹脚いずれを取っても競走馬の三



大井アトラクション みんなカメラをもって

倍以上、とりわけリッケイ、ヒラマザンの芦毛は歩くたびにタテガミがはね上り、迫力満点だった。

これは東京都特別区競馬組合江馬所長の発案「世界にただ一つのばんえい競馬を東京のファンに披露したい」との交渉がスムーズに進みお目見えした次第、北海道の開拓史とともに歩み、二十四年から馬券が発売されたばんえい競馬はファンに好評であった。

◎ 東京中日スポーツ「ヨッこれは面白い」迫力満点「ばんえい競馬」

鉄ソリを引っぱって走るこの競馬、騎手の「ヨッ」という掛け声で砂煙を立て、走る姿はまさに迫力満点で、暑さも吹っ飛んでしまう、会場の旧オートレース場は五時にスタンドを埋めつくした二万余のファンで一杯。「普通のレースより面白い、こちらまで力が入っちゃって、一般レースと組み合わせれば、競馬がもっと面白くなる」の声も。

◎ デイリースポーツ

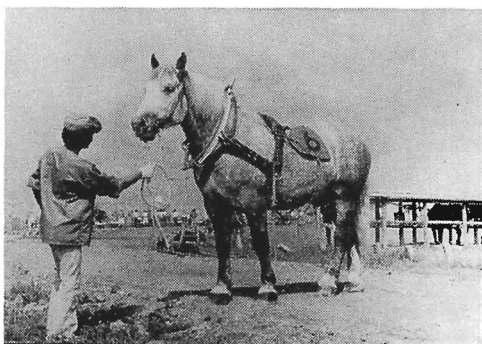
北海道名物「ばんえい競馬」東京進出 人気を背負って海越えて……

デイリースポーツは大井アトラクション開催を前に、北海道に出かけてばんえい競馬取材している。

十八日版 ゴール前横一線のたたき合いに手に汗握るファン、この言葉がびびりたりくるのが、いま北海道は岩見沢競馬場で行なわれているばんえい競馬だ。競馬法に取り入れられてすでに二十五年の歴史を持ち、北海道の名物としてすっか

り根を下ろしているが、中央の札幌競馬と同時に開催の土、日曜でも四千人のファンが詰めかけ、売上も一億円を下らないという人気ぶり。きょうあすの両日始めて東京に進出、その盛況ぶりと関係者の意気込みは洩り知れよう。

岩見沢のばんえい競馬、宣伝文句は「力とスピードのばんえい競走」だが、スピードだけを競うサラブレッドの競馬を見慣れているわれわれにはスピード感などはない、しかしゴール前の迫力、すさまじさは中央競馬の比ではない。一票を投じた馬が期待にこたえて連勝からむときなど全身が硬直するほどの興奮を覚える。違うことといったら、天気で重、雨が降って良という馬場状況の発表とサラブレッドが一ハロン一秒台で走るところを、怪物のようなばん馬は一分



「ばんえい」ダイセツに扮したカミカワシンザン号

五〇秒から二分以上かかる。

カイキオー、ワカタカ、フジイサミ、リキエイホーなど中央競馬で聞きなれた名前の馬も多い、「出脚速い」とか「障害巧み」「さし脚鋭い」など寸評が的を射ている予想紙もかなりの好評だ。

二尺の積雪がある冬でも最近は客足が減らなくなったという。「残の問題はジョッキーの馬主兼業、血統を正しく整理する問題」と今後の計画はまことに遠大十九日版「あれでもウマか ばんえい競馬が顔見せ」

「すごい!!まるで象だナア」本馬場に出でてきて顔見せをした「ばん馬」六頭は、スタンドを埋めつくしたファンの度胆を抜くに十分なものだった。一トンもあろうという巨馬が、ノッソノッソと砂をふき上げて歩く姿は、サラブレットを見なれているファンには、ただ異様に映ったに違いない。

北海道名物「ばんえい競馬」が初めて関東へ進出、五百キロ以上のソリを引っぱって、二つのパンケットを乗りこえるのだから、まさにスピードと力を要する壮烈な競馬である。

砂ぼりの中を、ざっと二万人近いファンが押しよせたのだから人気は大したもの。珍らしさもあって、ファンは馬の近くに駆けるなどその場から立ち去らうとしなかった。

「お客さんが喜んでくれて本当に良かった、でもこんなに入るとは思っていなかった」(江馬開催委員長)の言葉でわ

かるように、このアトラクションは大成功に終わったといえる。

16 平凡パンチ―七月号

表紙―旭川ルポ

のんびり楽しもう ばんえい競馬

―幌曳競馬―全録!!

千キロの巨馬が走り喘ぐ エネルギー爆発

旭川市営競馬はばんえい競馬のメッカである。さすが北海道だけあって、右手にまだ雪をかぶった大雪山、左手に十勝岳、あとは見渡すかぎりの原野だ。

パドックに入ってきた出走馬を下見して驚いた。

せん細なサラブレットを見なれた目には、なんともたくましいとおうか、ドでかいとおうか、正直いうと、近寄る



阿寒町十条製紙造材山 (岩崎技師写)

のがこわいぐらいの馬たちが、小象の足ぐらひはあるヒツメをガタガタさせて歩いているのだ。

このばんえい競馬、スタートしたのは昭和二十二年、そのかぎりでは歴史の浅い競馬といえるが、現在でも北海道の各地に残っている。お祭り競馬を見てもわかるように、開拓農民とばんえい競走の歴史はずっと古いのだ。

いわば北海道開拓民のきびしい生活の中から生まれ育った競馬なのだ。

サラブレットが人間の作った芸術品なら、ベルシロン、ブルトンは人間の作った民芸品だ。品芸品達は二十才のカワイコちゃんの誘導馬で馬場に入場する。戦車みたいにデカイ馬たちがズンズンとついていく。

電光掲示板に出る「晴れ重」「雨軽」という表示は、平地競馬と反対で面白い。

ゴール前の第三障害にさしかかると、これはもう、全馬がとまっちゃって息をなく。ここでほとんどの馬がかたまってしまうから、もう一度スタートのやり直してみたいなもの。

しかし、ここが「ばんえい」のヤマバであるらしく、ファンの声援や、まるで思い思いの振りで、踊りをおどっているような派手なアクションをまじえた騎手たちの「オーリャーオーリャー」とはげます声、一段と高まる。それだけではない。走る馬といっしょに、スタンドの客たちが一斉に移動するのだ。



阿寒町造材山 (岩崎技師写)

普通競馬のジョッキーは、少年時代から厩舎で過ごし、社会的に隔離された世界に住んでいるが、ばんえいの騎手は、別に本職をもっている者が多く、日常生活や労働と密着しているわけだ。

馬も同じで十二月から四月までのオフシーズンには、三分の二が、材木や客土(耕地の改良に入れる土)の運搬をして働く、これが同時に調教にもなるというわけだから、いかにも生活のにおい、土の香りがするではないか。

殺氣立っているわけではなく、場内には、ひどく土のにおいがするムードがいっぱい。それは、生活に結びついた馬への愛着のせいなのだろう。

けっしてキングオブスポーツではないが、ヒョットするとこれがホントの競馬なのかもしれない。

昭和49年度 北海道地方競馬ばんえい番組編成要項

1. 出走馬の種類 重種・中間種（除軽半血種）
2. 出走馬の資格
 - (1) 地方競馬全国協会の登録を受けた馬
 - (2) 新馬，明6才以下 古馬，明13才以下（再登録馬は血統証明証に地方競馬全国協会の認印のある馬）
 - (3) 馬体重 3才 650kg以上の馬 4才以上 700kg以上の馬
 - (4) 馬体検査・能力調教検査に合格した馬。
3. 出走の制限及び拒絶
 - (1) 外国産馬
 - (2) 痼疾の程度が重く，又は外観上醜い馬
 - (3) 薬物検査で陽性となった馬で出走を拒否されている期間。
 - (4) 出走取消をした馬は，その回の残余期間。
 - (5) 尋常蹄鉄を使用しない馬。
 - (6) 競走上の癖馬おらび失明馬（片眼馬を含む）
 - (7) 委員長が公正確保上出走させることができないと認めた馬。
4. 出走頭数の制限及び競走の取り止め
 - (1) 1競走における出走頭数は10頭以下とする。
 - (2) 出走投票の結果，1競走の出走頭数が5頭以下の場合はその競走を取り止め新たに競走を設けることができる。ただし偶発的事故または疾病等により出走を取り消し，または競走除外，発走除外を命じた場合を除く。
5. 負担重量
 - (1) 騎手の負担重量は73kgとする。
 - (2) 馬の年令重量 3才馬は240kg，4・5才馬は260kg，6才以上は280kgとする。
 - (3) 雌馬は競走において10kg減量とする。
 - (4) 平場競走において，委員長の指定する騎手は，通算勝利率数により減量する。
6. 競走の区分
 - (1) 取得賞金額により，それぞれ編成し，年令別に下記のとおりとする。

3才	3才馬のみの編成とする。
4・5才	4・5才馬の混合編成とし，取得賞金額 180万円以上の馬は，6才以上の競走に編入する。

昭和四十九年度 報 償 費

- | | |
|---|---|
| <p>○ 出走手当
次の該当する馬の馬主に対して支給する。</p> <p>イ、競走に出走したとき
ロ、特別報償金の受給資格のあるとき。</p> <p style="text-align: right;">二五、〇〇〇円</p> <p>○ 着外手当
競走に出走し、6着以下の馬の馬主に対し、次の区分で支給する。ただし、失格および競走中止の場合には支給しない。</p> <p>重賞競走 三〇、〇〇〇円
特別競走 一〇、〇〇〇円
一着賞金三〇万円以上 一〇、〇〇〇円
一着賞金六〇万円以上 二〇、〇〇〇円
平場競走 一着賞金十五万円以上 五、〇〇〇円</p> <p>○ 特別報償金
次の該当する馬の馬主に対し支給する。</p> <p>イ、出走投票の結果、一競走の出</p> | <p>走頭数が五頭以下のため競走が取り止めになり出走できなかったとき。</p> <p>ロ、競走除外、発走除外等で同枠のため除外になったとき。</p> <p>ウ、天災その他やむを得ない理由により開催当日に競走を中止したとき。</p> <p>イのとき、その競走の五着賞金額ただし一〇、〇〇〇円を限度とする。（ただし調教師賞、厩務員賞においてもこれに準ずる）</p> <p>ロのとき、その競走の三着賞金額（ただし調教師賞、騎手賞、厩務員賞においてもこれに準ずる）</p> <p>ウのとき、その競走の賞金と着外賞金の合計額を出走予定頭数であん分した範囲の額</p> <p>○ 輸送手当
競馬場毎に一回以上出走した馬（特別報償金受給資格を有した馬を含む）の馬主に対し、当該競馬場毎に支給する。</p> <p>輸送手当 五、〇〇〇円</p> <p>○ 調教師賞
調教専業騎手</p> |
|---|---|

昭和四十八年度ばんえい便り

1 競馬場新設続々

北見競馬場移転新設工事は一昨年二六ヘクタール余の整地を終って、昨年から工作物の建造にかかり、本年六月一杯で完成の予定、昨年最終回の競馬で特に宇佐美市長は馬場内から、観衆にむかい、現在の競馬場とのお別れと、永年の支援に対し感謝の挨拶をした、今の東陵町の競馬場は昭和四年に一哩馬場を設けて祝典競馬をやったとあるから、それからもう四六年を経過したことになる。

2 競馬監督課長の来道

農林省角堂競馬監督課長は重松

事務官を帯同し、八月四日第二回岩見沢競馬に來場され、午後半日間熱心にばんえい競走を視察された、

3 全国協会山本理事旭川に

地方競馬全国協会山本理事は伊藤秘書課員を帯同、六月二日第三回旭川競馬に來場、ばんえいリールデングジョッキー賞授与をかね、ばんえい競走を視察された。

4 会計検査

農林省競馬監督課の田口義也、加藤忠次の両氏は八月十四日、十五日両日帯広市、同じく河合生吉、重松宜志の両氏は一〇月一七一八日の両日旭川市の競馬会計監査を行なった。

5 競馬監督

農林省競馬監督課新田、御園生両事務官は七月二〇、二一日両日北見のばんえい競馬を監督、折柄

の大雨で馬場は軽く水煙をあげて疾駆する重ばん馬のレースを満喫終了後講評の上翌朝離北された。

6 大井の江馬所長來道

大井ばんえいアトラクションでばんえいと大井はすっかり近くなった感じだが、東京都特別区競馬

7 調教師に馬房割当

ばんえい出走馬は年々増加し、前年最終回の調査では四八年出走希望馬は七五〇頭余に達したので、各競馬場には到低収容できずその頭数を五〇〇頭に制限し各調教師に馬房の配分をした。

8 札幌で馬祭り

最近馬の人氣が大いに上り、特に競馬界は大井の怪物ハイセイコーで、競馬を知らない人にまで浸透する大評判、中央入りしてからは必ず優勝というワケにも行かなかったが、出るたびに一番人氣で首位を争った、春以来北海道新聞社を中心に馬産地北海道で馬祭りをやろうという企画が盛り上り、六月六日から十日まで五日間札幌三越で展示会が開かれた。ここでもハイセンコーは生い立ちから現在までの活躍を写真で紹介され人氣が一番、馬に関するあらゆる物が出展され、ばんえい競走については入口の看板に書かれた趣意書の三分の一を費やして紹介され

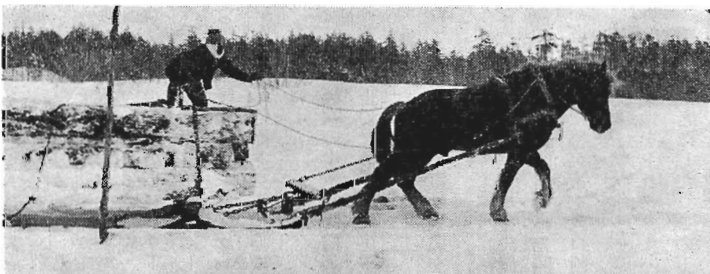
9 馬主会騎手会

新事務所開設

本会事務室に仮り住まいしていた馬主会騎手会は、昨年四月旭川市七丁目中川ビル六階に新事務所を開設し、五月十六日盛大に事務所ひらきの祝典を挙行了した。なお新事務局長は前旭川市畜産課長の墓田大二氏。



豊富町稚咲内 (その1) (南坂氏提供)



豊富町稚咲内 (その2) (南坂氏提供)

10 日本馬事協会への入会

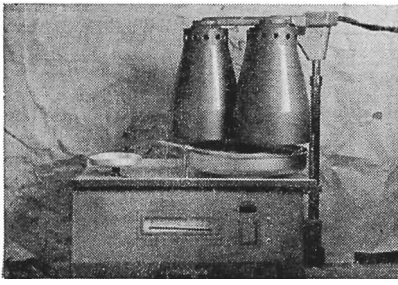
本会はかねてからの勘察にこたえて昨年四月、日本馬事協会北海道支部に入会した。今後生産団体と共に北海道の馬産を考えていこうとする体制をとったわけである。

11 赤外線水分計の採用

馬場の変化によって大きく変わるばんえい競走であるから、見た目による重い軽いの判定は不正確だと判り、昨年は赤外線水分計を購入、試験的に使用した。その結果は良好なので本年から本格的にこれを使用することになった。

12 盛大だった盆踊り大会

ばんえい調騎会主催の盆踊り大会



走外線水分計

会は八月一五日岩見沢競馬場スタンド前広場で行なわれた、既舎は留守番を置いて総出の約三〇〇人、職員の出場も多数で競馬ならぬ舞踊の技術をきそった。

13 岩見沢納涼花火大会

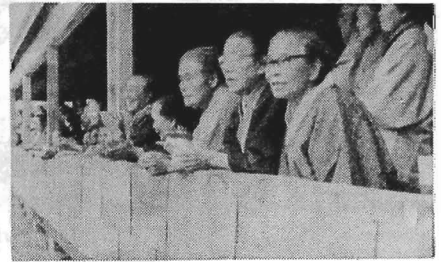
岩見沢競馬場の花火大会もこの土地の名物になった。ことしは第二次岩見沢市営競馬最終日の八月六日午後八時半から盛大に行なわれ、人出は前年に劣らぬ約一万、駐車場も一杯、大玉の爆発音に馬はどうかと案ずる向もあつたが、一寸ビクッとした程度で、すぐ馴れてしまったそうである。

14 炎暑型夏の到来

五月三日旭川で開幕したばんえい競馬、五月の始めと終りに底冷えのする寒い日があつて「スワル冷害か」と眉をひそめたのも束の間六月に入って十何年ぶりという猛暑型の夏到来、暑い暑いと三十度をこす日がつづき、八月末第四回旭川競馬場までの九回五四日間に晴天炎暑三八日と記録された。曇天四日、雨は一二日であつた。

15 脚部腫脹の奇病発生

昨年は七月頃から下肢が腫れ、中には皮肉から滲出する液が蹄まで流れている馬があつた。これは



第13回廉追町鞍馬競技大会 9月9日レース



テッキリ軽量レースの結果心臓がやられたのではないかとこの憶測まで飛んだが、この現象は道営の平地競馬にもあり、どうやら原因は炎暑つづきの異常夏型にあるらしく、本会次長が道診療部におもむき研究の結果、特効薬もわかつて夏が終る頃にはほとんど全治した。

16 全国協会主催実務研究会

八月二九日から三一日まで三日間旭川市において開催、昭和四二年以来毎年開催してきたばんえい競走実務研究会は四七年一年休み、昨年で第六回目である。協会からは中村理事、若月調査役野口、浅井、川村、吉岡各専門役それに杉浦課長が来旭、例年になく充実した研究会となつた。各市および本会からは二四名が出席した。

17 騎手講習会

本会主催の騎手講習会は九月一八、一九日帯広市労働会館で開催講師は本会鈴木次長小路口課長串岡技師受講者一〇二名。

18 ことしの改善

☆ 対面着順判定写真にも開催日附を入れる装置をつけた。
☆ VTRテープに十分の一秒き

ざみのタイムを入れる装置をつけた、これでストップしている時間などをはかることができるようになった。

☆ ゴール前方からパトロールVTRを撮影できるようにした。
☆ そり後端のナンバープレート改善し対面タワーからの撮影を明確にした。

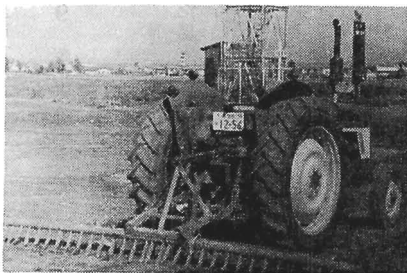
☆ 手網後端の中重量物結着部の解脫防止のため手網に尾錠どめをつけた。

☆ 練習発馬機に電動式扉を装着した。

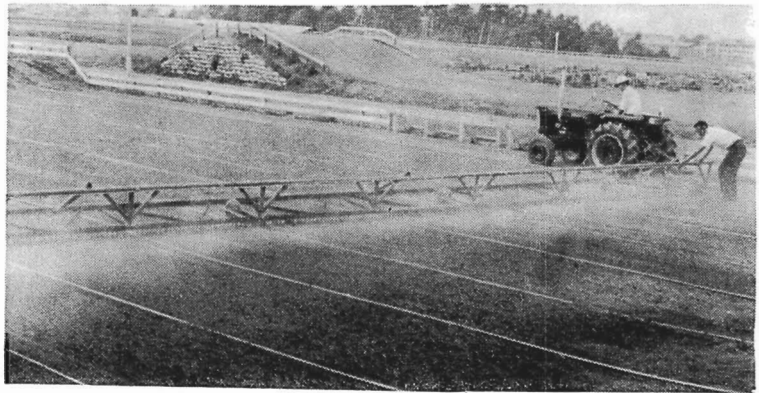
☆ 場内監視用テレビを設置した

☆ スタート合図前の鼻先開扉突進防止のためゲート入口附近に丸太を埋め込んだ。

☆ 走路整地をトラクターハローでやることにした。このトラク



トラクターハロー (帯広)



撒水機の試作試験

見沢を皮切りに旭川、帯広と進められ、平坦地の実験は概ね完了障害地点の実験を翌年に残した。

☆ 旭川では執務員と口取り馬丁送迎のため馬場入口から発走地点までの往復に小型バスを運行することにした。

☆ 帯広では投票係女子従事員全員に事務服を貸与着用させた。

☆ パトロールVTR一機をカラーテーブにした。ただしこれは業者のサービ



事務服揃う(帯広)

21 北見競馬の歴史を語る座談会

北見競馬場の移転新設、市営二〇周年を記念して一月二日、同市市民会館で座談会が開催された。野付牛競馬の大正年代から現在までの北見競馬開催担当者が一堂に集まり、五〇有余年の歴史が語られた。出席者二名、本会からは事務局長が出席。

22 東京で農ばん馬血統証明問題検討

東京駿河台にある日本馬事協会では十日二十六日農林省、道、全国協会、軽協、関係農協および本会を招致して農ばん馬の血統証明制度について協議会を開催した。

23 騎手試験

一〇月二四日から二七日まで帯広競馬場で行なわれた、試験委員は全国協会野田調査役、野口、浅井専門役、受験者九七名。

24 田垣住雄氏の逝去

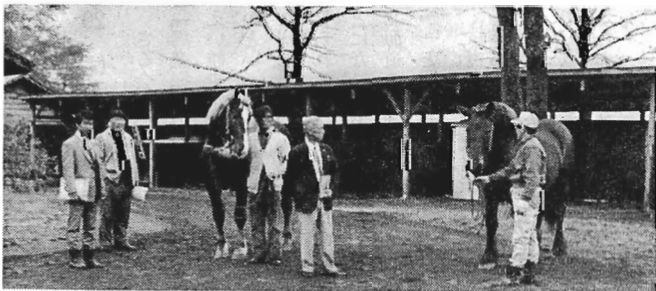
畜産と馬の権威、酪農大學講師田垣住雄氏(元陸軍獣医少将)は昨年、七月一〇日逝去された。同氏のばんえい競馬に対する貴重な研究、文献はしばしば本誌で紹介したところ、それはばんえい競馬

不滅の指標となっている。(いづれ本誌に全文掲載の予定)

25 全国協会東駐在員の計

全国協会北海道駐在員東肇氏は病氣療養中の処一〇月一七日逝去された。氏は岩見沢市元農務課長、昭和四六年全国協会駐在員(ばんえい担当)となり、本会囑託でもあった。

九月帯広、十月の始めには北見に出張公務を遂行、十月下旬病勢あらたまり入院されたが、ベット



元気だった頃の東さん

ターは撒水用にも使用。

☆ 本会試作の撒水機使用試験は六月二日岩見沢競馬場で行なった。旭川でもこれを若干改良して試作した。この結果けん引力その他になお研究の余地があり、今後なお継続して研究を行なうことにした。

☆ 全天候型走路の試作実験。

本会次長考案の全天候型走路の試作実験は市の応援を得て岩

19 アメリカ競馬運営研修

旭川市大久保審議員および本会内田事務局長は全国公営競馬主催者協議会の主宰するアメリカ競馬運営研修団に加わり、九月二六日羽田出発、カナダのトロント市にある競馬場を含めて全十ヶ所の競馬場を見学研修、二三日間の旅行

20 開催回数陳情

本会々員四市はいづれも競馬場を新設、既に岩見沢は完成し、毎年追加工事を実施中、北見帯広は四九年春完成、旭川は五〇年完成を目指している。そのほか馬産奨励事業の推進、待遇その他の改善、施行体制の強化等の経費捻出のため各市四回以上の開催実現を懇請するため二月二日、四市

で、本年二月二八日道および旭川帯広三市で、農林省当局に陳情した。

の下に関係書類を持参し片時も公務のことを忘れなかった。

26 安達幸三氏の逝去

道営競馬協力会嘱託安達幸三氏は昨春来入院加療中のところ薬石効なく九月三日逝去された。氏は道市でばんえい競馬をやっていた頃の委員長兼審判委員であった。長く種畜係道職員として勤務、本道の数少ない馬技術者の一人であり、昭和三十八年には種雄馬購買のため遠く欧州に出張し、馬事功勞者として表彰されている。氏の

家系はスポーツの名門として知られ、何人かの国際選手を出しており、彼も又若き頃の名ジャンパーであった。

27 小ニュース一束

☆ 年間一六回九十六日、全九七七レース、出走馬四六三頭、入場者三三一人、六七七人一日平均三、四五五人、売上げ一〇、〇七一、五五二、九〇〇円一日平均一〇、四八九円で、すべてが発足以来の記録

☆ ファンも飛躍的に増加したが

八月の岩見沢では外人のお客さん十五、六人が三日間ばかり見物にやってきた、珍らしいこの競走に目をみはったり、馬券を買ったり声援を送ったり、大変なはしゃぎよう。

☆ 同じ岩見沢の話、或るファン道営競馬と間違つて入場してみると見たこともないばんえい競走、噴まんやる方なく、係員をつかまえて宣伝の不徹底をなじったが、ままよこりなりヤ一寸見ていくかとスタンドで一服かたがた見てるうち、馬券も買っ

てみたくなり——が病みつきとなりもうばんえいならではの常連ファンになったとか。

☆ 昨年はまた名馬が死んだ。重くてよし軽くてよしの駿足ジョウホウ、重厚歩様軽快の名馬ユージヤなど。

☆ 札幌・函館の中央競馬は本年から馬券発売にトータリゼータ導入とか、道市営競馬も事務の迅速省力化のため昨年十一月末道市および本会職員で府県の馬券発売機械化状況を視察。

28 日本馬事協会総会に

馬政のテーマ

去る二月二十六日開催の日本馬事協会定期総会に提出された明年度予算案に、ばん馬の血統証明事業調査費が計上された。愈々この改革も実施のはこびとなった。

出席者は元農林省の馬産課長競馬部長、国営競馬の総師だった井上綱雄氏始め農林省馬政の元高官がズラリ、それに馬産団体、生産者の面々といったところ。

臨時の農林省家畜改良課副課長は出席者に対し「今後の馬政は馬産農家の生産経済がうるか否かに根幹がおかれるであろう。今後の馬政はいかにあるべきかを考えて欲しい」とテーマを出された。ばんえい主催者がばんえい競

馬資源確保対策で構想した照準とピタリである。

29 ばんえいの理解まだまだ

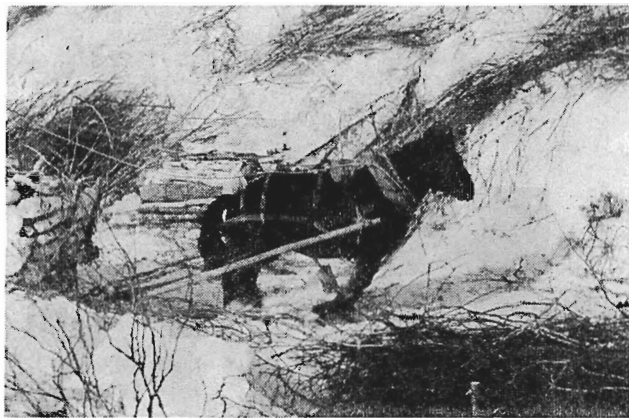
さる会合で東京のある人から「馬産振興のため各競馬場でばんえい競走をどしどしやったらどうか」といったら、競走中とまるようならばん馬をやったらやおちょうと見られる。毎日大騒ぎで大変なことになってしまふ、といわれた。北海道のファンはおとなしいのか」と聞かれた。

これでは「ばんえい即八百長」ときめているようなものだが、いやしくも自治体が行っている競馬で、八百長をやらして利をむさぼるなどは論外の論、問題にならない。

常に審判技術の練磨に努め確固たる自信を持っている。また平地競馬とは比較にならないような厳しい規制もしている。この会報を創刊号から読んでいただくことにしたが、以前には友人筋からもこんな話が出ていたのだから無理もないことか。



美深町智え文14線の択伐 (南坂氏提供)



美深町智え文の択伐造林 (南坂氏提供)

昭和48年度種雄馬ランキング

5 才 以 上

順位	種 類	馬 名	登	勝	取得賞金	おもな出走馬
1	ベ ル	オ ナ シ ス	15	44	15,368,000	カツタロー, ダイニミハル
2	ベ ル	ゴ ジ エ ー ル	12	20	8,981,000	ライマンオー, ハツタロウ
3	ベ ル	ベルボオンシエー	17	40	7,984,500	ミサイルキング, ボンシー
4	ベ ル	映 昭	5	26	7,236,000	ハヤブサ, バラト
5	ブ ル	ケルネヴェーズ	6	22	6,534,500	タカラコマ, カツタカラ
6	重 半	丹 風	5	19	5,775,000	ヒツシヨウ, ワカテンリュウ
7	ブ ル	キ プ ロ ク	7	34	5,503,000	アラナミ, コウハタ
8	ブ ル	オ ラ テ ー ル	4	12	5,216,000	カゲコマ, モリヒカリ
9	ブ ル	陳 悌	4	12	4,211,000	カネイサミ, ロンジ
10	重 半	第13グラウンドン	1	10	3,720,000	ダイニアンテン

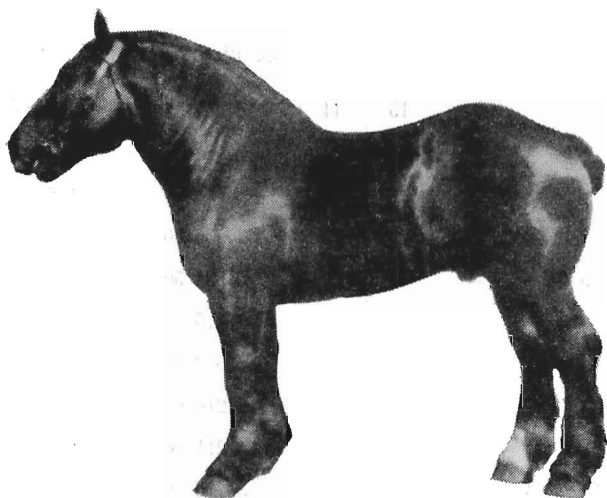
4 才 種 雄 馬

順位	種 類	馬 名	登	勝	取得賞金	おもな出走馬
1	ベ ル	オ ナ シ ス	4	19	2,925,000	ダイニメイホウザン, カツタイホー
2	ブ ル	リ ュ ー テ ル	2	9	2,221,000	フジノリュウ, ユウザン
3	ブ ル	鉄 鯉	4	7	1,557,000	リシユウ, ロンプウ
4	ブ ル	キ プ ロ ク	1	10	1,519,000	アラナミ
5	ベ ル	映 昭	1	6	1,347,000	ヤマトフジ
6	ベ ル	ウ ル パ ン	2	5	1,334,000	ダイキング, ミスオサシマ
7	重 半	丹 風	2	12	1,282,000	キタカゼホープ, ハヤツネ
8	ブ ル	ウ レ マ	2	5	1,255,000	チロル, ユウテン
9	ブ ル	陳 悌	1	4	1,234,000	ロンジ
10	ベ ル	タ ン ブ ー	2	5	1,186,000	シユンオー, ヒラマザン

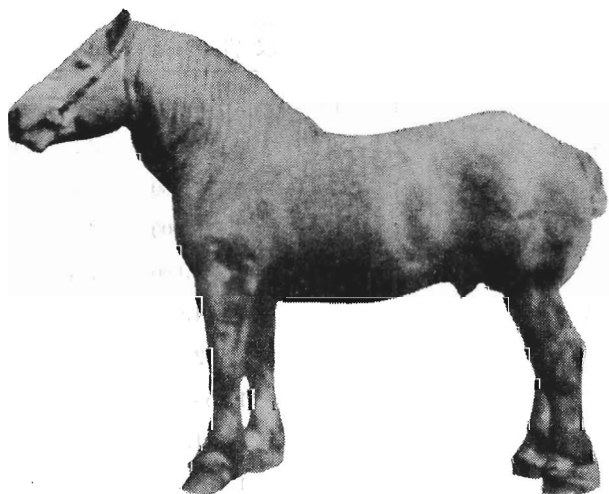
3 才

順位	種 類	馬 名	登	勝	取得賞金	おもな出走馬
1	ブ ル	キ プ ロ ク	3	15	2,250,000	ダアリングダリ, キプオーザン
2	ベ ル	映 昭	1	5	1,782,000	ソウシン
3	ブ ル	ケルネヴェーズ	2	7	1,768,000	カツタカラ, フシノオー
4	ベ ル	詠 旭	2	7	1,666,000	カチタカラ, ワカタカ
5	中 半	豊 杯	2	10	1,661,000	サロマテンリュウ, コマサカエ
6	重 半	恵 清	1	9	1,580,000	シンツバメ
7	ベ ル	オ ナ シ ス	4	6	1,497,000	ノヘジトツブ, リンダア
8	ベ ル	宝 勝	2	5	1,481,000	エイシヨウ, ミスコハマ
9	ベ ル	2世オデオン	2	4	1,414,000	ライデンオー, コハマ
10	ベ ル	ア プ レ ス	6	6	1,395,000	ブラツクパンサー, アバシリコマ

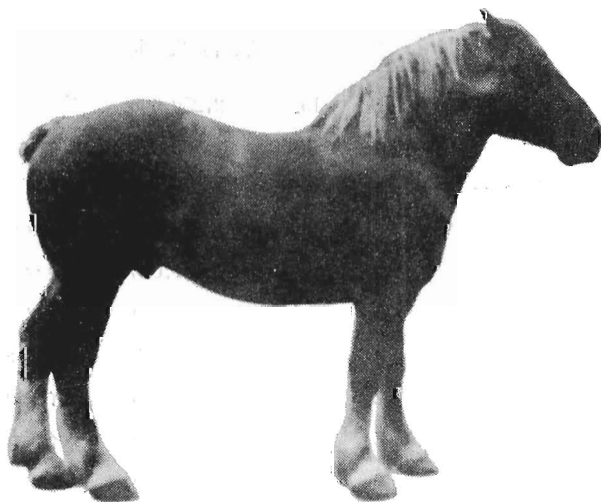
昭和48年輸入仏国産種雄馬（日本馬事協会購買）



ペルシユロン種
フランドール号（釧路）



ペルシユロン種
ユレカ号（北見）



ブルトン種
ファンシヨン号（十勝）

全米に馬はふえつつあり

十勝農協連永田畜産指導課長談

「これが力くらべの競走だ」

ばんえい馬主の早来の橋本善吉さん、壮警町の森英夫さんが、アメリカから重ばん馬を輸入してきたが、月世界にまで人間が飛んでいくような機械文明の最も発達している国で、なぜ重ばん馬が必要なのだろうか、アメリカ産のポニーとアパローザ購買のため渡米する十勝農協連の永田氏にその話をしたら、氏もそれを考えていてこの機会になんとか調べてきたい。もし優秀ならば今後米国産重種の輸入を考へてもよいわけだ。長年英仏の種馬を輸入してきたが、ひろく各国に目をひろげて検討すべきだといわれ、気持ちは一一致した。

九月下旬永田さんはカリフォルニアで予定の購買を終えウイスコンシン州の馬産家を訪問したが、あいにくのどしや降りで五カ所位しか廻れなかったそうである。

その旅行記をこの会報にのせる約束だったが、多忙に追われて実現できなかった。明年はぜひこの会報の目玉記事として紹介したい。

今アメリカには馬がふえつつある。なぜか……アメリカでは馬のショウが盛んで、重ばん馬が展示され、六頭八頭曳きできれいな馬具で飾りたてて、馬車をひいたり、馬車競走をしたりするそのショウ用として、もう一つは肉用である。ということを知っていたが、それだけでそんなに必要なのかと疑問に思っていたら永田氏の調べでは違うのである。なるほどショウも多いが輸送や農耕にも相当多

くの馬が働いている。機械だけでは駄目だというんだそうである。肉用需要はこの国でも無限といわれるほどだが、日本でも一年に十二万頭分位の馬肉が輸入されているのだから、これは日本の総馬数をはるかに上廻る。さくら肉を食べることは日本人として抵抗があるが、生物生存の原理をひたかくす必要もないと思う。

昨年の本会座談会で佐伯元畜産課長は「原産産業を振展させなければならぬ時代は必ずくる」と喝破されたが一年もたたない内に石油危機である。必要な資源を出来る限り生産保持し一朝有事（輸入危機）にそなえることが必要と思われる。

永田さんの面白い報告がある。アメリカのばんえい競走だ。二頭曳きでバチのような櫓に重量物二千キロをのせる。ヨードンで走り出す。競走距離は三十分イート（十米）そこで又積み込み又三十分イート行く。又積み、というやり方で最後に残った馬が優勝、大体三千キロ以上までひくそうである。これぞ正しく力くらべのばんえい競走だ。

二頭で三千キロ一頭分千五百キロだから、重ばん馬として結構なものだ。一着賞金百ドル（三万円）は入場料でまかなう。入場者は三千人から四千人位だそうである。

(U)

【編集後記】

この会報はばんえいとはどんな競走か、どうして生れたのか、どのような意義を持つのか、どのようにやっていくのか、その歴史と改善の「道のり」を専門家にも素人にもわかりやすく理解して頂くために創刊された。

その理解がどこまで届いたか「マスコミに取上げられたばんえい」を尺度として創刊以来掲載してきたが、昨年の報道は多すぎていささか詳細すぎた感じ。

地全協の中村理事が昨年八月の実務研究会でされた挨拶を頂戴して掲載したがこれは今後のばんえいの進路を示すもの。

昨年に引きつづき本道馬事指導者No.1の村山氏が「ドサンコ」を書いて下さった。ドサンコに関する貴重な文献としてまた、読物としても愉快で表現の達者、流麗な文章は、非凡で敬服のほかない。

HBCドラマ「ばんえい」に上フ山本既舎のカミカワシンザンが、たくましく美しい無言の名優として老馬「ダイセツ」を演じた。

今日四月一日、ことし十六回の開催がきまった。この実現に努力して下さったご当局の方々に感謝し、ご期待にこたえたい。

昭和48年度 主催者別売得金成績

市 営

主 催 者	期別	売 得 金 額	1 日 平 均	賞 金 額	入 場 人 員	1 日 平 均
旭 川 市	1	515,722,100	85,953,683	14,537,000	24,770	4,128
	2	487,020,500	81,170,083	16,303,000	17,630	2,938
	3	617,323,100	102,887,183	19,751,000	21,100	3,516
	4	859,489,600	143,248,266	23,272,000	29,600	4,933
	計	2,479,555,300	103,314,804	73,863,000	93,100	3,879
帯 広 市	1	496,179,700	82,696,616	10,648,000	17,410	2,901
	2	645,860,700	107,643,450	11,511,000	22,440	3,740
	3	502,520,600	83,753,433	12,075,000	14,115	2,352
	4	679,536,900	113,256,150	14,543,000	18,035	3,005
	計	2,324,097,900	96,837,412	48,777,000	72,000	3,000
北 見 市	1	389,033,000	64,838,833	10,651,000	15,412	2,568
	2	491,905,300	81,984,216	11,100,000	15,234	2,539
	3	440,348,600	73,391,433	14,310,000	12,240	2,040
	4	700,771,500	116,795,250	16,713,000	18,575	3,095
	計	2,022,058,400	84,252,433	52,774,000	61,461	2,560
岩 見 沢 市	1	793,742,500	132,290,416	15,192,000	31,080	5,180
	2	608,478,100	101,413,016	16,598,000	19,269	3,211
	3	783,037,400	130,506,233	20,115,000	26,121	4,353
	4	1,060,583,300	176,763,883	28,224,000	28,645	4,774
	計	3,245,841,300	135,243,387	80,129,000	105,115	4,379
合 計	16	10,071,552,900	104,912,009	255,543,000	331,676	3,454





道 営

競 馬 場	期別	売 得 金 額	1 日 平 均	賞 金 額	入 場 人 員	1 日 平 均
岩 見 沢 市	1	1,100,973,800	183,495,633	25,340,000	57,189	9,531
	2	1,022,128,800	170,354,800	29,480,000	37,918	6,319
	3	1,233,622,800	205,603,800	34,200,000	40,186	6,697
	4	1,198,062,200	199,677,033	36,200,000	34,547	5,757
	5	1,236,805,800	206,134,300	40,760,000	33,629	5,604
	6	1,532,227,200	255,371,200	44,840,000	42,219	7,036
	計	7,323,820,600	203,439,461	210,820,000	245,688	6,824
帯 広 市	1	560,282,400	93,380,400	31,040,000	27,582	4,597
	2	606,249,200	101,041,533	35,420,000	24,265	4,044
	3	643,290,800	107,215,133	36,520,000	24,010	4,001
	4	780,676,200	130,112,700	37,360,000	28,875	4,812
	計	2,590,498,600	107,937,441	140,340,000	104,732	4,363
札 幌 市	1	2,443,627,200	407,271,200	47,780,000	81,053	13,508
	2	2,346,292,200	391,048,700	48,880,000	70,059	11,676
	3	2,602,420,000	433,736,666	57,060,000	75,973	12,662
	4	2,731,269,600	455,211,600	57,960,000	76,668	12,778
	計	10,123,609,000	421,817,041	211,680,000	303,753	12,656
合 計	14	20,037,928,200	238,546,764	562,840,000	654,173	7,787

昭和49年度 競馬開催日程表

<市営>

昭和49年度 市営競馬開催日程表

 旭川
  岩見沢
  北見
  帯広

○は日曜・祭日

	昭和49年度 市営競馬開催日程表																														
	1	2	3	4	5	6	⑦	8	9	10	11	12	13	⑭	15	16	17	18	19	20	⑳	22	23	24	25	26	27	㉑	㉒	30	
4																															
5			③	④	⑤	⑥			旭川 ①																						
6		②																													
7							⑦																								
8		②																													
9	①							⑧																							
10						⑥																									
11			③	④																											

昭和49年度 道営競馬開催日程表

<道営>

○は日曜・祭日

	昭和49年度 道営競馬開催日程表																														
	1	2	3	4	5	6	⑦	8	9	10	11	12	13	⑭	15	16	17	18	19	20	⑳	22	23	24	25	26	27	㉑	㉒	30	
4																															
5	岩1		③	④	⑤	⑥																									
6																															
7																															
8																															
9	①							⑧																							
10						⑥																									
11			③	④																											

昭和49年 4 月

札幌市中央区北 4 条西 4 丁目労金ビル 5 階 (TEL) 代表 221 - 9171